

学部・研究科等の現況調査表

研 究

平成28年6月

奈良女子大学

目 次

1. 文 学 部	1 - 1
2. 理 学 部	2 - 1
3. 生活環境学部	3 - 1
4. 人間文化研究科	4 - 1

1. 文学部

I	文学部の研究目的と特徴	1 - 2
II	「研究の水準」の分析・判定	1 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 8
III	「質の向上度」の分析	1 - 9

I 文学部の研究目的と特徴

1 研究目的

文学部では、学部と学科の研究目的を資料 I-1、I-2 のように定めている。

(資料 I-1：学部の研究目的)

文学部の研究目的は、本学の基本理念に基づき、人間性への深い洞察に根ざした人文社会科学的な知をもって、人間及びそれを取り巻く世界にかかわる諸問題の研究を学際的・総合的に推進することにある。高度な基礎研究及び応用研究の進展を図り、研究成果を社会に積極的に発信するとともに、地域社会のニーズを踏まえた研究や国際的に貢献できる研究に取り組む。

(資料 I-2：学科の研究目的)

人文社会学科は、歴史学・社会学・地理学を主たる研究領域とし、日本の古代文化発祥の地である奈良をはじめとして、日本や世界の歴史・社会・文化・地域の特徴を国際比較の観点から学際的・総合的に研究する。

言語文化学科では、言語学・国語国文学・中国語中国文学・英語英米文学・フランス語フランス文学・ドイツ語ドイツ文学を主たる研究領域とし、言語文化の個別的なあり様とともに、その普遍的な言語文化の構造・特質・情報機能を学際的・総合的に研究する。

人間科学科は、教育学・哲学・倫理学・音楽・心理学を主たる研究領域とし、人間形成の諸問題、人間の諸行動、身体の諸問題について学際的・総合的に研究する。

以上、文学部ウェブページより

以上は、第2期中期目標において本学が掲げている「国際的水準の個性的、独創的な基礎研究や応用研究」に加えて「分野横断的な研究」すなわち学際的な研究を展開すること、さらに「地域に開かれた大学として社会連携を推進するとともに、アジア諸国を中心とした国際交流を推進する」ことに沿うものである。

2 特徴

- ① 学部の学際プロジェクト研究
学部教育と一体になった学際研究プロジェクトとして、現在「なら学」、「ジェンダー言語文化学」、「差異と交感の人間学」を推進している。
- ② センターとの協力体制に基づく研究
文学部教員は古代学学術研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センター、教育システム研究開発センター、国際交流センター、社会連携センター、共生科学研究センターの委員、運営委員、センター長などを兼任しつつ、研究を推進している。
- ③ 外部資金による学際研究
日本学術振興会の受託研究のほか、JST（国立研究開発法人「科学技術振興機構」）地域開発事業などの大型のプロジェクトに取り組んでいる。
- ④ 質の高い学術誌とまほろば叢書の刊行
文学部では紀要に相当する『文学部研究教育年報』（年1回）の刊行のほかに、複数のコースが独自の学会組織を有し、学術誌を発行している。また、文学部の研究を一般社会に発信するため「まほろば叢書」を刊行している。

[想定する関係者とその期待]

文学部における研究活動は、広範な分野を対象としており、学部の研究目的に沿った個性的、独創的な基礎研究や応用研究、学際的な研究、アジア諸国を中心とした国際交流などの推進が期待されている。また、地域社会からは奈良や現代社会の諸課題に関する有益な研究の推進が期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定 分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

① 研究実施状況

A. 学部プロジェクト

文学部では各学科を母体に共同で推進する研究・教育プロジェクトとして、次の3つの学際的研究を推進しており、『文学部研究教育年報』で特集を組んで、成果を公表している。

○「なら学」＝学際的研究、地域をテーマとする共同研究

人文社会科学を中心とする、歴史ある奈良の社会や文化の特性を現代的視点から読み解く研究で、「なら学談話会」や「なら学研究会」等を開催している（別添資料Ⅱ-I-1）。また、成果の一部は「続・大学的奈良ガイド」『月刊奈良』（社団法人現代奈良協会）、「続・続・大学的奈良ガイド」『月刊大和路ならら』（地域情報ネットワーク株式会社）としても発信されている。

○「ジェンダー言語文化学」＝学際的研究、国際連携

言語文化学科の教員を中心とする、言語と文学に関するジェンダー研究で、シンポジウムや講演会等を開催している（別添資料Ⅱ-I-2）。年1回、ニュースレターを発行しているほか、平成26年度には、成果を授業に活用するため、プロジェクト教員が共同執筆でテキスト『恋をする、とはどういうことか？—ジェンダーから考えることばと文学』（ひつじ書房 2014）を作成した（別添資料Ⅱ-I-3）。

○「差異と交感の人間学」＝学際的研究、社会課題

人間科学科の教員が中心となり、「まなざし」をめぐる諸問題を念頭に置きながら、人間存在とその諸次元について種々の研究を開催している（別添資料Ⅱ-I-4）。

B. 受託研究による学際研究

外部資金を得た学際研究としては、以下の2つがある。

○平成21年度日本学術振興会「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の受託研究「文化財に含まれる膠の自然科学的分析による古代文化史および技術史の解明」（平成21～25年度）。

古代の動物性遺物について、動物考古学とプロテオミクスの視点からタンパク質質量分析の手法を用いて分析するもので、文学部の教員4名と理学部の教員が参画した。最終評価でAを得た（参照：<http://www.jsps.go.jp/j-ibunya/saisyu-hyouka.html>）（別添資料Ⅱ-I-5）。

○平成23年度JST（国立研究開発法人「科学技術振興機構」）戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）採択事業「高齢者の営農を考える「らくらく農法」の開発」

高齢営農コミュニティという共通テーマに、文学部の教員6名が農学・工学（機器開発）・スポーツ科学・社会学といった様々な分野から取り組んだ事業。事業対象地区である吉野郡下市町と本学は平成26年度に包括的連携に関する協定を締結。平成27年度設置の「やまと共創郷育センター」の構想に寄与した。事後評価では「総合的に見て、十分な成果が得られた」と高く評価されている（参照：https://www.ristex.jp/examin/korei/program/pdf/H26houkoku_fin.pdf）（別添資料Ⅱ-I-6）。

C. センターと連携した文学部の共同研究

文学部教員は本学のセンターの古代学学術研究センター、教育システム研究開発センター、共生科学研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センターの運営委員やセンター長などを兼任しつつ共同研究に取り組んでいる。

D. 国際研究交流

国際研究交流は盛んであるが、海外渡航が多いのに対して、海外研究者の受け入れがやや伸び悩んでいる（別添資料Ⅱ-I-7）。

E. その他の研究活動と結びついた地域貢献事業

奈良県教育委員会や元興寺文化財研究所と連携し、奈良地域の社寺等が所蔵する貴重な文化財をデジタル画像にしてインターネットで公開する「古代奈良を中心とした歴史的文化遗产のデータ化」事業や、研究者の研究の知見を活かした「健康なら 21Step アップ事業」、「次世代自立支援の子ども学」を推進している。

② 研究成果の発表状況

A. 研究成果の状況

文学部教員は、第2期の期間中、一人当たり年平均で論文を1.3本、著書0.8冊を公刊し(資料Ⅱ-I-8、9)、学会発表(国内外を含む)を1件以上行っている(資料Ⅱ-I-10)。学会や研究会の主催件数も増加しており(資料Ⅱ-I-11、12)、研究成果の発表状況は良好な水準にある。

(資料Ⅱ-I-8：論文等発表数)

*うち単著は()内に表示

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
査読有り論文(本)	13(11)	14(9)	18(14)	27(19)	11(8)	19(15)	102(76)
依頼論文(本)	10(10)	9(9)	9(8)	6(6)	7(7)	13(13)	54(53)
査読無し論文(本)	30(28)	26(22)	33(29)	25(20)	33(26)	31(29)	178(154)
その他(解説・書評等)	21(21)	35(35)	20(20)	17(17)	36(36)	23(23)	152(152)
合計論文数(本)	74(70)	84(75)	80(71)	75(62)	87(77)	86(80)	486(432)
一人当たり平均(本)	1.23	1.5	1.07	1.07	1.45	1.45	1.3本

(資料Ⅱ-I-9：著書(編著含む)数の推移)

*うち単著は()内に表示

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
合計冊数	39(5)	35(2)	57(4)	71(7)	55(5)	38(3)	295(26)
一人当たり平均(冊)	0.65	0.62	0.83	1.01	0.91	0.64	0.79冊

(資料Ⅱ-I-10：学会発表件数)

*うち共同発表は〔 〕内に表示

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
国際学会(件)	8	10	26	29	24	22	119
国内学会(件)	33〔5〕	39〔2〕	50〔6〕	44〔7〕	57〔2〕	45〔1〕	268〔23〕
合計	41〔5〕	49〔2〕	66〔6〕	73〔7〕	81〔2〕	67〔1〕	387〔23〕
一人当たり平均(件)	0.68	0.88	0.97	1.04	1.35	1.13	1.03件

(資料Ⅱ-I-11：学会・シンポジウムの主催件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
開催件数	9	10	7	11	8	12	57
一人当たり平均(件)	0.15	0.17	0.1	0.15	0.13	0.2	0.15件

(資料Ⅱ-I-12: 研究会の主催件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
開催件数	31	36	44	59	61	81	312
一人当たり平均(件)	0.51	0.64	0.64	0.84	1.01	1.37	0.83件

B. 社会的還元

○地域への還元

年に2回の公開講座のほか、前掲の『月刊奈良』（社団法人現代奈良協会）、『月刊大和路ならら』（地域情報ネットワーク株式会社）への連載や新聞などへの寄稿を通して地域に研究成果を還元している。「高齢者の営農を考える「らくらく農法」の開発」では対象地の農事組合法人や下市町地域づくり推進課の設立に影響を及ぼし、下市町がプラチナ大賞優秀賞を受賞する荣誉に寄与した。こうした文学部の活動はメディアを通じても発信されている（別添資料Ⅱ-I-13）。

○学界への還元

文学部の教員は、各学術団体の委員や理事を務めることで学界に貢献しているほか、ほぼ3分の1が学術誌の編集委員を務めており、半数以上が学術誌の査読を委嘱されている（資料Ⅱ-I-14、15）。

(資料Ⅱ-I-14: 学術雑誌の編集委員)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59
学術誌の編集委員数	18	19	23	23	17	23

(資料Ⅱ-I-15: 論文査読件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59
査読件数	28	29	40	24	31	37

③ 研究資金獲得状況

資料Ⅱ-I-16のように、科学研究費の採択額は、各年度総額3,000～4,500万円前後、第2期を通じた総額は2億2千940万円で、文学部教員の科学研究費の保有率は54%である。平成26年度までの委託研究は主に、平成22-25年度の日本学術振興会（異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業）と平成24-26年度の科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）で、各年度総額は3,700～6,200万円前後で、これらすべてを合わせた第2期の外部資金総額は2億8千810万円となっている。

また、平成27年度の科学研究費配分で、細目別過去5年の新規採択の累計数の上位10機関には各国文学、日本文学、英語学が10位に、中国文学と人文地理学が4位に本学の人文系がランクインしている（別添資料Ⅱ-I-17）。

(資料Ⅱ-I-16：平成22～27年度の外部資金獲得状況)

専任教員

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59	のべ373名
科学研究費(新規+継続件数)	28	32	39	42	33	27	のべ201件
保有(新規+継続)率	46.7%	57.1%	57.3%	60.0%	55.0%	45.8%	平均保有率54%
科学研究費総額(千円)	36,000	44,400	44,700	41,600	32,200	30,500	229,400
その他の外部資金受入件数	3	4	5	4	2	1	のべ19件
委託研究・受託研究(千円)	3,630	16,950	11,550	11,080	3,320	0	46,530
共同研究	0	0	0	0	0	150	150
寄附金(千円)	800	580	1,020	980	750	0	4,130
外部資金の総額(千円)	40,430	61,930	57,270	53,660	36,270	30,650	280,210

専任教員以外

名誉教授科研費獲得件数	3	2	1	0	0	0	のべ6件
PD研究員科研費獲得件数	2	2	1	1	0	0	のべ6件
総額(千円)	9,900	3,800	1,600	600	0	0	15,900

④研究推進方策とその効果に関する例

○基盤的資金等の配分

上記の学部の3プロジェクトについては、文学部長裁量経費から毎年一定額を配分し、研究支援を行っている。その効果として(別添資料Ⅱ-I-1、2、4)のように研究会や講演会活動が活発に開催されている。

○情報発信

年1回刊行の『文学部研究教育年報』のほか、各学科や専門分野を同じくする研究者が運営する学会が刊行している学術出版物が8誌ある(資料Ⅱ-I-18：文学部学術刊行物出版状況)。さらに、23年度に研究や教育の成果を社会に発信するために「まほろば叢書」を創刊し、27年度までに計7冊を公刊した(資料Ⅱ-I-19、20)。

○その他

平成25年度に「人文科学系サバティカル実施細則」を制定し、これまでに女性教員2名がこの制度を利用して昇任につながるような研究を行った。また、学部内の教員同士が研究を報告しあう研究交流集会を年に複数回開催することで研究を推進している(別添資料Ⅱ-I-21)。

(資料Ⅱ-I-18：文学部学術刊行物出版状況)

誌名	発行者	関連するコース	第2期での刊行状況		備考
『奈良女子大学文学部研究教育年報』	奈良女子大学文学部	文学部全体	第7号～12号(通巻54号～59号)	年1号	
『寧楽史苑』	奈良女子大学史学会	古代文化学コース、歴史学コース	第56号～61号	年1号	
『奈良女子大学社会学論集』	奈良女子大学社会学研究会	社会情報学コースを中心とした社会学関係	第18号～23号	年1号	
『奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告』	奈良女子大学文学部地域環境学コース	古代文化学コース、地域環境学コース、社会情報学コース、文化メディア学コース	第7号、第8号	不定期	
『外国文学研究』	奈良女子大学文学部外国文学研究会	ヨーロッパ・アメリカ言語文化学コース	第29号～31号	年1号	24年度に停刊
『欧米言語文化研究』	奈良女子大学文学部欧米言語文化学会		第1号～3号	年1号	上記の後続雑誌
『英語学英米文学論集』	奈良女子大学英語英米文学会		第37号～42号	年1号	
『叙説』	奈良女子大学日本・アジア言語文化学会	日本・アジア言語文化学コース	第38号～43号	年1号	H23年第21回蘆北賞(学術誌部門)受賞
『奈良女子大学スポーツ科学研究』	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室	スポーツ科学コース	第13号～18号	年1号	

(資料Ⅱ-I-19:まほろば叢書創刊の辞一創刊号より)

奈良女子大学文学部〈まほろば〉叢書発刊にあたって

全地球を覆う情報と市場のシステムが至るところで綻び始めている時代にあつて、「文学的知」はどのように行く手を照らす光となりうるだろうか。いかなる知であれ、その成果はけっして声高にはではなく、明朗にして涼やかなる声で発信されることをみずから望んでいる。いにしえより国の〈まほろば〉であった古都奈良の学府から、私たちは新しい声をあげたいと思う。人間のいとなみとその歴史について、また社会と言語にかかわる事象をめぐって、私たちはたゆみない考究と思索の実践、その交換と伝授につとめてきた。深い学理と精密な論証を必要としながらも、同時に人間的な肌のぬくもりや息づかいをたいせつにしたいと願う知の研鑽こそが、私たち文学部が追究しているものである。そうした現場からうまれた、ささやかなしかし力の結集である成果をお届けしたい。

2012年2月

(資料Ⅱ-I-20:まほろば叢書既刊の表紙)



創刊号 三野博司編著 2012年4月



第2巻 麻生武・浜田寿美男著 2012年12月



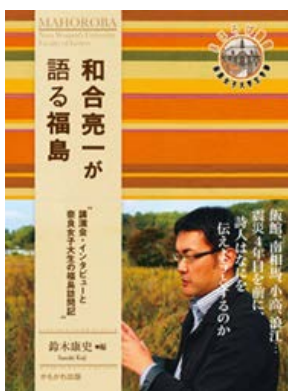
第3巻 吉田孝夫著 2013年1月



第4巻 小川伸彦・水垣源太郎編 2014年4月



第5巻 鈴木広光編著 2014年4月



第6巻 鈴木康史編 2015年4月



第7巻 齋藤美和編著 2016年3月

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 文学部の教員は文学部の研究目的を達成するために積極的に研究を行っており、高い水準を保っている。このことは、学術論文等の発表数、主催した研究会数、国際交流の件数、競争的資金の獲得額等から判断される。また、近年は学際研究や地域と連携した研究も盛んであり、後者は地域の活性化にも貢献するものとして県下の自治体からの評価も高い。以上の点から、研究活動の実施状況は、期待される水準を上回ると判断した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

① 研究業績説明書

○教育システム研究開発センターおよび本学の附属学校との連携による「解釈学的臨床教育学の理論構築と実践」(業績番号 15)の成果である研究書は学会で当該テーマのシンポジウムが立てられるほどのインパクトを教育哲学分野に与えた。

○古代学学術研究センターと連携した研究では、「日本古代の都城と木簡」に関する研究(業績番号 8)と「古代東アジアにおける膠生産の研究」(業績番号 11)がある。前者は奈良に立地するという本学の特色ある研究で、研究リーダーは書籍編纂のほか国外からの招待講演でも活躍している。後者は日本学術振興会「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の受託研究であり、古代の動物性遺物について動物考古学とプロテオミクスの視点からタンパク質質量分析の手法で分析し、最終評価で「A」判定を得た。この手法の文化財や考古遺物への応用はマスコミ等で大きく取り上げられた。

○ジェンダー研究では、アジア・ジェンダー文化学センターと連携した「奈良女子高等師範学校の留学生に関するジェンダー研究」(業績番号 1)と文学部の「ジェンダー言語文化学プロジェクト研究」(業績番号 2)が挙げられる。前者は戦前の女子留学生教育をジェンダーの視点から考察した研究として反響を呼び、講演やシンポジウムの招待が相継いだ。後者は、プロジェクトリーダーによる単著のほか、教員 8 名の執筆によるジェンダー入門の教科書もあり、授業の教科書・参考書として好評を博している。

○なら学では、「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」(業績番号 13)が『JST 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発プロジェクトに採択され、評価委員会より高評価を得た。とりくみは複数のメディアで紹介され、プロジェクト対象地域(下市町)は地域づくり活動が評価され、プラチナ構想ネットワーク主催「第 2 回プラチナ大賞」で優秀賞を獲得。これを機に本学との包括連携協定が締結された。

○平成 27 年度科学研究費配分で「細目別過去 5 年の新規採択の累計数の上位 10 機関」にランクインした分野(日本文学 10 位、中国文学 4 位、英語学 10 位、人文地理学 4 位)の代表的な研究として、「日本語活字印刷史の研究」(業績番号 4)、「宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究」(業績番号 6)、「否定の 2 分法に関する研究」(業績番号 7)、「都市空間とジェンダーに関する研究」(業績番号 12)があり、うち 3 名は女性による研究である。

○上記以外にも、書評誌の年末回顧特集でその著書が今年の特筆すべき西洋史の研究とされた「フランス人民戦線の研究」(業績番号 10)、カミュ生誕 100 年を記念のカミュ紹介書に日本人で唯一執筆依頼を受けるなど国際的に高く評価された研究者による「アルベール・カミュの研究」(業績番号 5)、地球温暖化などによる災害の頻発から話題を呼んだ「日本中世の環境変動と関係認識の研究」(業績番号 9)、研究成果図書が第 11 回角川文化財団学芸賞の最終選考(5 作品)に残った「仏教説話画の研究」(業績番号 3)やアレントを社会学理論の系譜のなかに位置づけた「ハンナ・アレントの思想の研究」(業績番号 14)があり、これらは学会誌の書評等で高く評価されている。

② 外部からの賞・評価、分析

奈良女子大学日本アジア言語文化学会の学会誌『叙説』が平成 23 年第 21 回蘆北賞(学術誌部門)を受賞したほか、助教の関西社会学会第 61 回大会奨励賞(H22)の受賞、准教授の漢検漢字文化研究奨励賞「佳作」の受賞(H26)や准教授が翻訳したプロイスマ『わたしの山の精霊ものがたり』が平成 24 年全国学校図書館協議会第 45 回「夏休みの本」(緑陰図書)の指定図書(中学校の部)になるなど若手の活躍があった。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 文学部の研究は、基礎研究はもとより、学際的な研究等で高い水準にあり、研究を通じた地域貢献では県下の自治体からの評価も高い。以上の点から、研究成果は、期待される水準を上回ると判断した。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

○研究支援の充実

平成 25 年度より導入されたサバティカル制度を利用した研究を推奨し、これまでに女性教員 2 名がこの制度を利用して研修を行った。

○研究交流集会和まほろば叢書の発刊

学部内の学際研究を奨励するために、第 2 期より文学部研究交流集会を年に複数回開催している（別添資料Ⅱ-I-21）。また、文学部の研究を発信するために、まほろば叢書を発刊し、これまでに 7 冊刊行した（資料Ⅱ-I-19、20、P1-7）。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

○科学研究費獲得と主催シンポジウムや研究会の活発化

第 1 期に各年度の獲得総額 3,000～4,500 万円であった科学研究費は、2 期には 3,700～6,200 万円前後に増加し、主催シンポジウムや研究会も第 1 期に各年度平均 54 件だったものが、2 期には各年度平均 62 件に増加し、研究活動が活発化した。

○女性教員の活躍

第 1 期終了時に 28.4%だった女性教員比率は第 2 期終了時点で 32.2%に達し、女性教員の研究面での活躍が顕著である。平成 27 年科学研究費配分で「細目別過去 5 年の新規採択の累計数の上位 10 機関」にランクインした分野では、女性教員の研究がその大半を占めている（別添資料Ⅱ-I-17）。

2. 理 学 部

I	理学部の研究目的と特徴	2 - 2
II	「研究の水準」の分析・判定	2 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	2 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	2 - 6
III	「質の向上度」の分析	2 - 9

I 理学部の研究目的と特徴

1 研究目的

奈良女子大学は4つの基本理念に基づき、次のような研究水準及び研究の成果等に関する第2期中期目標を定めた。

(資料 I - 1 : 中期目標)

- ・ 個性的かつ独創的な研究課題の策定に努め、高度な水準の基礎的・応用的研究及び学際研究を推進する。
- ・ 研究成果を国内外に広く発信し、「知的資源」の社会への還元を図る。

これに基づき、奈良女子大学は、中期計画の中で次のような目指すべき研究の水準及び方向性を提示した。

(資料 I - 2 : 研究の方向性)

- ・ 基礎研究と応用研究をそれぞれ深化させるとともに、それらの連携・融合による学際的研究を推進する中で、以下の方向性を追究する。
 - 1) 高度な水準の基礎的・応用的研究を充実させる。
 - 2) 研究者の個性を活かした独創的研究を育成する。
 - 3) 真理を探究し、文化の発展に寄与する学問を追究する。
 - 4) 社会の現代的諸課題の解決に寄与する研究を推進する。
- ・ 女性研究者に対する要請が高い領域や女性の進出の少ない分野の研究を推進する。

また、中期計画には、大学として重点的に取り組む領域として、「自然界の各階層における諸現象を対象とする基礎的・応用的研究、並びに、人間と環境との共生を図るための自然科学的見地からの研究を推進する」ことを挙げている。さらに、研究成果の効果的な社会への発信・還元、学内施設の有効活用と研究基盤設備の整備・充実のための方策を掲げている。これらの中期目標・中期計画に基づき、理学部では、以下のように特色のある研究を行っている。

2 特徴

奈良女子大学理学部は、奈良女子高等師範学校の伝統を引き継ぎ、優れた資質をもつ学生と教員を全国から呼び寄せ、基礎科学の重要性を認識し、高い研究レベルの維持・研鑽に努めてきた。平成25年度まで、理学部は、数学科、物理科学科、化学科、生物科学科、情報科学科の5学科体制で、自然科学全体を網羅する学科構成を維持し、各学科において自然現象、生命現象などの謎を究明・解明するための独創性豊かな基礎的研究を行ってきたが、近年の現代社会の急激なグローバル化、価値観の多様化、予測困難な自然・社会現象の変動などを受け、旧来の学問体系にとらわれない学際領域研究も推進し、将来の新分野開拓・応用研究の展開を見据え、数学と物理学が融合・連携して研究・教育を行う数物科学科と、化学、生物科学、自然環境学が融合・連携して研究・教育を行う化学生命環境科学科の2大学科とした。また、ミッションの再定義においては、本学は国際的に水準の高い高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙や物性等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、発生生物学等の基礎生物学分野等の研究実績を活かし、理学諸分野の研究を推進し、これを人材育成に活かすとともに我が国の理学の発展に寄与するとしており、人材育成と結びついた高度な研究が理学部における研究の特徴である。

[想定する関係者とその期待]

想定する関係者としては、学術面で関係する国内外の研究者(学会)、政府の諮問機関、企業、経済・文化面で関係する地域社会である。関係者からは、本学が高いレベルの基礎科学研究や国内外の研究機関との共同研究等による優れた研究業績により、数学、物理学、化学、生物学、情報科学に関連する学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な進展に貢献すると同時に、地域社会の発展に貢献することを期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

1. 研究実施状況

理学部では、特色を有する研究として、ミッションの再定義にも掲げた国際的に水準の高い高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙や物性等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、発生生物学等の基礎生物学分野等を強みとして研究を推進している。国外及び国内の研究機関との共同研究も活発に行われている。国際及び国内共同研究機関の例を資料Ⅱ－Ⅰ－1に挙げた。

(資料Ⅱ－Ⅰ－1：国際及び国内共同研究機関)

国際共同研究機関（一部）	国内共同研究機関（一部）
ハーバード大学（アメリカ）、コペンハーゲン大学（デンマーク）、ノルウェー科学技術大学（ノルウェー）、チッタゴン大学（バングラデシュ）、海南師範大学（中国）、スミソニアン宇宙科学研究所（アメリカ）、NASA（アメリカ）、ドイツ・カールスルーエ研究所（ドイツ）、国際応用システム解析研究所（オーストリア）、チェコ科学アカデミー動物学研究所（チェコ）、ハンガリー自然史博物館（ハンガリー）等	京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良先端大学院大学、千葉大学等の国内の大学、国立がん研究センター、日本原子力研究開発機構、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、高エネルギー加速器研究機構、理化学研究所、農業環境技術研究所（NIAES）、海洋研究開発機構（JAMSTEC）、東京大学大気海洋研究所、国立環境研究所、気象研究所、国立極地研究所、サントリー生物有機科学研究所、大同化学工業株式会社、三菱化学科学技術研究センター、ダイワ産業株式会社、第一鋼業株式会社 等

2. 研究成果の発表状況

資料Ⅱ－Ⅰ－2に、理学部・自然科学系教員の研究成果の状況を示す。年度あたり（平成22年度－27年度）、教員一人あたりの査読付き学術論文数は平均2.2件であり、約93%は英語論文である。第1期中期目標期間の業績と比較するために、査読の有無に限らず論文数を集計すると、平成22年度188件、平成23年度213件、平成24年度234件、平成25年度226件、平成26年度181件、平成27年度152件となり、第1期中期目標期間（年度あたり100-195件）より論文数は増加している。学会発表数についても、第1期中期目標期間（年度あたり59-110件）より3-4倍に、招待講演数は約2倍に大きく増加している。また、理学部（平成24年度以降は自然科学系教員）が主導的役割を果たした国際・国内会議や学会の開催数は年度あたり平均12.5件でその多くは国際学会であり、第1期に比べて2倍程度に増えている。

(資料Ⅱ－Ⅰ－2：理学部（平成22年度－23年度）・自然科学系（平成24年度－平成26年度）教員が発表した論文数など) 囲み内は内数

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
査読付き論文数	140	176	192	192	146	135
英文	125	166	174	176	139	129
和文	25	9	14	16	7	6
教員1人あたりの論文数	1.8	2.2	2.4	2.5	1.8	1.7
著書数	9	11	14	10	9	2
学会発表数	328	379	385	380	423	238
国際学会	68	91	106	107	134	75
招待講演数*	57	63	67	79	81	55
特許取得件数/知的財産権取得件数	1	0	0	0	5	0
出願数	0	0	3	2	1	0
会議開催数**	8	13	10	10	10	24
国際会議	7	10	9	8	8	18
ポストク等 研究員数***	15 (0)	12 (2)	12 (1)	15 (4)	9 (3)	5 (1)

*学会発表数のうちで招待を受けた講演数。

**理学部教員が中心的役割を果たした会議や学会の開催数。うち国際会議を内数で示した。

***日本学術振興会特別研究員（PD、SPD）、JSPS外国人特別研究員及び競争的資金で雇用されている者と本学の博士研究員（無給）を足した数。うち博士研究員以外の者の数を（ ）内に内数で示した。

これらの結果は、本学が高いレベルの基礎科学研究による優れた研究業績により、数学、物理学、化学、生物学、情報科学に関連する学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な進展に貢献していることを示している。

別添資料Ⅱ－Ⅰ－3には、理学部教員が開催に主導的役割を果たした国際・国内会議や学会の一覧、別添資料Ⅱ－Ⅰ－4には、理学部教員の特許出願・取得件数に関する一覧を載せた。

3. 研究資金獲得状況

資料Ⅱ－Ⅰ－5に、理学部・自然科学系教員の研究資金獲得状況を示す。研究資金の総額は年度あたり1億2千万円～1億4千万円で、第1期中期目標期間と比べて増加し、教員一人あたりの獲得額は約1,700千円となっている。科学研究費の研究種目別の申請・採択件数と採択額は、別添資料Ⅱ－Ⅰ－6に示すように、さまざまな研究種目で採択されており、採択率は第1期中期目標期間と比べて約13%増加している。また、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金の採択状況の内訳を別添資料Ⅱ－Ⅰ－7に示す。科学研究費獲得額は第1期中期目標期間と比べてやや増加し、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金獲得額は第1期中期目標期間と比べて大きく増加している。特に女性教員による獲得額が多く、平成23年度以降は、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金全体の獲得額の80%以上を占めている。

(資料Ⅱ－Ⅰ－5：理学部・自然科学系教員の研究資金獲得状況)

科学研究費採択件数は、その年度の新規と継続を含む。

単位：千円

		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
研究費資金総額		122,205	124,393	135,081	138,570	136,730	122,165
教員1人あたりの研究資金獲得額		1,651	1,595	1,710	1,800	1,848	1,673
科学研究費補助金	採択件数	37	40	50	54	50	41
	採択率	52.9%	54.8%	55.6%	56.3%	59.5%	45.6%
	採択額	40,800	55,905	72,600	66,800	68,700	52,300
	教員1人当たりの科学研究費獲得額	551	717	919	868	928	716
委託研究	採択件数	7	7	4	5	4	4
	採択額	69,820	62,892	51,056	51,806	51,229	49,058
受託研究共同研究寄付金	採択件数	10	12	12	14	14	17
	採択額	11,585	5,596	11,425	19,964	16,801	20,807

科学研究費及び委託研究、受託研究・共同研究・寄付金受け入れの詳細を別添資料Ⅱ－Ⅰ－8及びⅡ－Ⅰ－9に示す(いずれも研究代表者として採択されたもの)。これらの結果は、本学が高いレベルの基礎科学研究や国内外の研究機関との共同研究等による優れた研究業績により、科学研究費をはじめとする外部資金を獲得し、数学、物理学、化学、生物学、環境科学、情報科学に関連する学会の質の向上や発展、当該学会の国際的な発展に貢献していることを示している。女性教員も研究力を上げ、女子学生のロールモデルとなっていることがうかがえる。

4. 研究推進方策とその効果

平成19年度公募分より、全学的に科学研究費補助金に申請することが義務付けられており、申請をしない場合は理由を明記することとしている。また、採択されなかった場合でも、審査結果がA評価である場合には「科学研究費獲得推進費」を配分して研究を推進する方策をとっている。これらの方策の結果、第1期に比べて、理学部教員の科学研究費補助金の申請率は約1%増加し、採択率も増加(約13%)した。

情報発信の工夫として、顕著な業績を上げた場合は、本学のウェブトップページ(「トピックス」)で紹介する他、理学部のウェブページにも詳しい研究紹介を載せている。(参照：http://www.nara-wu.ac.jp/rigaku/2014/00_research.html)

(水準)期待される水準を上回る。

(判断理由) 理学部教員による研究業績は、論文数と外部研究費獲得額から判断して、質・量ともに高い水準を保っており、理学部の活発な研究活動の状況を示している。科学研究費補助金の採択数と獲得額、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金の数と獲得額は、理学部の研究が、数学、物理学、化学、生物学、環境科学、情報科学に関連する研究の進展に大きく貢献していること、学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な進展に大きく貢献していることを示している。地元企業との共同研究により、関連する発明で特許を取得し、製品が商品化され、新聞で報道された例もあり、地域社会の発展に貢献していることを示している。基礎科学分野、学際研究分野、応用研究分野のいずれにおいてもその研究活動は活発であり、第1期と比較して大きく進展しているといえる。女性研究者の採用・研究力向上についても良好である。これらを総合的に見て、研究活動の実施状況は、期待される水準を上回ると判断した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

1. 研究業績説明

「研究業績説明書」を踏まえ、資料Ⅱ－Ⅱ－1に理学部教員の卓越した研究業績について説明する。

(資料Ⅱ－Ⅱ－1：理学部教員の卓越した研究業績)

「強み」の分野	内容
有機化学・環境保全	カビが放出する揮発性有機化合物を迅速かつ非侵襲的に同定できるガスクロマトグラフ固相マイクロ抽出質量分析法を開発した研究(業績番号1)は、学術的な意義に加え、文化遺産の保護等での応用が期待され、新聞記事に取り上げられるなど、社会的な反響も大きい。人工衛星から観測されたデータを基に、世界で初めて下部対流圏オゾンの動態を明らかにした研究(業績番号2)は、中国からの越境汚染の実態をとらえたとして新聞でも報道された。タンパク質の動的・静的構造の解析方法と応用に関する研究(業績番号3)は当該分野での貢献度が大きい。
代数学	無限次元リー代数およびW代数の既約表現の指標の決定問題に取り組み(業績番号4)特に、A型の冪零元に付随するW代数の既約最高ウェイト表現の指標の決定等の成果が得られている。これらの結果は、この分野における重要な貢献とみなされ、日本数学会の2013年度代数学賞を受賞した。
数学解析	この研究は、流体力学び電磁流体力学に現れる非線型境界値問題の可解性と領域の位相的性質との関係を解明することを目指したものである(業績番号5)。現在まで、定常的Navier-Stokes方程式の境界値問題等に関する結果を得ており、これらは数多くの国際学会で報告されているほか権威ある雑誌に掲載されている。
高エネルギー物理学	世界で初めて4クオークから成る新しいタイプの新粒子を発見した研究(業績番号6)は、当該分野で最も権威ある学術雑誌に掲載された。物理学の常識を変える新発見であり、文化的意義も大きい。
素粒子原子核宇宙等の基礎物理学	X線分光観測に基づいた解析により、銀河団が動的な系であることを明らかにした研究(業績番号7)は、当該分野の著名な学術雑誌に掲載され招待講演も多い。
無機化学	ナノサイズの分子デバイスである金属錯体の合理的な設計・構築法を開発した研究(業績番号10)、希土類金属イオンによる単分子磁石の合成と磁気特性の解明を行った研究(業績番号11)、特定の金属イオンを標的とする蛍光プローブの合成とそれを用いた細胞内の標的分子の検出(業績番号12)は、応用面でも将来が期待できる。
基礎生物学	ボルボックスを用いた細胞分化と形態形成の解析(業績番号13)、アルツハイマー症に関係するとされる細胞内輸送機能に関与するタンパク質の機能解析(業績番号14)、マメ科植物と根粒菌の共生成立過程における新しい経路を発見した研究(業績番号15)は、将来的な発展が期待でき、新聞などでも取り上げられている。
地域社会との連携	奈良市の蔵元と共同で行った野生酵母を利用した日本酒の開発があり、製造方法について特許を取得している。平成25年度文部科学省産学官連携支援事業 関西地域会議でも取り上げられ、新聞とテレビでも報道された(業績番号16)。

このように、理学部では、中期目標に掲げた研究の方向性及びミッションの再定義にある、本学の強み一高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、基礎生物学分野等の研究実績一を生かし、理学諸分野の研究を推進した。これらの理学系の研究は、中期計画の研究の方向性に掲げた、女性の進出の少ない分野の研究を推進することとも合致している。

上記及び「研究業績説明書」に記載のように、理学部教員の研究の質は高く、その業績

は Phys. Rev. Lett. (IF:7.943) (業績番号 6、9)、Science (IF:31.364) (業績番号 13)、Nature Communications (IF:11.470) (業績番号 14)、PNAS (IF:9.809) (業績番号 15) といった一流の国際学術誌に掲載されている。また、理学部教員は、2010 年度先端錯体工学研究会賞、第 23 回有機合成化学協会研究企画賞、平成 24 年度日本油化学会進歩賞、関西自然保護機構四手井賞 (2014 年) などの賞を受賞している。

その他、理学部教員は、iCACGP(大気化学とグローバル汚染国際委員会)委員、文部科学省宇宙開発利用委員会委員、環境省・農林水産省・国土交通省所管の自然再生専門家会議委員、奈良県自然環境保全審議会・奈良県レッドデータブック改訂委員、日本学術会議連携会員、国際機関 IUPAC (国際純正・応用化学連合) の 2016-2017 年の Titular Member に選ばれるなど、国内外の委員を務めて活躍している。

2. 外部からの評価

理学部外部評価 (2012 年 3 月発行) には、外部評価委員より「奈良女子大学理学部では、規模の小ささを逆のスケールメリットとして比較的効率よく組織運営がなされている結果、少ない教員数で質の良い教育と研究がなされており、全体として一定の研究活動が継続的に行われていることが認められる。」「教員と学生の上に緊密な関係を保ちながら、極めてきめの細かい教育研究が実施されており、これまでに大きな実績を上げてきたことは高く評価できる。個々の教員が一生懸命努力している様子は、研究業績を見てもよくわかる。」と述べられている。

理学部教員の新聞やテレビ等で取り上げられた研究成果のリストを資料Ⅱ-Ⅱ-2 に示す。

(資料Ⅱ-Ⅱ-2 : 理学部教員の新聞等で取り上げられた研究成果)

報道日	内 容	報道・新聞社
2010/8/3	日米など 4 カ国の国際共同研究チームが、多細胞藻類「ボルボックス」の全遺伝情報 (ゲノム) の解読に成功したことについて、本学理学部 西井一郎特任助教がその研究成果について語った。	毎日
2011/7/26	特集「奈良の大学 なにを研究!？」において、フンチュウを研究する本学理学部准教授の佐藤宏明が取り上げられた。	産経
2012/2/23	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	日経(夕刊)、奈良、産経
2012/2/28	連載記事「奈良の大学 なにを研究!？」において、本学理学部教授の高須夫悟を特集。	産経
2012/3/15	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	朝日
2012/3/19	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	読売
2012/3/20	連載記事「奈良の大学 なにを研究!？」において、本学人間文化研究科教授の渡邊利雄が取り上げられた。	産経
2012/4/25	本学和田恵次教授の、阿波しらすぎ大橋の完成に当たっての本事業へのコメントが放送された。	四国放送
2012/9/19	本学和田恵次教授の、「『豊かな干潟の象徴』吉野川で激減」のコメントが掲載された。	朝日
2012/11/12	本学和田恵次教授の、「徳島県那賀川高潮工事への提言」が放送された。	四国放送
2013/4/26	元本学理学部准教授で理化学研究所仁科加速器研究センター 肥山詠美子准主任研究員が自然科学分野で優れた業績をあげた女性研究者をたたえる「猿橋賞」2013 年受賞者に選ばれた。	日経 日経産業 毎日
2013/5/31	邪馬台国の有力候補地とされる桜井市の纏向遺跡で平成 3 年に出土した巾着袋上の絹製品が、自然界にいる在来種の蚕の絹でできている可能性が高いことが 30 日、本学研究院教授中沢隆らの調査で分かった。	産経 朝日

2013/6/19	桜井市纏向学研究センターの研究紀要「纏向学研究第1号」で本学研究院教授中沢隆の研究チームが纏向遺跡の絹製品は野生の蛾「ヤマユガ」の絹糸製であるとの見解を示した。	朝日
2014/3/12	光化学スモッグの原因となる地表付近のオゾンの分布を本学と米ハーバード・スミソニアン天体物理学センターのチームが人工衛星のデータを使って把握することに世界で初めて成功したことが本学研究院自然科学系 林田佐智子教授のコメントとともに紹介された。	毎日
2014/3/13	アルツハイマー病の発症にかかわるたんぱく質を、本学の研究院自然科学系の渡邊利雄教授と東京大学の研究チームがマウスで見つけたと、英科学誌ネイチャー・コミュニケーションズに発表した。	毎日新聞
2014/4/22	コーナー「ならフシギ」で奈良公園の鹿の夜の行動について、本学和田恵次教授のコメントが掲載された。	読売
2014/5/25	学びの現場のコーナーで、理学部が地元と協力しながら研究成果を生かした純米酒の開発に力を入れていること（「奈良の八重桜」「奈良の八重桜～クリスタルチェリー」）、理学部の改組のことが紹介された。	読売
2015/2/	本学渡邊利雄教授の、「不明であった皮膚がんを抑え込む機構を解明」について掲載された。	旺文社 大学受験 バスナビ
2015/7/7	本学和田恵次教授の、共生科学研究センターの活動解説が掲載された。	奈良放送
2015/9/7	本学和田恵次教授の研究紹介として、「干潟のカニ 人間みたい」が紹介された。	読売
2015/9/18	9月21日から23日まで本学で開催予定の錯体化学会第65回討論会が取り上げられた。	科学
2015/9/30	北海道大学、東北大学、東北大学と、本学戸田幹人准教授が共同研究を行っている、「化学反応の切り替えスイッチ」について、北大と東北大が共同研究者がプレスリリースを行った。	日経
2015/12/14	本学和田恵次教授の研究紹介として、「奈良女子大 干潟にすむ小さいカニの行動は人間社会の縮図を見るよう！」が紹介された。	旺文社 蛍雪時代

3. 定量的分析

上に述べたように理学部教員の研究の質は高く、定量的にも引用回数やダウンロード回数が多い。1つの例として、新粒子を発見した研究（業績番号6）は、物理学で最も権威ある学術雑誌に掲載され、これまでの被引用回数は200と非常に注目度の高い論文である。本学の強みの1つである物理学分野における素粒子研究のレベルの高さを表している。

（水準） 高い水準にあると評価される。

（判断理由） 理学部では、研究業績の中期目標に掲げた研究の方向性及びミッションの再定義にある、本学の強みを生かした理学諸分野の質の高い研究が推進されており、その水準は、業績が国際的な一流学術誌へ掲載され、学会等の賞の対象や新聞等に掲載されているほか、理学部教員が国内・国外の科学諸分野での重要な委員として活躍していることから明らかである。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

平成22年度から平成26年度に本学は、文部科学省「女性研究者養成システム改革加速」事業に採択され、本学の中でも特に女性教員比率の低い理学系・工学系の女性教員を計画に沿って採用してきた。その結果、平成21年度には14.8%であった理学部の女性教員比率は、平成27年度には23.3%となった。採用された助教には研究を促進させるためにメンターが配置され効果を上げている。女性の外部資金獲得件数と獲得額も上に述べたように良好である。これらの結果は、「女性研究者養成システム改革加速」事業の採択を契機として、第2期に理学部女性教員の研究力が向上していることを示しており、重要な質の変化があったと判断できる。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

上に述べたように、第1期に比べて第2期では、論文数や学会発表数の増加、外部資金獲得数・獲得額の増加が認められ、外部評価でも高い評価を受けるなど、研究成果についても質的に向上していると判断できる。第2期に理学部は中期目標・中期計画の課題を真摯に受けとめ、理系女性人材育成を行うと共に高度な研究を進めてきたといえる。

3. 生活環境学部

I	生活環境学部の研究目的と特徴	3-2
II	「研究の水準」の分析・判定	3-4
	分析項目 I 研究活動の状況	3-4
	分析項目 II 研究成果の状況	3-16
III	「質の向上度」の分析	3-18

I 生活環境学部の研究目的と特徴

1 生活環境学部の研究目的

生活環境学部は、学部の目標として「生活の根幹である衣・食・住や家族の環境など、生活を取り巻く様々な生活環境を教育研究の対象とし、生活に関わる諸問題を科学的に分析し、高度な教育・研究を進め、生活診断力や生活改善力に優れ、生活者の目で見えて社会をリードできる女性専門職業人を養成すること」(資料 I-1)を掲げている。この目的に即して、生活環境学部は、生活科学(家政学)に関わる先進的研究を行って社会に発信することをめざしている。それにより、後継の女性研究者の育成もはかっている。

(資料 I-1 : 各学科の教育目的)

<p>【食物栄養学科】 http://www.nara-wu.ac.jp/life/food/ 食物栄養学科では「食」にかかわるバイオサイエンスの高度な研究・教育を行うと同時に、人間栄養学にかかわる分野を充実させ、科学概念と同時に実践的知識を身に付けた食物・栄養分野における日本のリーダーとなる専門家の育成を目的とします。</p> <p>【心身健康学科】 http://www.nara-wu.ac.jp/life/health-new/ 人の健康を、生活の基本である衣・食・住だけでなく、社会環境、生活習慣、身体、運動、こころ、発達、教育などの多様な視点・観点から総合的に学ぶことを目的としています。こころと身体の健康を定量的あるいは定性的に分析することで科学的に考える能力を養い、健康な生活のあり方を提案できる人材を養成します。</p> <p>【情報衣環境学科】 http://www.nara-wu.ac.jp/life/lics/index.html 情報衣環境学科は、衣環境学と情報工学の基本的事項や先端技術を教育・研究し、安全で快適な衣環境の構築、モバイル装置としての衣服の構想、並びにライフ・コンピューティングによる生活改善を行うための専門知識や技術を身につけた人材の養成を目的とします。</p> <p>【住環境学科】 http://www.nara-wu.ac.jp/life/resed02/ 住環境学は、安全・安心で、快適に生活することができ、自然環境とも共生できる住環境を総合的に創り上げていくことを目指した学問体系です。住まいのインテリアから建築、都市、地域にいたる広範な領域を対象に、生活者の視点に立った質の高い生活空間の計画・設計・管理するための技術を学びます。</p> <p>【生活文化学科】 http://bunka-nwu.info/ 生活文化学科では、私たちの暮らしにまつわるほとんどすべてのことがらを学べます。複雑化・高度化・国際化した現代社会の暮らしの課題を解決していくためには、従来の学問の枠組みを超えて、より総合的にものごとを捉える「教養」が求められています。本学科では、人文社会科学の様々な学問分野の視点から、衣食住に関する文化や歴史、人びとの心理や人間関係、地域経済、法文化、福祉制度など、生活を知的に探求します。</p>

2 生活環境学部の構成

生活環境学部は、平成5年10月に家政学部から改組して成立し、生活環境学科及び人間環境学科の2学科制をとることになった。平成26年の改組により、「食物栄養学科」「心身健康学科」(生活健康学コース・スポーツ健康科学コース・臨床心理学コース)「情報衣環境学科」(衣環境学コース・生活情報通信科学コース)「住環境学科」「生活文化学科」の5学科となり、現在に至っている。教員数は計67名、うち女性32名である(女性比率47.8%)

(資料 I-2)。

(資料 I-2 : 学科・コース別教員数、平成27年5月1日現在)

学科		専任教員数	うち女性教員数	女性教員比率 (%)
食物栄養学科		13	8	61.5
心身健康学科	生活健康学コース	6	3	50.0
	スポーツ健康科学コース	6	3	50.0
	臨床心理学コース	5	2	40.0
情報衣環境学科	衣環境学コース	8	3	37.5
	生活情報通信科学コース	7	1	14.3
住環境学科		11	6	54.5
生活文化学科		11	6	54.5
合計		67	32	47.8

3 各学科・コースの研究目的

各学科およびコースの研究目的を資料 I - 3 の通り定め、ウェブサイトで公表している。

(資料 I - 3 : 各学科およびコースの研究目的)

①食物栄養学科

食物という身近な素材から人々の健康増進、疾病予防を考え、健康長寿社会推進に貢献することを目的に、食物の栄養性、機能性、嗜好性、安全性、食環境などについて研究を行う。研究対象は化学物質 (DNA、タンパク質、脂質、ビタミン、ポリフェノール等) や細胞などのミクロ分野から、個体、ヒト集団などのマクロ分野まで多岐にわたっており、ライフサイエンスを基礎として、医学や農学分野等と連携した学際性の高い最先端の研究を行う。

②心身健康学科

a) 生活健康学コース

主に生活環境や生活習慣が健康に与える影響について、衣食住、運動、休養、ストレスなど様々な視点から、生理学、人間工学、生化学、神経科学、薬理学、行動科学など様々な手法を用いて総合的に研究する。

b) スポーツ健康科学コース

体育・スポーツ、こころやからだをとりまく諸課題について、スポーツ科学・体育学の視点から、人文科学および自然科学的手法を用いて、法学、社会学、表現学、生理学、心理学、バイオメカニクスなどの領域による学際性の高い研究を行う。

c) 臨床心理学コース

現代社会では、うつ、不安、嗜癖問題 (依存症)、不登校、非行などさまざまなこころの問題がある。このようなこころの問題に関することについて実践的な立場から研究する。

③情報衣環境学科

a) 衣環境学コース

時代の要請する安全で快適な衣環境の構築を目指して、衣環境素材としての高分子や繊維集合体、アパレルの設計と生産、コンピュータ支援ファッションデザインやウェアラブルコンピュータなどのフロンティア技術、並びに衣の管理と再利用について研究を行う。

b) 生活情報通信科学コース

時代の要請する先端 ICT の習得を目指して、セマンティック Web やバーチャルリアリティ、エージェント等の応用技術、ならびに基盤システム開発やソフトウェア工学等の基礎技術に関する研究を行う。

④住環境学科

安全・安心で快適に生活することが可能で自然環境とも共生できる住環境を生活者の視点から創造するための理論と方法を研究する。住生活、コミュニティ、建築デザイン、光・音・熱・空気などの物理的特性、空間構造と材料の性質、住環境形成の歴史、制度やしくみ、ランドスケープなど多様な側面から研究する。

⑤生活文化学科

豊かで安定した生活を希求する人間の文化的・社会的特性と生活環境との関連を研究する。人文社会科学の様々な学問分野の視点から、衣食住に関する文化や歴史、ジェンダー、家族、法と社会、人びとの心理や人間関係、地域経済などについて総合的に研究する。

4 生活環境学部における研究の特色

生活環境学部における研究の特色は、学際性と実践性にある。衣・食・住の観点のみならず、環境・健康・情報・文化の観点もまじえて研究が行われており、その学際性の広さは顕著である。また、理論的研究に加えて、実践的・応用的研究もさかんに行われている。研究に対する評価はきわめて高く、それは科学研究費取得率の高さや外部資金の獲得の多さに反映されている。また、女性教員の比率が高く、ジェンダー研究や女性の身体・生活に重点を置いた研究が活発である。

[想定する関係者とその期待]

関係者として主に想定されるのは、「日本家政学会」をはじめとして学術面で関係する諸学会、経済・文化面で関係する地域社会、「衣食住」を中心とする産業分野である。これら想定される関係者の期待とは、生活科学 (家政学) の学問的發展に対する貢献、地域社会との相互交流にもとづく研究成果還元、そして、産業界のニーズにあわせた、あるいはニーズを引き出す先進的な研究成果の公表及び研究協力である。

II 「研究の水準」の分析・判定
分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

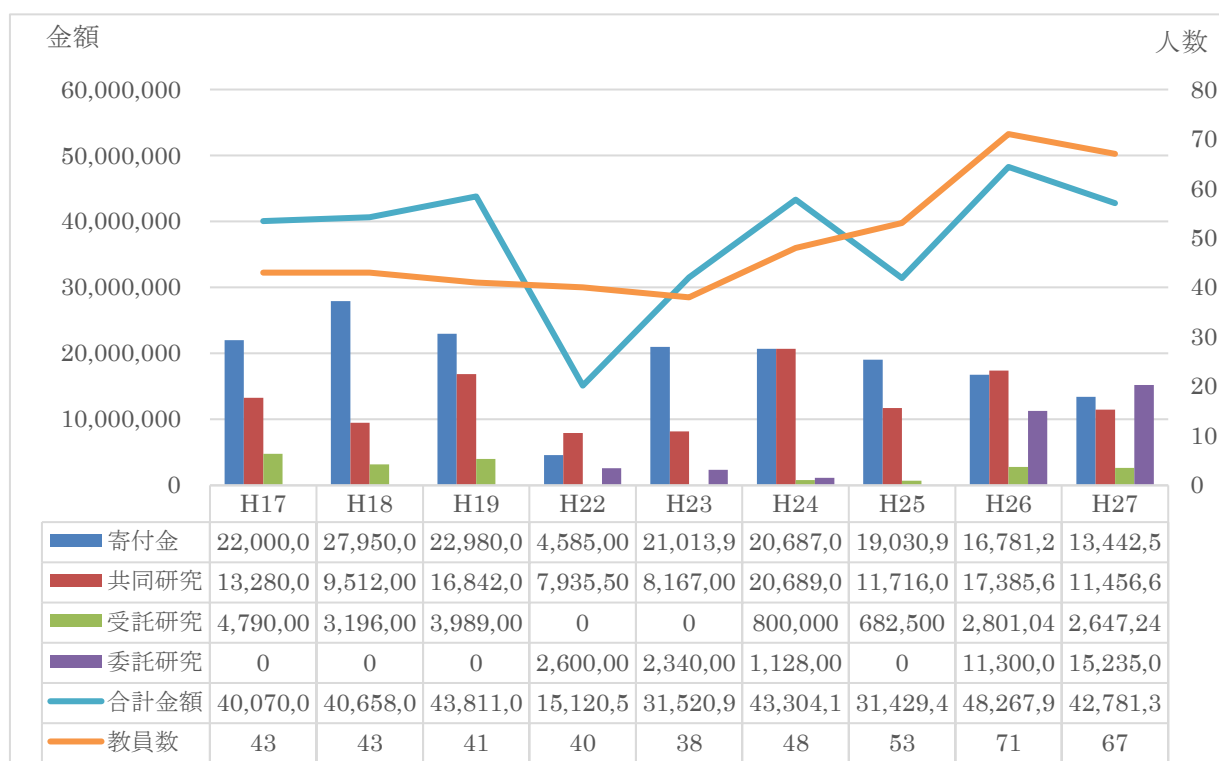
(観点に係る状況)

(1) 研究実施状況

学際的・実践的研究をめざすという生活環境学部の研究方針にしたがい、各学科で、それぞれの特色を生かした研究に取り組んでいる。それが成果をあげていることは、科学研究費や外部資金の獲得件数の多さ、企業との共同研究の多さに反映されている。企業や地域との共同研究では、委託研究や寄付金研究が多いことに、社会的ニーズに合致した研究が行われていることが示されている。平成 25 年度、26 年度、27 年度と科研費以外の外部資金の合計額は 4000 万を超えている（資料Ⅱ-I-1）。また、科学研究費基盤研究（A）、（B）を利用した学際的比較研究も活発に行われている（資料Ⅱ-I-2）。

海外からの招聘件数はそれほど多くないとはいえ、国際的共同研究に関しても研究者の交流がよく行われている（資料Ⅱ-I-3）。地域連携としては、奈良県・奈良市、奈良県内組織・機関と積極的に連携し、貢献している。また、多数の教員が、その専門性を生かし、国や関西の各自自治体において多様な審議会等の委員を務めているほか、各種学会の理事・役員をつとめ、学術研究の発展に寄与している（資料Ⅱ-I-4）。

(資料Ⅱ-I-1：外部資金の獲得状況)



生活環境学部外部資金獲得件数

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計件数
寄付金	10	19	23	22	21	23	118
共同研究	14	9	8	9	12	10	62
受託研究	0	0	2	1	3	1	7
委託研究	2	2	2	0	2	3	11
合計件数	26	30	35	32	38	37	198

(資料Ⅱ-I-2 : 科学研究費を使った学際的比較研究事例)

学科・講座・コース	種目	H22	H23	H24	H25	H26	H27(直接)	課題名
住環境	基盤研究(B)(一般)			2,700,000	5,100,000	3,600,000	2,200,000	日中韓の住生活スタイルに基づいた快適性と省エネルギーに配慮した照明計画の検討
住環境	基盤研究(B)(一般)			3,300,000	3,300,000			中国・内モンゴル自治区におけるハイシンの間取りの変容に関する研究
住環境	基盤研究(B)(海外学術調査)						3,100,000	ネパールの世界遺産都市における生活空間と都市型住居の保全に向けた基礎的研究
住環境	基盤研究(B)(海外学術調査)	1,900,000	1,400,000	1,100,000	1,100,000			スマトラ島沖地震被災地における都市部近郊の大規模再定住地の居住環境に関する研究
心身健康・臨床心理	基盤研究(B)(一般)						2,300,000	大規模災害後の犯罪対策に関する実証的研究—犯罪発生予防と犯罪不安の低減のために
心身健康・臨床心理	基盤研究(B)(一般)						1,400,000	高等学校における不登校と“社会で生きていく力”支援プログラムの開発と追跡調査
生活文化	基盤研究(A)(一般)	5,600,000	5,300,000					歴史における周縁と共生—疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼
生活文化	基盤研究(A)(一般)	他機関					8,200,000	ジェンダー視点に立つ「新しい世界史」の構想と「市民教養」としての構築・発信
生活文化	基盤研究(B)(一般)	他機関		5,100,000	4,000,000	4,200,000		歴史教育におけるジェンダー視点の導入に関する比較研究と教材の収集及び体系化
生活文化	基盤研究(B)(海外学術調査)		4,800,000	3,700,000	2,900,000	1,800,000		アジアにおけるリプロダクションの歴史の変遷—医療化の要因と女性への影響
生活文化	基盤研究(B)(海外学術調査)						4,400,000	南アジア農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究

(資料Ⅱ-I-3 : 国際共同研究)

国際共同研究		H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	合計
食物	海外出張・研修件数	1	5	0	3	0	1	10
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	0	1	1	0	2
住環境	海外出張・研修件数	3	3	3	4	5	2	20
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	0	0	0	0	0
文化	海外出張・研修件数	6	7	6	9	8	1	37
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	2	1	1	1	3	8
衣	海外出張・研修件数	0	0	0	0	0	0	0
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	1	0	0	0	0	0	1
情報	海外出張・研修件数	未設置				0	0	0
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	未設置				0	0	0
健康	海外出張・研修件数	1	3	4	6	3	2	19
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	1	0	1	1	3
スポ	海外出張・研修件数	未設置						0
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	未設置						0
心理	海外出張・研修件数	未設置						0
	海外研究者の招聘・受け入れ件数	未設置						0
合計		12	20	15	24	19	10	77

(資料Ⅱ-I-4 : 国・地方自治体・学術団体等の委員・役員等 (平成 27 年度))

	委員名称
国・地方自治体の委員等	<p>○国・公益（全国）</p> <p>日本学術会議会員</p> <p>文科省「不登校に関する調査研究協力者会議」委員</p> <p>文部科学省 大学設置・学校法人設置審議会 大学設置分科会専門委員（体育学）</p> <p>文部科学省「平成 27 年度いじめ対策等生徒指導推進事業審査委員会」委員</p> <p>文部科学省「不登校生徒に関する追跡調査委員会」</p> <p>科学研究費審査委員・学振補助金審査委員</p> <p>奈良地方裁判所委員会委員</p> <p>大阪医療刑務所 自己改善指導（窃盗犯罪再犯防止）プログラムアドバイザー</p> <p>日本体育協会創立 100 周年記念事業準備委員会・スポーツ宣言起草・WG</p> <p>日本体育協会・国体活性化プロジェクト委員</p> <p>一般社団法人日本スポーツ法支援・研究センター役員</p> <p>○奈良県</p> <p>奈良県産業教育審議会委員会委員</p> <p>奈良県建築士審査会委員</p> <p>奈良県模大規模小売店舗立地審議会委員</p> <p>奈良県健康福祉部事業評価検討会議</p> <p>奈良県医療審議会委員</p> <p>奈良県工業技術センター外部評価委員会委員長</p> <p>奈良県立医大ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員</p> <p>奈良県公衆浴場入浴料金協議会委員、奈良県家庭教育支援（講師）</p> <p>奈良県スポーツ推進審議会委員</p> <p>奈良県 なら 10 歳若がりえり推進事業プログラム評価委員</p> <p>奈良県入札監視委員会委員</p> <p>奈良県国土利用計画審議会委員</p> <p>奈良県古都風致審議会委員</p> <p>奈良県私立学校審議会委員</p> <p>奈良県いじめ防止基本方針検討協議会</p> <p>○奈良市</p> <p>奈良市学校保健理事会、奈良市スポーツ推進計画策定委員会委員</p> <p>奈良市スポーツ推進審議会委員、奈良市スポーツ振興審議会委員</p> <p>奈良市地域子育て支援センター事業実施団体審査委員会委員長</p> <p>奈良市つどいの広場事業実施団体審査委員会委員長</p> <p>奈良市社会福祉審議会</p> <p>児童福祉専門分科会・分科会長</p> <p>奈良市立中学校給食導入検討委</p> <p>市立奈良病院運営市民会議委員</p> <p>奈良市防災会議委員</p> <p>○奈良県下</p> <p>大和郡山市情報公開・個人情報審査会委員</p> <p>桜井市 PFI 学校給食センター整備事業審査会委員</p> <p>○大阪府下</p> <p>大阪府情報公開審査会委員</p> <p>大阪府森林審議会委員</p> <p>高槻市情報公開・個人情報審査会委員（副会長）</p> <p>寝屋川市情報公開・個人情報審査会委員（副会長）</p> <p>枚方市委託業務総合評価員</p> <p>枚方市包括外部監査人選定審査会委員（副会長）</p>

	<p>○京都府下 京都市地球温暖化対策推進委員会委員</p> <p>○兵庫県下 兵庫県地域安全まちづくり審議会委員 神戸市少年事件等に関わる教育課題を考える会委員</p> <p>○その他 東京都「いじめ問題に関する研究」推進本部</p>
<p>学術団体の役員等</p>	<p>○理事長 奈良体育学会、日本スポーツ法学会</p> <p>○副理事長 ジェンダー法学会、日本ジェンダー学会</p> <p>○理事 日本生理学会、ジェンダー史学会、比較家族史学会、日本油化学会、日本調理科学会、日本発汗学会、日本スポーツ社会学会、日本バイオメカニクス学会、日本生理学会、日本生気象学会、日本遊戯療法学会、アジアスポーツ法学会、日本スポーツ法学会、日本体育・政策学会、一般社団法人日本スポーツ法支援・研究センター 日本犯罪心理学会、日本ヒューマンケア心理学会</p> <p>○幹事 日本睡眠学会、日本生理学会、日本生気象学会、日本生気象学会、日本体育学会北関東地域、日本体育学会北関東支部、高分子学会関西支部、日本青年心理学会</p> <p>○評議員 生理人類学会、日本人間工学会、日本ビタミン学会、日本栄養改善学会、日本家政学会、日本給食経営管理学会、日本生理学会、日本体育学会、日本運動生理学会、日本体力医学会、日本生気象学会、日本体育学会体育社会学専門領域</p> <p>○編集委員 日本バイオメカニクス学会、日本ダンスセラピー協会、日本繊維製品消費科学会、Journal of Physiological Science 日本犯罪心理学会、日本心理学会、日本ヒューマンケア心理学会、日本カウンセリング学会</p> <p>○研究審査委員 Welcome trust 医学研究（英国）、Auckland 医学研究財団研究（ニュージーランド）</p> <p>○その他の委員 日本体力医学会将来構想計画委員会、日本繊維製品消費科学会 快適性・健康研究会、日本スポーツ産業学会法学分科会運営委員、日本体育学会「体罰・暴力根絶特別委員会」協力委員</p>

(2) 研究成果の発表状況

研究成果の発表は、著書・論文・研究発表のすべてに関して順調に行われている。著書は、各学科とも1年あたり6～10件にのぼり、教員1人あたり年0.5冊程度の換算となる。外国語で執筆された著書も一定数ある(資料Ⅱ-I-5、Ⅱ-I-6)。

各学科の専門性を反映して、研究成果の公表方法については学科ごとに特徴がある。生活文化学科では著書数が多く、また著書・論文ともに単著の比率が高い(資料Ⅱ-I-6、Ⅱ-I-7)。食物栄養学科では、査読付の国際学会誌への掲載が非常に多い。ほぼすべてが共著であり、かつ外国語論文である。スポーツ健康科学コースでも同様の傾向が強い。これに対して、住環境学科と生活文化学科では、国内学会誌への掲載が多い。生活文化学科では依頼論文が多いが、これは、文系の研究領域ではしばしば査読は若手の投稿論文を中心とし、中堅以上は編集委員会等からの依頼によって論文を執筆するというパターンが広く行われている実態を反映している(資料Ⅱ-I-7)。

教員1人あたりの年間論文平均数は、1.3から4.3まで開きがある。臨床心理で論文数が多いのは、いじめや犯罪など社会のひずみに敏感に対応した研究へのニーズに適切に対応しているからである(資料Ⅱ-I-8)。他方、フィールドワーク・芸術活動の成果は住環境学科が非常に多く、年間30件近くが発表されている。これは作品としての住宅設計の発表が多いこと、ならびに地域や景観・文化財保存に大きく貢献していることを反映している(資料Ⅱ-I-9)。

国内学会については、食物栄養学科がきわだっただけ多いが、他の学科も1人あたり年間2～6件の発表が行われている(資料Ⅱ-I-11)。国際会議での発表は、一般・シンポジウム・ポスターセッションなどさまざまな形できわめて活発に行われている(資料Ⅱ-I-12)。

研究成果は、個人が公表するほか、いくつかの方法で組織的に発信している。①奈良女子大学家政学会発行『家政学研究』(年2冊刊行、最新号は124号、目次については<http://www.nara-wu.ac.jp/life/hea/kenkyu.html>参照)、②科研費研究に関する独自ウェブサイト、③公開シンポジウム等の企画・主宰である(資料Ⅱ-I-10)。

(資料Ⅱ-I-5：著書数の学科別総数・経年変化)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
食物栄養学領域	11	11	2	3	8	11	46
生活健康学領域	4	2	1	2	3	5	17
衣環境学領域			4	4	16	15	39
住環境学領域	7	1	10	7	7	4	36
生活文化学領域	6	5	9	8	12	16	56
臨床心理学領域				3	6	2	11
スポーツ健康科学領域					6	9	15
生活情報通信科学領域					1	0	1
合計	28	19	26	27	59	62	221
教員一人あたりの件数	0.7	0.5	0.5	0.5	0.8	0.9	0.7

(資料Ⅱ-I-6：著書の内訳) [※()内は共著、「外」は外国語による執筆の内数。]

著書の内訳 ()はうち共著数・(外)はうち外国語執筆数	食物栄養	住環境	生活文化	心身健康			情報衣環境		合計			
				スポーツ (H26-27)	臨床心理 (H26-27)	生活健康	衣環境	情報通信 (H26-27)	総数	うち共著	うち外国語	
著書	単著	7(6)(外1)		1	2(外1)	1			11	6	2	
	編著			2			4(3)(外3)		6	3	3	
	共編著	2(2)	8(8)	12(外1)	3(1)		4(2)	11(11)(外8)	40	24	9	
	編著・共編著以外の共著(分担執筆)	21(20)(外2)	4(3)(外1)	23(9)(外2)	4(2)	4	7(4)(外1)	4(4)	1(1)	68	43	6
資料集・調査研究報告書等	単著	10	1(1)	2		1		3(3)		17	4	
	編著			4(2)						4	2	
	共編著	1(1)	5(5)	2(2)		1				9	8	
	編著・共編著以外の共著(分担執筆)		15(13)(外1)	7(1)	4			21(21)(外21)		47	35	22
事典・辞典等(担当項目数は[])	編著			1	1					2		
	共編著					3				3		
	編著・共編著以外の共著(分担執筆)	3(2)	1	1			1			6	2	
翻訳書	単独訳											
	監訳											
	共訳	2(1)	1(1)							5	2	
上記分類が不明な場合	著書・報告書等		1(1)	1	1					3	1	
著書の合計	46(32)(外3)	36(32)(外2)	56(14)(外3)	15(3)(外1)	11	17(5)(外4)	39(39)(外29)		221	130	42	
のべ在籍者数(H22～H27)	79	73	64	12	11	41	35					
1人・1年あたりの件数	0.58	0.49	0.88	1.25	1	0.41	1.11					

(資料Ⅱ-I-8：1人あたりの論文数)

学科・コース	延べ在籍者数 (H22 - H27)	論文数 合計 (H22-H27)	1人・1年 あたりの 論文数	論文内訳			
				査読付論 文件数	依頼論文 文件数	外国語 論文件 数	
食物栄養学科	79	269	3.4	185	12	176	
住環境学科	73	98	1.3	43	12	5	
生活文化学科	64	82	1.3	33	14	8	
情報衣 環境学 科	衣環境学コース	35	101	2.9	73	10	65
	生活情報通信科学 コース*	14	42	3	26	0	18
心身健 康学科	生活健康学コース	41	65	1.6	47	9	41
	スポーツ健康科学 コース*	12	49	4.1	34	5	22
	臨床心理学 コース*	11	47	4.3	9	0	4
合計・平均	329	753	2.3	450	62	339	

*H26-H27

(資料Ⅱ-I-9：芸術系の活動・フィールドワーク等)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
食物栄養学領域					1		1
住環境学領域	30	27	27	27	27		138
生活文化学領域	5	4	1	1	1		12
合計	35	31	28	28	29	0	151

(資料Ⅱ-I-10: 独自のウェブサイトや公開シンポジウムを通じた研究成果の発信事例)

(1) 科研費研究成果を発信する独自ウェブサイト

○生活文化学科のサイト (バナーリンク)

「リプロダクションとジェンダー」<https://reproculture.wordpress.com/>参照

「ジェンダー史 (比較ジェンダー史研究会)」<http://ch-gender.jp/wp/>参照

(2) 公開シンポジウム(奈良女にて開催、企画主宰の場合に限る)

2013年: 公開シンポジウム「歴史のなかのセクシュアリティー同性愛/性的指向の比較文化史」

2014年: 公開シンポジウム「歴史を読み替えるージェンダーから見た世界史」
公開研究会「ケアとジェンダー」

2014年: 公開シンポジウム「オリンピックの創出とクーベルタンのオリピズムを問う」

2015年: 公開シンポジウム「セクシュアリティとジェンダーー性的指向の権利保障をめぐるってー」

2015年: 公開シンポジウム「嘉納治五郎が構想したオリンピックー日本におけるオリピズムの受容と展開ー」

(3) 臨床心理相談センターの講演・セミナー

○2013年 臨床心理相談センター開設記念講演 (第1弾～第10弾)

日本人の心からみた「体罰問題」

子どもの気持ちを受けとめるということ

今、あらためて“いじめとは何か”を問い直すー悲劇をくり返さないためにー

心理職を目指す人のためのハローワーク

子どもを支援するファシリテーション

発達障害を抱える親の子育て支援

近代日本のうつ病を解剖するーうつを病む人々に寄り添うためにー

カウンセリングに学ぶ相手の話を聞く技術

行動分析学による明るい療育相談ー事例から学ぶ支援方法ー

いのちの授業

○2014年 臨床心理相談センターセミナー (第1回～第10回)

臨床心理士が語るこころの世界のおもしろさ

思春期の子どもと心とその関わり

涙活

カウンセリングに学ぶ話を聴く技術

奈良の大仏と華厳: ユング派心理療法との接点

谷川俊太郎の世界に耳をすませば

日本の中の世界、世界の中の日本: グローバルな舞台における森田療法の貢献

「よりよい人間関係を築くためのコツ」現代人の人格のあり様ー科学の時代の人格構造ー

臨床心理学へのいざない

隅野由子のことばの世界

○2015年 臨床心理相談センターセミナー (第1回～第6回+特別回)

奈良女・臨床心理学コースの最先端

高齢者と犯罪

カウンセリングに学ぶ 話の聴き方・伝え方

女性の生涯発達とアイデンティティー現代の「個」と「関係性」をめぐるってー

(男女共同参画推進機構との共催)

心理援助職向け特別セミナー

こころの世界のおもしろさ

流産・死産による悲嘆を考える

(資料Ⅱ-I-11：国内学会における研究発表等の内訳)

	国内学会	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	合計
食物栄養	招待講演	4	8	7	4	3		26
	一般発表	96	89	92	83	64	32	456
	シンポジウム発表	9	5	5	2	1	1	23
	ポスターセッション	13	36	30	23	24	25	151
	その他(コメンテーター・司会等)						1	1
	国内学会発表数合計	122	138	134	112	92	59	657
住環境	招待講演	1	2	1	1	1	1	7
	一般発表	21	36	47	58	61	31	254
	シンポジウム発表	1	1	21		1	1	25
	ポスターセッション	1	5	4	4	2	2	18
	その他(コメンテーター・司会等)	1		1	3	4	2	11
	国内学会発表数合計	25	44	74	66	69	37	315
生活文化	招待講演		2		2	2	1	7
	一般発表	4	2	3	5	5	6	25
	シンポジウム発表		1	1	3	3	1	9
	ポスターセッション		3	3	1	2	1	10
	その他(コメンテーター・司会等)			3	6	6	6	21
	国内学会発表数合計	4	8	10	17	14	15	68
衣環境	招待講演	3	2	2	5	4	3	19
	一般発表	6	7	8	20	14	24	79
	シンポジウム発表	1	2	6	7	8	10	34
	ポスターセッション	5	7	8	9	9	15	53
	その他(コメンテーター・司会等)				1		1	2
	国内学会発表数合計	15	18	24	42	35	53	187
情報	招待講演	未設置						
	一般発表	未設置				8	7	15
	シンポジウム発表	未設置				1	1	2
	ポスターセッション	未設置					2	2
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置				9	7	16
	国内学会発表数合計	未設置				18	17	35
生活健康	招待講演	2	5	2	1	2	1	13
	一般発表	29	32	19	22	16	10	128
	シンポジウム発表	2	2	2	4	0	1	11
	ポスターセッション	7	11	12	8	13	5	56
	その他(コメンテーター・司会等)	3	3	3	2	2	1	14
	国内学会発表数合計	43	53	38	37	33	18	222
スポーツ	招待講演	未設置						
	一般発表	未設置				5	5	10
	シンポジウム発表	未設置				4	1	5
	ポスターセッション	未設置				12	19	31
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置				2		2
	国内学会発表数合計	未設置				23	25	48
臨床心理	招待講演	未設置				1	1	2
	一般発表	未設置				6	4	10
	シンポジウム発表	未設置				2	4	6
	ポスターセッション	未設置				10	7	17
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置				7	6	13
	国内学会発表数合計	未設置				26	22	48

(資料Ⅱ-I-12：国際学会における研究発表)

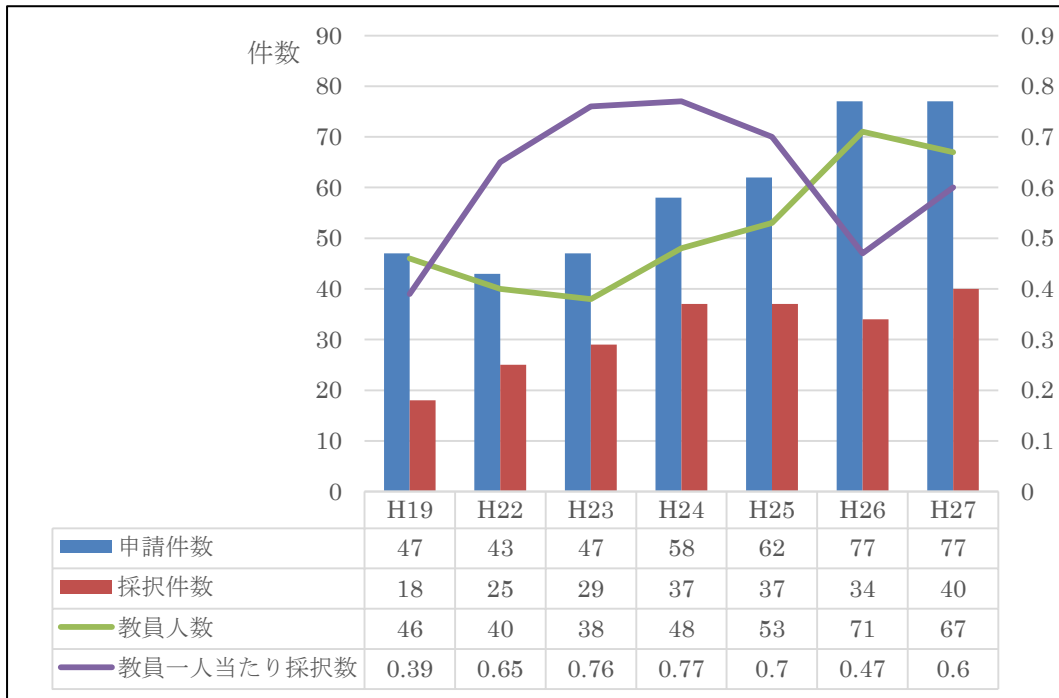
国際学会		H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	合計	
食物栄養	招待講演	1						1	
	一般発表	3	1	2	5	3		14	
	シンポジウム発表	2	1					3	
	ポスターセッション	7	20	11	31	19	24	112	
	その他(コメンテーター・司会等)	2				2		4	
	国際学会発表数合計	15	22	13	36	24	24	134	
住環境	招待講演	1				1	1	3	
	一般発表			5	17	12	9	43	
	シンポジウム発表	2	1	1			1	5	
	ポスターセッション	1	8	7	4	8	3	31	
	その他(コメンテーター・司会等)					2		2	
	国際学会発表数合計	2	9	13	21	23	14	82	
生活文化	招待講演			1		1		2	
	一般発表		2		3	2	3	10	
	シンポジウム発表	1				2		3	
	ポスターセッション		2		6	1	2	11	
	その他(コメンテーター・司会等)		1					1	
	国際学会発表数合計	1	5	1	9	6	5	27	
衣環境	招待講演								
	一般発表	4	2	3	8	8	11	36	
	シンポジウム発表								
	ポスターセッション			1	2	2	8	13	
	その他(コメンテーター・司会等)						1	1	
	国際学会発表数合計	4	2	4	10	10	20	50	
情報	招待講演	未設置							
	一般発表	未設置					3	6	9
	シンポジウム発表	未設置							
	ポスターセッション	未設置							
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置							
	国際学会発表数合計	未設置					3	6	
生活健康	招待講演	1						1	
	一般発表		1	2	5	2	1	11	
	シンポジウム発表	1		3	1	3	1	9	
	ポスターセッション	3	14	11	11	13	15	67	
	その他(コメンテーター・司会等)		1					1	
	国際学会発表数合計	5	16	16	17	18	17	89	
スポーツ	招待講演	未設置							
	一般発表	未設置							
	シンポジウム発表	未設置						1	1
	ポスターセッション	未設置					5	2	7
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置						1	1
	国際学会発表数合計	未設置					5	4	9
臨床心理	招待講演	未設置							
	一般発表	未設置					1	4	5
	シンポジウム発表	未設置							
	ポスターセッション	未設置							
	その他(コメンテーター・司会等)	未設置					2		2
	国際学会発表数合計	未設置					3	4	7

(3) 競争的資金の獲得状況

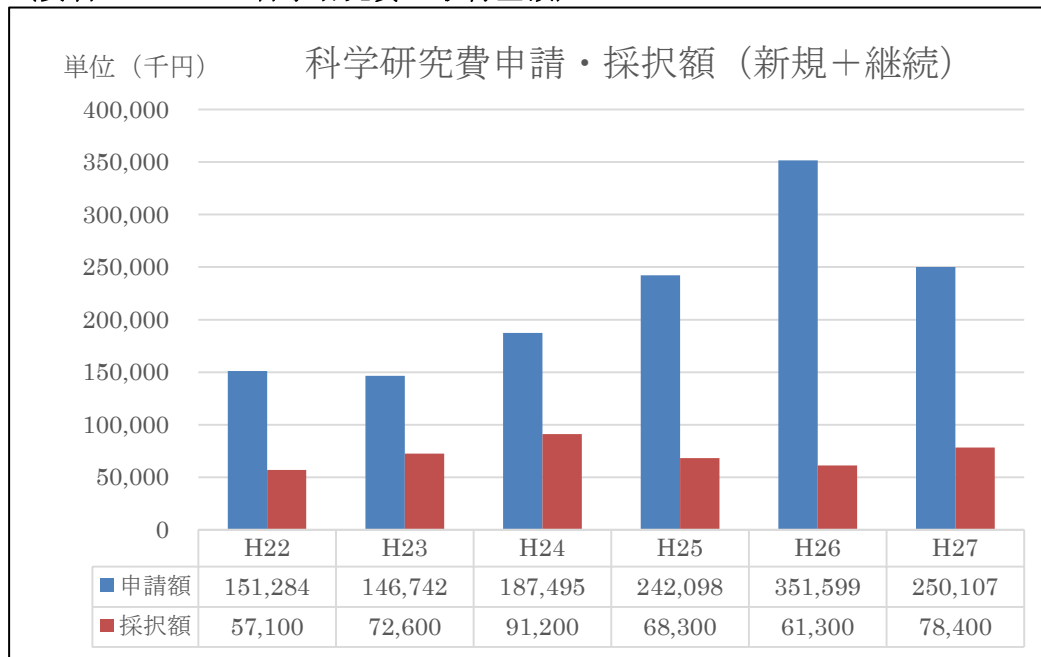
① 科学研究費の獲得状況

科学研究費の獲得状況はすこぶる良好である。平成 27 年度の採択件数は 40 件（教員 1 人あたり 1.68）であり（資料Ⅱ-I-13）、採択額の合計は合計 7840 万円であった（資料Ⅱ-I-14）。採択額の内訳では、基盤研究（A）や基盤研究（B）が採択額を中心を占めている。しかし、近年では、挑戦的萌芽研究や若手研究（A）が伸びている（資料Ⅱ-I-15）。また、研究テーマは各学科の特色を生かしたものとなっており、多くの教員がコンスタントに科学研究費を取得している（別添資料Ⅱ-I-16）。

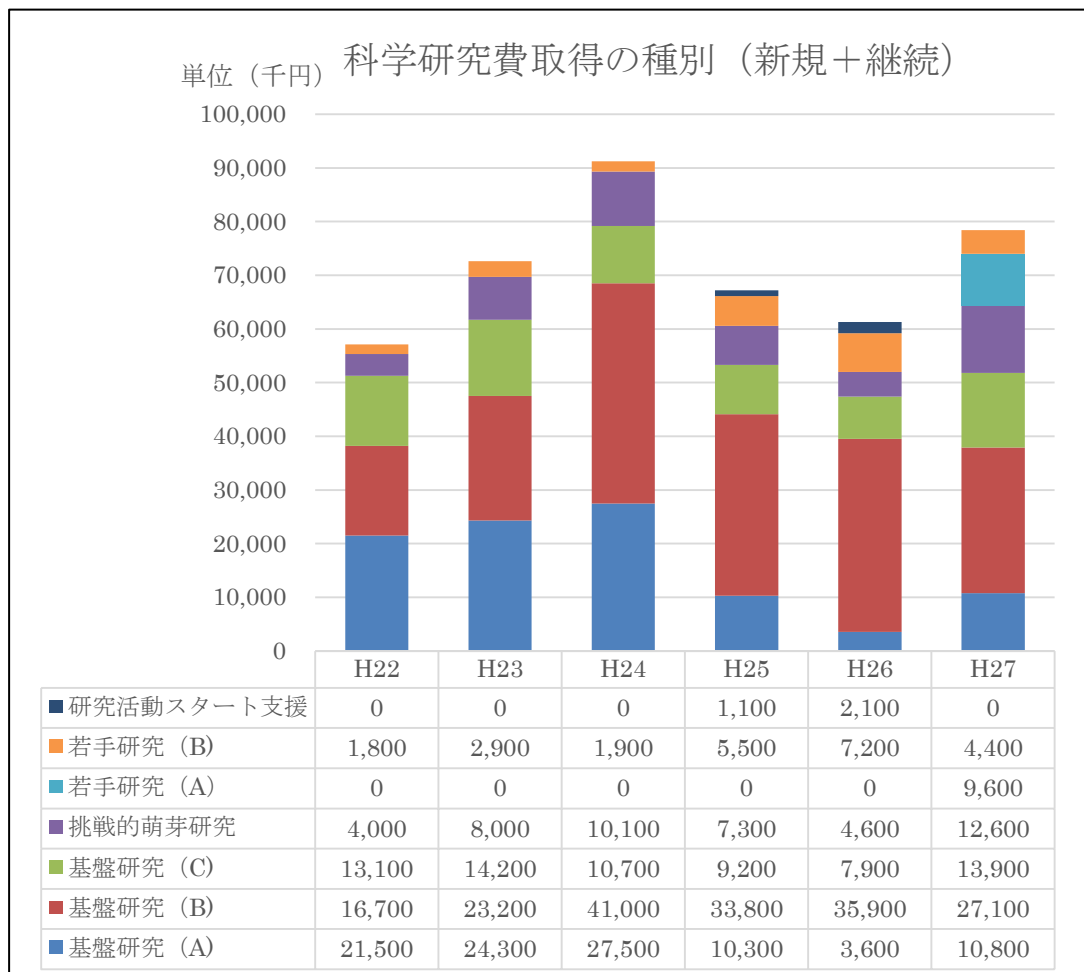
(資料Ⅱ-I-13：科学研究費の取得状況)



(資料Ⅱ-I-14：科学研究費の取得金額)



(資料Ⅱ-I-15：科学研究費取得の種別)



②科学研究費以外の外部資金 (委託研究・受託研究・寄付金等) の獲得状況

委託研究・受託研究・寄付金等の獲得件数は多い。件数は、平成 24 年度以降は、毎年 40 件前後になっており、増加傾向にある。平成 22～27 年の総獲得資金は、2 億 1200 万を超える (間接経費込) に達する (資料Ⅱ-I-1、P3-4)。また、企業との共同研究が多く、社会的ニーズに合致した研究が行われている (別添資料Ⅱ-I-17)。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 判断の理由として、4 点を指摘できる。①論文・著作・発表のいずれの形式においても、研究業績がコンスタントに発表されている。②科学研究費は、各学科コースにおいて過半数の教員が取得している。③企業や自治体からの委託金等については、学科・コースによって取得率の差が大きいですが、理系学科では多額の外部資金が取得できている。④公開シンポジウムやインターネットを通じた一般への情報発信にも熱心に取り組んでいる。

以上の点について、評価される水準を上回ると判断できる。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

(1) 研究成果の特徴と質

「研究業績説明書」が示す通り、各学科の研究目的に即した優れた研究成果が発表されており、研究成果は学術的・社会的に高い意義を有する。

(1) 食物栄養学科では、「健康増進、疾病予防」という目的に即して、生活習慣病予防(業績番号2)、食中毒(業績番号14)に関する研究が発表されており、ともに国際的に高い評価を得ている。

(2) 住環境学科では、「安全」「生活者の視点」という目的に即し、インド大津波後の住宅再建(業績番号11)、新しい生活様式に見合った設計(業績番号13)を発表したほか、ランドスケープデザインでは国土交通大臣賞及び日本造園学会賞を受賞した(業績番号12)。

(3) 衣環境学科では、合成繊維製品の高機能化の研究で繊維学会論文賞を受賞し(業績番号1)、高次構造解析手法の開発の研究により繊維学会賞を受賞し学会でも高く評価されている(業績番号10)。

(4) 生活文化学科では、アジアのリプロダクションについて海外調査をふまえた研究が行われており、助産師に期待・歓迎されている(業績番号7)。他方、ジェンダー史については学会の取組と連動しながら他大学の研究者と学際的研究を進めており、学界及び教育現場で高く評価されている(業績番号6)。

(5) 生活健康学コースでは、交感神経活動が睡眠時等に果たす役割に関する研究がインパクト・ファクターの高い雑誌に掲載されており、国際的影響が大きい(業績番号15)。また、体温と血流との関係(業績番号5)、閉経後の女性の肥満に関する研究(業績番号3)は着実に成果を上げており、国際的に定評のある雑誌に掲載されている。

(6) スポーツ健康科学コースでは、オリンピックに関する比較研究が行われ、関連シンポジウムを成功させる(資料Ⅱ-I-10参照)など注目を集めている(業績番号4)。

(7) 臨床心理学コースでは、東日本大震災と犯罪に関する研究が大きな注目を浴び、マスコミに多数出演した(業績番号8)。また、不登校の予後に関する研究が日本ヒューマンケア心理学会優秀発表賞を受賞した(業績番号9)。

(2) 学術的意義・メディアからの注目

学術的意義をはかる指標の一つである受賞歴は、年間数件ある(別添資料Ⅱ-I-18)。また、とくに臨床心理の諸研究はメディアから注目されており、テレビ出演や新聞でのコメントが多い(資料Ⅱ-I-19)。知的財産権についても毎年1～5件ほぼコンスタントに特許出願がなされている(資料：Ⅱ-I-20)。

(資料Ⅱ-I-19：マスコミ報道件数)

年度	合計	メディア		
		テレビ	ラジオ	新聞等
22	28			
23	25	4	1	
24	9	2		
25	38 (うち臨床心理 27)	16 (うち臨床心理 15)		22 (うち臨床心理 12)
26	28 (うち臨床心理 15)	5 (うち臨床心理 5)		23 (うち臨床心理 11)
27	35 (うち臨床心理 27)	17 (うち臨床心理 16)		18 (うち臨床心理 11)
合計	163	44	1	63

*臨床心理学コースは2013年より設置

(資料Ⅱ-I-20：知的財産権の取得状況)

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
特許出願件数	1	1	1	5	0	3
特許登録件数	1	2	1	1	1	0

(水準)期待された水準を上回る。

(判断理由)判断の根拠として、以下の3点を指摘できる。①各学科の研究目的に即した研究が着実に行われている。②研究評価も総じて高い。③社会的ニーズに適合した研究が多い。以上の点において、期待された水準を上回ると判断できる。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

1. 質の向上度

(1) 研究活動の状況

研究活動の状況について、以下の通りである。

①科学研究費の獲得状況は、第1期より大幅に向上している。科研費取得状況は、申請件数は教員人数に比例して伸びているが、採択件数はそれを上回って伸びている。一人当たりの採択件数は、平成19年度の0.39から急増し、0.47から0.77件に達する(Ⅱ-1-13)。金額では、第1期では2007年7630万円(教員数46)が最高で、2009年は5610万円(教員数39)であったのに対し、第2期では、2012年9120万円(教員数48)と教員数の増加以上に金額が増加している(Ⅱ-I-14、Ⅱ-1-15)。第2期6年間の教員1人あたり平均は143万円であった。

②科研費以外の外部資金の獲得金額は、おおむね年間4000万円以上にのぼり、2014年実績は4827万円であった。これには、1件900万円以上の委託研究(食物)も含まれる(別添資料Ⅱ-I-15)。第1期に比べると、寄付金が減り、委託研究等が増えており、全体として外部資金の多様化の傾向がうかがえる(Ⅱ-I-1)。

③一人あたり年間著書件数は、0.59(H19年度)から0.70(H22-H27年度平均)に上昇している(Ⅱ-I-5)。同論文件数は、3(H19年度)から2.3(H22-H27年度平均)にやや減少しているが、4を超える学科もある。また、第2期の論文総数(753件)のうち68%が査読付論文(450件)及び依頼論文(62件)であり、外国語論文比率は45%と、論文の質はきわめて高い(Ⅱ-I-7、Ⅱ-I-8)。一人あたり年間国内学会発表件数は4.8件にのぼり(H19年度は3件)、同国際学会発表件数は1.21件(H19年度は0.48件)と第1期から比べて倍増している(Ⅱ-1-11、Ⅱ-I-12)。学科の特徴を反映して、理系学科・コースのほとんどでは英語を用いた共同の研究活動、文系学科・コースでは単独の著述活動が中心となっている。

(2) 研究成果の状況

研究成果の状況について、以下の通りである。

①第1期に比べると、研究の国際比較や国際協力が拡大している(Ⅱ-I-2)。東日本大震災やインド大津波などの大規模災害、子どもや犯罪、男女共同参画の現状をふまえ、第1期よりも研究の実践性が強まっている。

②すべての学科・コースにおいて、各学科・コースの研究目的に即した高度な研究が行われている(研究業績説明書)。マスコミ報道件数は臨床心理がきわだって多く、コース新設置の効果が表れている(Ⅱ-1-19)。受賞も毎年コンスタントに見られる(別添Ⅱ-I-18)。

③理系学科・コースではインパクト・ファクターの高い雑誌への掲載が多く、文系学科・コースでは単著による著作活動が学会や関係者から高い評価を得ている(研究業績説明書)。

2. 注目すべき質の向上

第1期に比べて、第2期で大きく質の向上があったのは、①災害・犯罪などのリスクに対応する研究の発展、②ジェンダー研究の進展、③うつを含む心身の健康をめぐる研究の活性化である。これらについては、「研究業績説明書」及び科研費・外部資金取得一覧(別添資料Ⅱ-I-14、Ⅱ-I-15)が示す通り、学界及び産業界、社会のニーズに即して実践的・理論的な研究が学際的に展開されており、その点において注目すべき質の向上が見られる。

4. 人間文化研究科

I	人間文化研究科の研究目的と特徴	・・・	4-2
II	「研究の水準」の分析・判定	・・・	4-3
	分析項目 I 研究活動の状況	・・・	4-3
	分析項目 II 研究成果の状況	・・・	4-6
III	「質の向上度」の分析	・・・	4-9

I 人間文化研究科の研究目的と特徴

1 研究目的

人間文化研究科の研究教育の理念は、学際化、高度化、個性化であり、また、研究水準及び研究の成果等に関する中期目標として、『個性的かつ独創的な研究課題の策定に努め、高度な水準の基礎的・応用的研究及び学際研究を推進する』ことを掲げており、理念と目標は同一の目的を表現している。これらを受けて、中期計画で以下の目標を設定している（資料 I - 1）。

（資料 I - 1 : 中期計画 2 - 1 - 1 - 1）

『基礎研究と応用研究をそれぞれ深化させるとともに、それらの連携・融合による学際研究を推進する中で、以下の方向性を追求する。』

- 1) 高度な水準の基礎的・応用的研究を充実させる。
- 2) 研究者の個性を活かした独創的研究を育成する。
- 3) 真理を探究し、文化の発展に寄与する学問を追求する
- 4) 社会の現代的諸課題の解決に寄与する研究を推進する。

2 特徴

大学院は、2度の改組を経て、博士前期課程 12 専攻、博士後期課程 4 専攻となっている。平成 24 年度から、教員組織と教育組織に分かれ、それまで大学院と学部とで別々のポストであったものが統一されたため、人事交流が行われやすくなっている。また、構成員の殆どが大学院に所属しており、専門分野も多様であるため、上記の研究目的を達成するために十分な人員構成となっている。

中期計画においては、大学として重点的に取り組む領域として以下の研究分野を策定している。

- 1) 古代学を基盤とした「なら学」の研究
- 2) 人間の近接環境と生体の調節機能の研究
- 3) 自然科学の基礎的・応用的研究、人間と環境の共生に関する自然科学的研究
- 4) アジアにおけるジェンダーに関する研究

[想定する関係者とその期待]

学界

各専門領域における基礎研究、応用研究により、新現象や新しい知見の発見による貢献のみならず、異なる研究領域間の学際的研究による新たな視点からの研究の創設などにより、学界に寄与することが期待されている。

地域社会

奈良という歴史的に重要な土地において、「なら学」などによる奈良の地の価値や重要性の新たな発見や、奈良における女子大学という特別な環境下で、女性研究者の養成と個性的な研究が推進されることが地域社会から期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定
分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

人間文化研究科では、古代学学術研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センター、教育システム研究開発センター、共生自然科学研究センター等と連携した研究をはじめ、多様な研究分野での研究が行われている。博士前期課程の研究は、後期課程における研究と重なるため、後者の主な研究についてまとめる(資料Ⅱ-I-1)。

(資料Ⅱ-I-1：博士後期課程の主な研究活動)

比較文化学専攻		アジア・ジェンダー文化学研究センターや古代学学術研究センターと連携して、研究会、国際シンポジウム、都城遺跡調査、中国・韓国研究者による国際学術講演会など実施(別添資料Ⅰ-1)。理系と融合した環境歴史科学創生分野研究のシンポジウム等を実施(別添資料Ⅰ-2)。
社会生活環境学専攻	生活環境計画学講座	「防犯まちづくり」をテーマとして国内外で調査研究を実施。お茶の水女子大学との連合大学院設置に向け、生活工学分野の研究教育を実施。
	人間行動科学講座	「差異と交感」をテーマとした研究公開シンポジウムの実施(別添資料Ⅰ-3)。
	社会・地域学講座	社会学分野と地理学分野が連携して、「ジェンダー」、「生活空間」「高齢者問題」などをキーワードに研究を推進(別添資料Ⅰ-4)。日本の少子高齢化社会がはらむ諸問題に関する研究プロジェクトを推進し、アンケート調査などを実施。
	共生社会生活学講座	「消費者の意識調査」「近畿圏の高齢者と福祉に関する調査」研究プロジェクトを推進。ロボットと人の共生を考える研究やジェンダー関連の研究を推進。
共生自然科学専攻		共生科学研究センター主催の国際シンポジウムに協力し、複数の講座にまたがる「ライフサイエンスセミナー」を1・2か月に1回の頻度で毎年実施(別添資料Ⅰ-5)。日本原子力研究開発機構と細胞の内部構造を高解像度で撮像できる装置の共同開発を推進。古代史に関係するたんばく質に刻まれた歴史情報を解読する文理融合型プロジェクトで、古代学学術研究センターや奈文研との連携研究を展開(別添資料Ⅰ-2)。
複合現象科学専攻		数学、物理学、情報科学分野の基礎的応用的研究を推進するとともに、研究交流シンポジウムを毎年開催し、内外の研究者の研究交流を実施(別添資料Ⅰ-6)。

研究活動の実績

学会や研究会での発表、論文出版、著書出版

平成22年度から27年度において、教員一人当たり年あたり、論文は1.8編、著書は0.4冊、研究発表は3.6回となっており、活発な研究活動を反映している(資料Ⅱ-I-2)。

(資料Ⅱ-I-2：研究業績、論文数、著書数、研究発表数)

教員数は平成27年度5月時点の192名としている。

論文数(共著を含む)

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
文学系	53	49	60	58	51	63
理学系	140	176	192	192	146	52
生活環境学系	113	102	139	161	201	165
合計	306	327	391	411	398	280

著書数（共著、編著を含む）

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
文学系	39	35	57	71	55	38
理学系	9	11	14	10	9	2
生活環境学系	28	19	26	27	38	25
合計	76	65	97	108	102	65

研究発表等（国内外）

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
文学系	41	49	76	73	81	67
理学系	328	379	385	380	423	66
生活環境学系	252	274	312	315	321	287
合計	621	702	773	768	825	420

受賞数

受賞者数は年平均 7.5 件であり、第 1 期の平均 3.3 件を大きく上回っている。

（資料Ⅱ－Ⅰ－3：各年度及び研究分野ごとの受賞件数）

第二期

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
文学系	1	0	1	1	1	1
理学系	4	1	0	1	2	1
生活環境学系	5	2	3	6	6	9
合計	10	3	4	8	9	11

競争的資金

科学研究費補助金

申請率（申請件数／教員数）は、全学で 100% を超えており、採択率も年平均 54.4% であり、第一期の 42.1% を大きく上回っている。また、年平均獲得金額は 19,189 万円である（資料Ⅱ－Ⅰ－4）。

（資料Ⅱ－Ⅰ－4：科研費採択状況（学部兼任教員分を含む））

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
申請件数	222	243	228	271	273	268
採択件数	112	136	145	153	141	132
採択率（%）	50.5	56.0	63.6	56.5	51.6	49.2
金額（万円）	15,245	20,471	22,820	19,850	18,230	18,520

科研費以外の外部資金

平成 22 年度－27 年度の 6 年間の年平均額は 11,880 万円であり、科研費の半分以上の額に上っている（資料Ⅱ－Ⅰ－5）。

（資料Ⅱ－Ⅰ－5：外部資金獲得額（科研費以外、委託研究、共同研究、受託研究、寄付金など）

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
外部資金合計（万円）	12,231	12,524	10,571	12,133	12,555	11,264

国内及び国際共同研究

国内外との共同研究も活発で、近畿圏の研究所、大学をはじめ、国内外の大学・研究所など共同研究機関も多岐にわたる（資料Ⅱ－Ⅰ－6）。

（資料Ⅱ－Ⅰ－6：共同研究機関等）

奈良文化財研究所、奈良国立博物館、正倉院、橿原考古学研究所、東京文化財研究所、高エネルギー加速器研究機構、理化学研究所、総合地球環境学研究所、宇宙航空研究開発機構、日本原子力研究開発機構、海洋研究開発機構、国立がん研究センター、国立環境研究所、国立極地研究所、国立環境研究所、奈良先端大学院大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、立命館大学、関西医科大学、関西大学、和歌山大学、東京大学、筑波大学、岡山大学、山口大学。島津製作所、株式会社今西清兵衛商店、サントリー生物有機科学研究所、大同化学工業株式会社、三菱化学科学技術研究センター、ダイワ産業株式会社、コペンハーゲン大学、スミソニアン宇宙科学研究所、NASA、カールスルーヘ研究所、ロンドン大学、ゲッティンゲン大学、ルーベン・カトリック大学、ハノイ大学、アイルランド共和国トリニティーカレッジダブリン、レスター大学、大連理工大学、ガジヤマダ大学、内蒙古大学蒙古学学院

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）第一期と比べると、教員一人年度当たり、研究発表数（3→3.6）、年あたりの科研費採択率（42.1%→54.4%）と増えている。また、共同研究機関との研究も活発に行われている。これらのことから、高度な水準の基礎的・応用的研究が行われ期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況

(観点到に係る状況)

特に卓越した研究成果を以下に記載する。

学術面における成果

中期計画において大学として重点的に取り組む領域としあげた項目1) - 4) と、それ以外5) について記載する。

1) 古代学を基盤とした「なら学」の研究

古代学学術研究センターと連携して以下の研究が行われた。日本古代の都城と木簡の研究(業績番号19)では古代の都城の実態解明を環境・思想的側面から行き、29編の学術論文からなる書籍を出版し、都城遺跡調査の実施、中国・韓国研究者による国際学術講演会、研究会・シンポジウムを毎年開催し(別添資料I-1)、新聞報道などもされ、成果をあげている。また、古代アジアにおける膠生産の研究(業績番号22)、および考古学資料中の超微量たんぱく質の同定の研究(業績番号9)においては、タンパク質質量分析の手法を用いて膠の成分であるコラーゲンの原料となった動物種を特定できることを明らかにし、理系と融合した環境歴史科学分野を創生した(別添資料I-2)。前者は、「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の最終評価結果表において、期待以上の成果があったとされるA評価を受けている。

2) 人間の近接環境と生体の調節機能の研究

生活習慣病予防を目指した食品機能成分の作用機構解明の研究(業績番号5)では、発表論文の一つが掲載雑誌のハイライトに選ばれ、また別の論文は引用数9000回弱となるなど、卓越した成果を上げている。また、共生科学研究センターと協力して定期的にセミナーを開催し(別添資料I-5)、更に、諸学会のシンポジウムでの発表や種々の招待講演を行った。交感神経活動の循環機能調節に関する研究(業績番号50)では、独自の方法により意識下での多様な臓器の交感神経活動の同時測定を行い、高次神経系の関与を議論可能とした。論文が掲載された雑誌は、インパクトファクター(以下IF)が3-6以上で50回以上引用された論文もあり、国際学会での招待講演などに選出されている。

3) 自然科学の基礎的・応用的研究、人間と環境の共生に関する自然科学的研究

ミッションの再定義で、機能強化の理系分野として基礎物理学、分子科学、基礎生物学、高エネルギー物理学が挙げられており、以下の業績がある。

基礎物理学分野: 宇宙最大の天体である銀河団の形成進化に関する研究では、X線分光観測の独自な手法により、銀河団が動的な系であることを明らかにした。国際天文学連合から招聘されたレビュー論文や、権威ある学術雑誌へ論文を出版し、プロジェクトを代表して国際会議での招待講演などを行っている(業績番号34)。

分子科学分野: 以下の3つの研究では、いずれもIFの高い雑誌に論文が掲載されている。直線状の有機物を鋳型とした多核金属錯体の精密合成を行った研究(業績番号37)の成果は、カバーピクチャーで研究が紹介された。また、希土類金属イオンを基盤とする単分子磁石合成の研究(業績番号38)では、被引用回数が4年間で70を超える論文や、月間アクセス数トップ10に入る論文を出版した。特定金属イオンに対する蛍光センサーの開発の研究(業績番号39)では、有害重金属イオンに対する高選択的蛍光検出剤の合成に成功し、カバーピクチャーで研究紹介され、またイノベーションジャパンなどで取り上げられ、広く世間に知られるようになった。

基礎生物学分野: 緑藻ボルボックスのゲノムの研究(業績番号43)は、「単細胞生物から多細胞生物への進化」の視点からの研究であり、その成果は、Scienceへの2編の論文など、IFが高い雑誌に掲載され、また、多くの新聞の科学欄に取り上げられている。クラスリン集合因子CALMの生理学的機能についての研究(業績番号44)は、CALMがアルツハイマー

病のリスク因子であるなど、様々な疾患に対する重要な要因であることを明らかにし、その成果は I F の高い雑誌に掲載され、新聞雑誌でも取り上げられた。動物の成熟後の網膜再生の研究（業績番号46）は、世界ではじめて有尾両生類以外の動物で網膜を全摘出後、再生する事を明らかにし、更に器官培養系での再生メカニズムを明らかにした。国際シンポジウムでの招待講演、海外の学術本の執筆依頼、新聞等での紹介等、成果が評価されている。

高エネルギー物理学分野：高エネルギー加速器機構での実験のデータを解析し、チャームあるいはボトムを含む4クォークからなる新粒子をいくつも発見し（業績番号33、36）、I F の高い雑誌への複数の論文が掲載され、いずれも被引用回数が100-200となっている。

4) アジアにおけるジェンダーに関する研究

アジア・ジェンダー文化研究センターと連携した奈良高等女子師範学校の留学生に関するジェンダー研究（業績番号10）では、帰国留学生へのヒアリング調査等により、留学生教育をジェンダーの視点から調査した。留学生史以外に東アジア交流史等の分野からも注目され、国際シンポジウムでの招待講演などを行っている。ジェンダーの視点に立つ『新しい世界史』の構想と『市民教養』としての構築・発信に関する研究（業績番号12）では、日本で初めてジェンダーの視点から高校世界史教科書を執筆し、雑誌の書評などで各方面の専門家から高く評価されている。

5) 上記以外の研究分野における成果

文学系 日本語活字印刷史の研究（業績番号14）は、漢字と仮名による多様な日本語の書字活動の活字化をグローバルな視野で解明したものであり、学会誌等で高く評価されている。宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究（業績番号17）では、殆ど研究されなかった宋代に編纂された総集について研究書や総説を出版し、書評などで高く評価されている。否定の2分法に関する研究（業績番号18）では、否定を2分するのは、真理関数性に基づく2分法ではなく帰属性であることを明らかにした。論文は当該領域の最高の国際雑誌に掲載され、リポジットリー引用件数が、2013年以降、1位-12位（100回-1000回）の月が複数回あり、招待講演もを行っている。解釈学的臨床教育学の理論構築と実践（業績番号29）は、言語構築主義的な教育哲学の立場を原理論的に検討し、臨床教育的なプロジェクトを通して実践的に確かめた研究で、著書は関連学会誌の書評等で高く評価され、また学会のシンポジウムのテーマにも設定されシンポジストとして報告を依頼された。

理学系 数学分野 無限次元リー代数、その量子群および無限次元リー代数の拡張概念である W 代数の表現の研究（業績番号30）の成果は、共形場理論等への応用や今後の表現論の方向性を示す卓越したものであり、日本数学会の2013年度代数学賞を受賞した。情報科学分野 衛星リモートセンシングによる大気中微量成分の動態解明の研究（業績番号3）は、人工衛星からの下層オゾンの観測が可能であることを世界で初めて示し、論文は I F が5以上の雑誌に掲載され、NASAのNewsletterにも図入りで掲載された。

社会、経済、文化面における成果

文学系分野 「なら学」関連の研究（業績番号22）において、文理融合した研究体制による新しい歴史学領域を創成した。また、「らくらく農法プロジェクト」（業績番号26）による様々な地域づくり活動で経済的成果が得られた（別添資料Ⅰ-4）。奈良女子高等師範学校の留学生についての研究（業績番号10）では、本学記念館で公開展示し、過去5年間で最高の入場者数を記録した。日本語活字印刷史の研究（業績番号14）では、新聞等に研究成果が紹介され、「嵯峨本フォント（フリー・フォント）」の開発に協力した。ジェンダー言語文化プロジェクト研究（業績番号11）では、ジェンダーの入門書が刊行され、テキストや参考書として好評を博した。アルベール・カミュの研究では、国際的に高い評価を受けた（研究業績16）。

理学系分野 I MSによる土壌由来カビ検出データベースの構築（業績番号2）の成果は微生物の早期同定という観点から実用化を期待されている。特定金属イオンに対する蛍光

センサーの開発の研究（業績番号 39）では、基盤技術として重要な高選択的蛍光検出剤の合成に成功した。また、本学と奈良県の共同開発で、ナラノヤエザクラから酵母分離とそれを用いた清酒等の製造方法で特許を取得している（業績番号 49）。衛星の衛星リモートセンシングによる大気中微量成分の動態解明（業績番号 3）においては、下部対流圏オゾンの動態を世界で初めて示し、中国から日本への越境汚染の実態を捉え新聞報道された。

生活環境学系分野 生活習慣病予防に関する研究（業績番号 5）では、健康な生活のための食品・栄養に関する優秀な論文としてネスレ栄養科学論文賞を受賞した。アジアにおける近代化とリプロダクションの研究（業績番号 24）の成果は社会に発信され、出産についての成果を医療専門職集団に還元した。不登校の予後の研究（業績番号 28）の成果は、文科省の「不登校に関する調査研究協力者会議」や各都道府県の講演会等で報告された。大規模災害後の犯罪に関する研究（業績番号 25）では、阪神・淡路大震災および東日本大震災後の犯罪現象について、多くの新聞で報道された。オリンピック開催後の都市・地域変容を評価・検証する実証研究（業績番号 7）に関しては、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、多くのマスコミから取材、寄稿依頼された。また、ランドスケープデザイン及び都市デザインに関する設計理論の有効性に関する検証の研究（業績番号 41）において、国土交通大臣賞や日本造園学会賞等を受賞している。ジェンダーの視点に立つ新しい世界史の教科書（業績番号 12）は高校教師等から評価され、出版後半年で4刷となった。

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由） 学術的研究は、I Fの高い欧文誌への論文掲載や、被引用回数の多い論文、招待講演、科研費取得状況などから、期待される水準を上回ると判断される。また、社会、経済、文化面では、マスコミの取材、新聞報道、企業からの訪問、講演依頼、雑誌への掲載状況などから、期待される水準を上回る多様で個性的な研究が行われたと判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

第一期と第二期の活動状況を比較すると、論文数や著書数については、実質的にはほぼ等しいが、教員一人年度当たりの研究発表数が3から3.6に増加し、年あたりの受賞数が3.3件から7.5に、また、科研費採択率が42.1%から54.4%と12ポイントも増えていることから、質の向上が窺える。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

1. 学術論文や書評、招待講演、I Fの高い欧文誌への論文掲載、被引用回数の多い論文、新聞報道等から判断されるように、以下の分野で顕著な業績があげられ質の向上が窺える。

- ・「なら学」関連の古代の都城制等に関する研究
- ・人間の近接環境と生体の調節機能の研究
- ・ジェンダー関連の研究
- ・ミッションの再定義における機能強化分野、基礎物理学、分子科学、基礎生物学、高エネルギー物理学

2. 以下は、第二期に開始された研究である。

- ・らくらく農法プロジェクト

地域づくり活動の新規プロジェクトで、高齢農家の柿の葉栽培を奈良県内に定着させる等、経済的成果を上げた。特に、2014年の下市町のプラチナ大賞優秀賞受賞に大きく貢献した。

<http://www.platinum-network.jp/about/opinion/#point02>

- ・理系と融合した環境歴史科学分野の創生

理系の技術を古代史の研究に応用した新たな視点からの研究領域が創生され、成果が上げられた。

研 究

文 学 部

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅱ-I-1 : 「なら学」プロジェクトの研究活動実績、および教育の資料	P 1
別添資料Ⅱ-I-2 : 「ジェンダー言語文化学」プロジェクトの研究活動実績	P 2
別添資料Ⅱ-I-3 : 『恋をする、とはどういうことか？—ジェンダーから考えることばと文学』の表紙	P 2
別添資料Ⅱ-I-4 : 「差異と交感の人間学」プロジェクトの研究活動実績	P 2
別添資料Ⅱ-I-5 : 「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」最終評価結果表	P 3
別添資料Ⅱ-I-6 : 「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」 研究開発領域 研究開発プロジェクト事後評価 評価報告書の抜粋	P 3
別添資料Ⅱ-I-7 : 国際研究交流件数	P 4
別添資料Ⅱ-I-13 : メディア等で報道された文学部の研究—抜粋	P 4
別添資料Ⅱ-I-17 : 平成 27 年科学研究費「細目別過去 5 年の新規採択の累計数の上位 10 機関」	P 6
別添資料Ⅱ-I-21 : 文学部研究交流集会開催状況	P 6

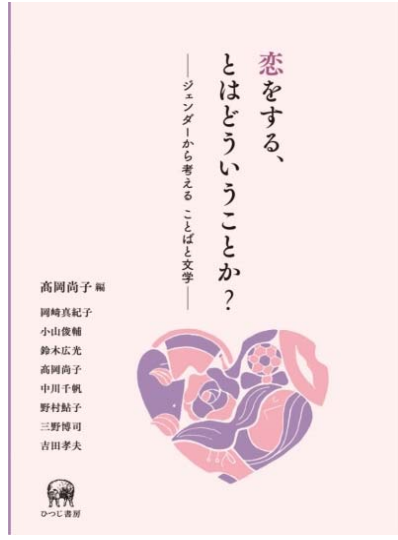
(別添資料Ⅱ-I-1:「なら学」プロジェクトの研究活動実績、および教育の資料)

	日付	形態	テーマ	報告/登壇者	会場	人数	備考
22年度	7月9日	2010年度第1回なら学談話会	「近代奈良の史蹟と陵墓—その学知と保存」	高木博志氏(京大人文研)	本学N339	50	
	10月13日	2010年度第2回なら学談話会	奈良にある国公立大学と地域	安村克己氏(奈良県立大学)、渡辺伸之氏(奈良教育大学)、石崎研二(本学)、内田忠賢(本学)	本学N339	15	
	10月28日	共催事業	平城京の姿とくらし	館野和巳(本学)	本学理学部会議室	50	文学部公開講座
	3月23日	研究発表会	奈良女子大生による奈良に関する研究発表会	本学学生	元興寺禅室	40	
23年度	7月12日	2011年度第1回なら学談話会	奈良の伝統産業	綿谷基氏(株式会社呉竹社長)	本学N101	50	
	11月21日	2011年度第2回なら学談話会	奈良と平泉	前川佳代(本学)	本学生活環境学部会議室	40	文学部公開講座
	12月13日	2011年度第3回なら学談話会	奈良の食文化	林崎幸一氏(奈良の食文化研究会)	本学N302	45	
	3月3日	2011年度第4回なら学談話会	水害と復興—奈良県南部の経験から考える—	藤田佳久氏(愛知大学名誉教授)、松實崇氏(十津川村役場)、松原佳史氏(野迫川村役場)	本学N302	40	
	3月22日	研究発表会	奈良女子大生による奈良に関する研究発表会	本学学生	元興寺禅室	40	
24年度	2月10日	なら学東京講座	お水取りと奈良の秋・冬の祭り	武藤康弘(本学)	奈良まほろば館(東京)	70	
	2月11日	なら学東京講座	『源氏物語』の奈良	西村さとみ(本学)	奈良まほろば館(東京)	70	
	2月26日	共催事業	奈良の舞とおどり—生活を彩る聖なる遊び—	平井タカネ氏(名古屋学芸大学)	本学N302	45	文学部公開講座
	3月2日	なら学東京講座	奈良の世界遺産	上野邦一(本学)	奈良まほろば館(東京)	70	
	3月10日	なら学東京講座	絵図・地図で見る奈良の街	内田忠賢(本学)	奈良まほろば館(東京)	70	
	3月23日	研究発表会	奈良女生による奈良に関わる研究発表会	本学学生	元興寺禅室	45	
25年度	6月25日	2013年度1回なら学談話会	伝統を現代に活かす。奈良の地場産業の現場から	足立悠氏(株式会社呉竹)	本学N302	45	
	10月22日	2013年度2回なら学談話会	会所から見る奈良町の特徴	有安美加氏((社)奈良まちづくりセンター理事)	本学N302	50	
	12月7日	2013年度3回なら学談話会	言葉から見る奈良とイランとユーラシア	矢島洋一(本学)	本学S124	15	
	2月22日	第1回なら学研究会	奈良の地域史研究について	山上豊(元・県立図書館)	本学N333	10	
	3月23日	研究発表会	奈良女子大生による奈良に関わる研究発表会	本学学生	元興寺禅室	40	
26年度	4月19日	第2回なら学研究会	奈良県内の民俗調査回顧1	浦西勉(龍谷大学)	本学N333	8	
	6月22日	第3回なら学研究会	奈良県内の民俗調査回顧2 および今西錦司『村と人間』について	浦西勉(龍谷大学)寺岡伸悟(本学)	本学N333	8	
	6月25日	2014年度第1回なら学談話会	奈良にある大学と地域—若手研究者に学ぶ	岡本健(奈良県立大学)、河口充勇(帝塚山大学)、西村雄一郎(本学)	本学N339	16	
	8月31日	第4回なら学研究会	安彦勤吾先生の奈良地域史研究	岩坂七雄氏(奈良市教育委員会文化財課)	本学N339	10	
	11月29日	第5回なら学研究会	天理図書館と大和郷土研究史回顧	平井良朋氏(天理大学名誉教授)	本学N333	10	
	1月25日	2014年度第2回なら学談話会	地域社会の特性と部落問題—奈良から考える—	井岡康時氏(県立同和問題関係史料センター)	本学N302	20	
	3月1日	第6回なら学研究会	沢田四郎作の文献カード—大阪大谷大学所蔵「澤田文庫」調査経過報告—/澤田文庫と民俗調査	磯部敦(本学)、樽井由紀(本学)	本学N333	8	
27年度	6月21日	第7回なら学研究会	寺湯の民俗学的研究/大阪大谷大学澤田文庫調査について/大和の研究者(研究史)、大和の技術の伝承(者)について—中間報告	磯部敦(本学)、樽井由紀(本学)、寺岡伸悟(本学)	本学N339	8	
	7月21日	2015年度第1回なら学談話会	ガイディングのヒント—外国人観光客に奈良をどう案内するか—	寺門由美子氏(通訳案内士・英語、奈良ウォーク会長)	本学N339	10	
	8月8日	第8回なら学研究会	中野文彦・池田末則の大和研究・地名学を中心に	大矢良哲氏(奈良工業高等専門学校)	本学N339	8	
	8月26日	調査	大阪大谷大学「澤田文庫」調査	参加者:奥村隆彦、浦西勉(龍谷大学)、山上豊(元・県立図書館)、寺岡伸悟(本学)、磯部敦(本学)	大阪大谷大学図書館	5	
	9月27日	第9回なら学研究会	澤田文庫調査報告及び今後の検討課題について	磯部敦(本学)、寺岡伸悟(本学)	N339	10	
	12月5日	2015年度第2回なら学談話会	奈良甲冑師を知っていますか?	宮崎隆旨(元・奈良県立美術館館長)	N302	40	
	2月14日	第10回なら学研究会	奈良県方言の特徴と動態	中井精一(富山大学)	N339	12	
	3月10日	調査	大阪大谷大学「澤田文庫」調査	磯部敦(本学)、寺岡伸悟(本学)、岩坂七雄(奈良市教育委員会文化財課)、山上豊(元・県立図書館)	大阪大谷大学図書館	4	

(別添資料Ⅱ-I-2:「ジェンダー言語文化学」プロジェクトの研究活動実績)

	日付	形態	テーマ	報告/登壇者	会場	共催等	参加者数
22年度	平成22年12月8日	シンポジウム	女どうし/男どうし—文学に見る同性関係	高岡尚子(本学)・吉川佳英子氏(京都造形芸術大学)	本学D012	アジア・ジェンダー文化学研究センター	30名
23年度	平成23年12月16日	シンポジウム	ジェンダーとパフォーマンス	戸谷陽子氏(お茶の水大)、中川千帆(本学)、西出良郎(本学)	本学S301	アジア・ジェンダー文化学研究センター	50名
24年度	平成24年12月18日	シンポジウム	私語りとジェンダー	飯田祐子氏(神戸女学院)、吉川仁子(本学)、鈴木広光(本学)	本学S228	アジア・ジェンダー文化学研究センター	70名
25年度	平成25年6月7日	講演会	日本中世物語におけるセクシュアリティ	木村 朗子氏(津田塾大学)	本学N301	アジア・ジェンダー文化学研究センター/日本アジア言語文化学会	70名
26年度	平成26年6月~7月	連続セミナー	中国フェミニズム/ジェンダー研究1~5	李小江氏(大連大学)	本学N325	日本アジア言語文化学会	12名
	平成26年10月26日	講演会	婦女能頂半边天? (女性は天の半分を支えられるか?)	李小江氏(大連大学)	本学N339	日本アジア言語文化学会	32名
	平成26年12月19日	シンポジウム	恐怖・嫌悪・欲望とジェンダー	玉田敦子氏(中部大学)・倉田容子氏(駒澤大学)・中川千帆(本学)・高岡尚子(本学)	本学N301	アジア・ジェンダー文化学研究センター	50名
27年度	平成27年9月12~13日	公開研究会	各国文学研究とジェンダーの交わるところ—恐怖・嫌悪・欲望をめぐって	玉田敦子氏(中部大学)・倉田容子氏(駒澤大学)・中川千帆(本学)・高岡尚子(本学)	本学S230	なし	5名
	平成27年12月4日	講演会	日 仏 女性 雑誌	江下雅之氏(明治大学)・高岡尚子(本学)	本学S228	アジア・ジェンダー文化学研究センター	40名

(別添資料Ⅱ-I-3:『恋をする、とはどういうことか?—ジェンダーから考えることばと文学』の表紙)
 編者・執筆者ともすべて言語文化学科の教員



(別添資料Ⅱ-I-4:「差異と交感の人間学」プロジェクトの研究活動実績)

年度	日付	形態	テーマ	報告/登壇者(敬称略)	参加人数	会場
23年度	平成23年9月20日	研究会	最初期の少年野球小説に見る『男らしさ』—「運動の精神」と「野球美談」—(1)	功刀俊雄(本学)	5	本学F406
	平成23年11月21日	研究会	最初期の少年野球小説に見る『男らしさ』—「運動の精神」と「野球美談」—(2)	功刀俊雄(本学)	4	本学F406
	平成23年12月17日	公開シンポジウム	現代社会における若者の居場所	中村伸一(中村心理療法研究所室長) 池田曜子(本学博士研究員) 益川優子(中京学院大学中京短期大学部准教授) 鮫島京一(奈良女子大学附属中等教育学校教諭) 岡澤祥訓(奈良教育大学教授)	80	本学N202
	平成23年12月18日	研究会	心理学からみた家族関係の今	中村伸一(中村心理療法研究所室長) 村田紀子(本学大学院前期課程) 諏澤宏恵(本学大学院後期課程) 足立法子(本学大学院後期課程)	15	本学N202
	平成24年1月21日	研究会	ゲーテ自然科学のアクチュアリティ	西村拓生(本学)	10	本学F406
	平成24年2月11日	研究会	押川春浪の閉じられた冒険—「少年冒険小説作家」の誕生をめぐって—	鈴木康史(本学)	5	本学F406
	24年度	平成24年8月25日	検討会	「<少年> 性の再生産」検討会	功刀俊雄(本学)	3
平成25年2月16日		検討会	「<少年> 性の再生産」検討会	鈴木康史(本学)	3	本学F406
平成25年2月22日		研究会	サポートとつながりの心理学	二宮麗(本学学部生) 瀬戸香澄(本学学部生) 森下文(本学大学院前期課程)	8	本学N215
平成25年3月7日		公開研究会	ケアの倫理と純粋贈与	矢野智司(京都大学大学院教育学研究科教授) 麻生武(本学)	30	本学Z302
26年度	平成27年2月23日	公開研究会	「おくりもの」としての物語—子どもと大人が出会う場所—	矢野智司(京都大学大学院教育学研究科教授)	50	佐保会館
27年度	平成28年2月20日	公開研究会	なにが一緒に、どこが違う?—障碍児への支援について考える	木下孝司(神戸大学大学院教授) 麻生武(本学名誉教授) 狗巻修司(本学)	23	本学S124

(別添資料Ⅱ-I-5:「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」最終評価結果表)

「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」最終評価結果表

研究テーマ(領域)	文化財に含まれる膠の自然科学的分析による古代文化史および技術史の解明	
研究総括	宮路 淳子	
所属機関・部局・職	奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授	
評価区分		
○	A	事業の目的に照らして、期待以上の成果があった。
	B	事業の目的に照らして、十分な成果があった。
	C	事業の目的に照らして、相応の成果があった。
	D	事業の目的に照らして、相応の成果があったとは言いがたい。
	E	成果がなかった。
評価にあたっての意見		
<p>化学分野と人文科学が異分野融合して膠の精緻な科学的分析方法を創造し、古文化財調査に異分野融合的知見を導入したことは、重要な成果である。膠のコラーゲン抽出技術の開発と墨の動物種の同定のための技術を確立し、この技術を用いて少数ではあるものの、古文化財から新たな歴史的側面を明らかにした点は評価できる。また、本手法はタンパク質を含む試料であれば応用が可能であるため、今後網を含む、広範な試料への適応も期待される。</p> <p>一方で、コラーゲン中の不純物の抽出・測定における未解決課題の解明や集められた資料の詳細な解析については一層の努力を待ちたい。</p> <p>研究の発信及び普及の努力は評価できるが、海外も含めて研究成果のより積極的な成果発信を期待したい。</p>		

(別添資料Ⅱ-I-6:「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」 研究開発領域 研究開発プロジェクト事後評価 評価報告書の抜粋)

2-3. 「高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発」(カテゴリーⅡ)
 研究代表者: 寺岡 伸悟 (奈良女子大学 文学部人文社会学科 教授)

2-3-1. 総合評価

研究開発目標の達成状況、社会的貢献の状況及び将来展開の可能性、研究開発を通じての新たな知見の取得等の研究開発成果の状況を総合的に見て、十分な成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、過疎や高齢化によってその存続について様々な課題に直面する我が国の中山間地の農村コミュニティの1つである奈良県下市町をフィールドにして、高齢者でも容易に扱える新しい電動運搬車と「らくらく栽培」システムを導入することで畑のバリアフリー化を実現し、高齢営農者が楽しく生き生きと農業を営める環境の構築を目指した。その実現のため、コミュニティの状況を調査し、コミュニティ構成員による将来展望を支援する集落の点検手法を開発した。

住民の継続的な生業を基本とし、住民と自治体が一体となったアプローチが取られたことを高く評価する。農山村の基本的な構成要素をコミュニティ(ムラ)、生業(農業)、からだ(健康)、道具(機械)の4つの次元に分類したことは独自の視点であり、それに関わる各研究グループが、専門性と他領域への関心を活かしつつ、それぞれが課題設定し、住民・組織をエンパワーメントしながら一体となって解決を目指したことが有効に機能したといえる。その結果、電動運搬車の開発や、コミュニティの経済的自立を促す団体の設立³、下市町の組織の見直し(地域づくり推進課の新設)や政府助成事業への申請・採択等、地域社会のアクションにつなげることに貢献した。

集落点検法では、農業を続けられる条件を模索する上で、「コミュニティの10年後」という時間軸を設定し、地域の住民が共通の認識を持ち、連携していくことが大事だということを示した。これは高齢者の就労や生きがい作りにとどまらず、農村地域全体の将来を見すえた事業展開を可能にするものであろう。研究開発期間終了後の継続性を考慮し、自治体にも参画を求めて地域社会を支える仕組みを検討したことや、「柿の葉」生産という新たな事業に結びつけた成果は大きい。3年間という短い期間の中で、これだけの成果をあげたことは特筆すべきことである。今後、成果をアクションリサーチとして論文等にまとめていくことを期待したい。

(別添資料Ⅱ-I-7: 国際研究交流件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59
海外出張・研修件数	16	26	29	32	22	24
海外研究者受入件数	2	3	3	5	5	2

(別添資料Ⅱ-I-13: メディア等で報道された文学部の研究一抜粋)

日付	記事内容	媒体
2015/8/27	「まちかどLIVE 柿農家を救う“助っ人”登場! ~下市町~」『ならナビ』放送	NHK奈良
2015/7/25	本学古代学術研究センター後援の、奈良時代の写経、木簡と現代のメールを比較し、古代の文書の魅力を探る講座が、7月24日に開かれた。	奈良
2015/6/23	長寿時代の学びについてをテーマに、本学元学部長で現放送大学奈良学習センター所長の三野博司氏と本学文学部の西村拓生教授の対談が企画され、内容が取り上げられた。	奈良
2015/6/5	平城宮跡サポートネットワークの平城宮跡歴史講座「遣唐使を語る」で本学の館野和己教授が講演した。	奈良
2015/5/19	大学による高齢者の健康づくり・生活支援の例として、奈良県下市町の山間地で高齢者の営農を助ける「らくらく農法」に取り組み、農業のバリアフリー化を目指している、本学社会連携センターが取り上げられた。	読売(夕刊)
2014/10/15	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館が、秋季特別展・特別陳列「飛鳥宮と難波宮・大津宮」の研究講座を10月19日、11月2・23日に開催する。館野和己・本学教授が11月2日の講座を担当する。	読売
2014/10/1	「らくらく農法」でプラチナ大賞優秀賞を受賞～ 国営五条吉野地区の造成団地で柿葉生産～	農水省・近畿農政局・国営土地改良事業地区等営農情報誌「双葉」No.28
2014/8/29	本学古代学術研究センターが奈良県立万葉文化館との共催で、8月30日午後1時30分から、「和歌と物語ー『萬葉集』を中心として」をテーマにした公開講座を開く。	奈良
2014/8/28	縄文時代の土偶について、本学の武藤康弘教授が解説を行った	読売こども新聞
2014/7/23	本学が参加する、高齢化する農村の維持を目指す下市町栃原地区の産・官・学・民プロジェクト「らくらく農法」が、将来の社会モデルを表彰する「第2回プラチナ大賞」(プラチナ構想ネットワークなど主催)で優秀賞を受賞した。	奈良
2014/7/16	本学が参加する、高齢化する農村の維持を目指す下市町栃原地区の産・官・学・民プロジェクト「らくらく農法」が、将来の社会モデルを表彰する「第2回プラチナ大賞」(プラチナ構想ネットワークなど主催)で最終審査に残った。	奈良
2014/6/1	「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」	『福祉介護テクノプラス 2014年6月号』
2014/5/10	本学研究院人文科学系・吉川仁子講師と弦巻克二名誉教授が、池田小菊の未発表小説「ナハロフカ(無能者)」について、文化団体「白樺サロンの会」の会誌「りずむ」に掲載した。	毎日
2014/5/6	本学研究院人文科学系・吉川仁子講師らの調査で、池田小菊の未発表原稿「ナハロフカ(無能者)」が見つかった。	読売
2014/4/19	本学研究院人文科学系・吉川仁子講師が、池田小菊の未発表小説「ナハロフカ(無能者)」の草稿を入手し、奈良市の市民団体「白樺サロンの会」の会誌「りずむ」に掲載した。	産経・奈良
2014/3/24	福生平太郎の1992年の著書「何か空を飛んでいる」が復刊された。「福生平太郎」は英国の神秘主義や幻想文学を研究している本学研究院・横山茂雄教授のペンネーム。	朝日
2014/3/7	本学研究院准教授・寺岡伸悟と大和高田市の「三晃精機」が連携し、傾斜に強い農作物の運搬車を開発した。	読売
2014/2/2	本学研究院加須屋誠教授が恩師との共著「仏教美術を学ぶ」を出版。2月2日の14時、パライ学園前「楽・元氣プラザ」で、発刊を記念した講演会がある。	読売、奈良、毎日
2014/1/9	本学と奈良県農業総合センター果樹振興センターなどがチームを組んで取り組む「らくらく農法」が紹介された。	日本農業新聞
2013/12/18	12月15日に開催された本学古代学術研究センター主催の国際シンポジウムが紹介された。	読売
2013/12/13	「ええとこ」で本学研究院 寺岡准教授が奈良の食の魅力について紹介	NHK総合(TV番組)
2013/11/28	12月1日午後1時半から本学文学部S棟228教室にて、関西の大学の歴史学者らでつくる研究グループ主催のシンポジウム「立憲主義の危機とはなにか」が開かれる。本学小路田泰直教授らが「危機」の歴史的な起源や意味を掘り下げる。	朝日
2013/7/20	7月13日、東日本大震災で被災した経験や思いを詩にして発信している福島市在住の詩人・和合亮一さんの講演会「福島に生きる 福島を生きる」(文学部公開講座)が開催され、約160人が参加した。	読売
2013/7/15	特集記事「はじめてのカミュ」のなかで本学研究院教授三野博司がフランス人作家アルベール・カミュの作品についてコメントした。	朝日
2013/6/14	『こころの一冊』として本学研究院吉田孝夫准教授が訳したオフリード・プロイスラー作『わたしの山の精霊ものがたり』が紹介された。	日経
2013/6/9	大学の面白い研究や学びを紹介するページにおいて本学が紹介され、「マイレクチャー」のコーナーに文学部人文社会科学文化メディア学コース 内田忠賢教授の取材実習講義が、「うちの自慢」のコーナーに記念館と百年ピアノが取り上げられた。	読売
2013/6/4	鹿による食害や外来種による荒廃が進む春日山原始林の現状と課題をまとめた本「世界遺産 春日山原始林-照葉樹林とシカをめぐる生態と文化-」(ナカニシヤ出版、本学 高田将志教授らが執筆)が刊行された。	読売
2013/5/30	本学タンパク質考古学創成事業本部は、奈良県桜井市の「纏向遺跡」で見つかった3世紀の布製品に含まれるたんぱく質の成分を分析したところ、国産の絹で作られていた可能性が高いとの結果を発表した。邪馬台国が国産の絹製品を贈ったという記述があり、関連が注目される。	NHK
2013/5/1	山の集落で、高齢者を支える「らくらく農法」を開発中	現代農業5月号
2013/1/23	かもがわ出版から発刊された文学部「くまほろば」叢書の第2巻、「現場の心理学」が紹介された。	毎日
2012/12/1	「産官学で情報を持ち寄り高齢者の営農を支える」	JANU 27(ジャーナル)国立大学協会情報誌
2012/10/11	特集記事「大和ひと点描」に本学研究院准教授 寺岡伸悟が取り上げられた。	産経
2012/9/11	10月6日に実施される「鹿の角きり」見学会で、本学研究院 武藤康弘教授が角きりについて解説する。	読売
2012/9/5	「農業戦力を考える～高齢者農業の可能性～Ⅳ」に寺岡伸悟教授のらくらく農法が紹介された。	週刊農林 第2160号
2012/8/5	「農業戦力を考える～高齢者農業の可能性～Ⅱ」に寺岡伸悟教授のらくらく農法が紹介された。	週刊農林 第2158号
2012/7/25	「農業戦力を考える～高齢者農業の可能性～」に寺岡伸悟教授のらくらく農法が紹介された。	週刊農林 第2157号
2012/6/22	奈良市の平城宮跡の正門・朱雀門前で新たに建物の遺構が見つかった件で、本学研究院教授の館野和己がコメント。	読売、奈良
2012/6/14	奈良県下市町栃原地区において本学と奈良県農業総合センターなどの研究チームが取り組む、生涯現役で農業を営める仕組み作りを特集した記事。本学研究院准教授の寺岡伸悟、同教授の藤原素子のコメントも掲載。	日本農業
2012/5/31	6月10日14時 本学教員武藤康弘を講師として公開講演会「歴史の視座から見た大和の農耕儀礼」が芝芝藤山1丁目ふたかみ文化センター会議室で開催される。	奈良
2012/5/8	本学名誉教授 浜田寿美男氏が会長を務める御所市立保育所・幼稚園統廃合審議会が御所市長に幼保統合を答申した。	毎日
2012/4/24	本学は京都府木津川市の蟹満寺にまつわる縁起を描いた絵巻物「蟹満寺縁起絵巻」をデジタル撮影し、本学付属図書館のホームページで公開する。	奈良 読売

2012/3/27	本学と奈良文化財研究所は、平城京跡出土の墨から検出した膠に、牛が使用されている可能性が高いと発表した。	毎日
2012/3/10	本学及び奈良文化財研究所は、平城京跡で出土した墨の原料の膠から、牛皮に含まれるコラーゲンを検出したと発表した。	読売
2012/3/4	3月3日に本学において、文学部なら学プロジェクト主催のなら学談話会「水害と復興」が開催された。	奈良
2012/3/2	本学と奈良文化財研究所は、平城京跡出土の墨から膠のコラーゲンを検出したと発表した。	朝日、産経、日経、奈良
2012/3/1	本学と奈良文化財研究所は、平城京跡出土の墨から膠のコラーゲンを検出したと発表した。	NHK奈良
2012/2/25	3月10日に本学において、文学部教員有志の主催により、シンポジウム「柔道死と武道必修化を考える」が開催される。	産経
2012/2/24	下市ケーブルテレビ「ワイドしもいち」でらくらく農法を紹介	下市ケーブルテレビ
2012/2/18	本学文学部准教授寺岡伸吾が中心となった、高齢者の営農を支えるプロジェクト「らくらく農法」について、プロジェクトの概要の紹介と、科学技術振興機構社会技術研究開発センターの専門家の現地視察及び地域住民との意見交換について報道された。	奈良
2012/1/22	1月21日に奈良市内において、本学社会連携センターが「らくらく農法」開発のキックオフシンポジウムを開催した。	日本農業
2012/1/5	本学文学部准教授の寺岡伸悟らが推進する、らくらく農法プロジェクトを特集した記事が掲載された。	奈良
2011/12/2	本学や農業者総合センターなどが共同して取り組む「らくらく農法」の開発が取り上げられた。	日本農業
2011/11/1	本学文学部准教授の寺岡伸悟が、地域の特産品や文化を通じた情報発信について、実例を挙げて紹介している。	産経
2011/10/29	本学文学部准教授の寺岡伸悟が、日本経済活性化に向けた施策についてインタビューされた記事が掲載された。	奈良
2011/10/27	奈良県立橿原考古学研究所は26日、平城京の羅城門跡近くで、土を固めて作った「築地塀」とみられる羅城(城壁)跡を発見したと発表した。これに関する、本学文学部教授の館野和己の話が掲載された。	毎日
2011/8/19	夕方の報道番組「スーパーニュースアンカー」において、特集「セミの鳴き声」に関し、万葉集にもセミの鳴き声を詠んだ歌が出てくることに絡み、本学文学部准教授の奥村和美が解説。	関西テレビ
2011/8/10	8月21日～23日に、本学古代学術研究センター若手研究者支援プログラム「古事記と萬葉集」が開催される。	毎日
2011/8/1	本学記念館で開催中の特別展「沖繩の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめて」の内容紹介	NHKラジオ大阪
2011/8/1	本学記念館で開催中の特別展「沖繩の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめて」について文学部野村鮎子教授が解説	奈良新聞
2011/7/21	NHK奈良ローカルニュース(18時/21時)本学記念館で開催中の特別展「沖繩の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめて」を文学部野村鮎子教授が紹介	NHK奈良放送局
2011/7/7	7月10日に奈良市内の近畿大学農学部において里山観察会と里山学連続講座が開催され、本学教授の相馬秀廣が「自然地理からみた近大奈良キャンパスの里山環境ー天・地・人とのかわり」と題した講演を行う。	奈良
2011/7/4	8月6日に田原本町観光協会主催「第3回歴史講座」が町民ホールで開催され、本学文学部准教授の武藤康弘が講演予定。	奈良
2011/6/15	本学文学部が実施した、社会学や歴史学など授業に震災に関する内容をテーマとして取り上げた「東日本大震災ウィーク」において、福島県へ支援物資を届けるとともに住民と対話を重ねた男性が講義した	毎日
2011/6/8	本学文学部では6月10日まで「東日本大震災ウィーク」として「授業の中で震災を考える」をテーマに講義やゼミを開いている。一部科目は一般公開を行っている。	毎日
2011/6/7	6月6日、東日本大震災に関して様々な分野の授業を行い、一部学外の一般の方にも公開する「東日本大震災ウィーク」が本学文学部において始まった。	産経
2011/5/30	本学アジア・ジェンダー文化研究センター長野村鮎子教授および文学部の吉田容子准教授が沖縄県役所を訪れ、本学記念館で開催する特別展「沖繩の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめて」への協力を依頼した。	琉球新報
2011/5/18	本学アジア・ジェンダー文化研究センター長野村鮎子教授および文学部の吉田容子准教授が沖縄県役所を訪れ、本学記念館で開催する特別展「沖繩の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめて」への協力を依頼した。	沖縄タイムス
2011/5/8	本学文学部准教授の武藤康弘が、祭りの映像DVDを付けた著作「映像で見る奈良まつり歳時記」を刊行した。	奈良
2011/4/28	本学文学部准教授の武藤康弘が、「映像で見る 奈良まつり歳時記」を刊行した。	産経
2011/4/23	キトラ古墳に関する特別展が奈良文化財研究所飛鳥資料館で開催されていることに関して、5月14日に本学文学部教授の相馬秀廣が同館において講演を行う。	朝日
2011/4/17	本学文学部教授である小路田泰直の著書『邪馬台国と「鉄の道」』が紹介された。	朝日
2011/3/25	県内の寺社などに伝わる祭りの映像をまとめたDVD付きの本「映像で見る 奈良まつり歳時記」を本学文学部 武藤康弘准教授が出版した。	奈良
2011/3/23	県内の寺社などに伝わる祭りの映像をまとめたDVD付きの本「映像で見る 奈良まつり歳時記」を本学文学部 武藤康弘准教授が出版した。	毎日
2011/3/10	東大寺二月堂でのお水取りについて、本学文学部 武藤康弘准教授がコメントした。	奈良
2011/3/10	『嵯峨本』の美しさを解明すべく、近代所蔵の「伊勢物語」の文字をすべて解析した本学文学部 鈴木広光教授の研究が紹介された。	日経
2011/2/11	牽牛子塚古墳から出土したひつぎに絹が使用されていることを本学理学部 中澤隆教授らの研究チームが初めて確認した。本学大学院 人間文化研究科 宮路淳子准教授もコメントを発表している。	NHK、ならナビ
2011/1/12	よみうり文化センターの特別公開講座「お水取りの世界」において、本学文学部 武藤康弘准教授が講師を務める。	読売
2011/1/1	奈良県の魅力を考えて記事の中で、本学文学部 寺岡伸悟准教授がコメントした。	朝日
2010/12/20	なら10minutes・Exerciseを紹介した記事の中で、開発に携わった本学文学部教授 成瀬九美がコメントした。	朝日
2010/12/7	木簡をテーマにした科学絵本「奈良の都の木簡～古代からのタイムカプセル」を本学に事務局を置く「まほろば・けいはんな科学ネットワーク」が作成した。本学文学部教授 館野和己が文章を担当した。	毎日
2010/11/23	木簡をテーマにした科学絵本「奈良の都の木簡～古代からのタイムカプセル」を本学に事務局を置く「まほろば・けいはんな科学ネットワーク」が作成した。本学文学部教授 館野和己が文章を担当した。	産経
2010/11/2	11月5日に開催される県医師会看護専門学校の公開講座において、本学名誉教授 坂本信幸氏が「万葉集の魅力」と題して講演を行う。	奈良
2010/10/28	「たかむくのまちづくり協議会」(福井県坂井市丸岡町)が荘園の縁で西大寺(奈良市)に米を奉納した件で、本学教授 館野和己が取り上げられた。	毎日
2010/9/23	けいはんな市民雑学大学第29回講座(9月25日開講)において、本学文学部教授 高田将志が講師を務める。	奈良
2010/9/15	7月10日、第7回奈良県宗教者フォーラム・公開講座「奈良の祭と法会に学ぶ」が奈良県新公会堂で開催され、第2部パネルディスカッションでは本学文学部 武藤康弘准教授がコーディネーターを務めた。	奈良
2010/9/15	朝日カルチャーセンターで開講される公開講座「平城遷都を考える」において、本学名誉教授 佐藤宗諱氏をはじめ歴史学者6名が平城遷都について検証する。	朝日
2010/8/20	8月29日、本学古代学術研究センターは、「萬葉集原本への道」と題した公開講演会を本学で開催する。	読売
2010/7/7	「木簡学会」が設立30周年を記念して出版した概説書「木簡から古代がみえる」には、木簡に関する本学教授 館野和己の指摘が掲載されている。	読売
2010/7/4	3日、文化財保存全国協議会が開催した講演会「平城京研究の現状と展望」において本学教授 館野和己が講演した。	奈良
2010/6/25	7月3日、文化財保存全国協議会が開催する講演会「平城京研究の現状と展望」において、本学教授館野和己が講演予定。	読売
2010/6/25	7月3日、県文化会館(奈良市)にて開催される講演会「平城京研究の現状と展望」において、本学教授館野和己が講演予定。	朝日(夕)
2010/6/9	朝日カルチャーセンターで開催される公開講座「平城遷都を考える」において、本学名誉教授 佐藤宗諱氏が講師を務める。	朝日
2010/5/13	16日、NPO平城京跡サポートネットワークが開催する第11回歴史文化講座において、本学文学部教授 館野和己が講演を行う。	奈良
2010/5/13	7月19日～8月23日に開催される志賀直哉旧居夏期公開講座において、本学文学部教授 弦巻克次が講師を務める。	奈良
2010/5/10	5月16日、平城宮跡資料館講堂(佐紀町)にて開催される平城宮跡歴史文化講座において本学文学部教授 館野和己が講演を行う。	ならしみんだより
2010/5/3	16日、NPO平城京跡サポートネットワークが開催する「平城宮跡歴史文化講座」において本学文学部教授 館野和己が「古代都城の実態を探る～古文書を中心として～」をテーマに講演する。	奈良日日

(別添資料Ⅱ-I-17:平成27年度科学研究費「細目別過去5年の新規採択の累計数の上位10機関」)

2904 (旧)各国文学・文学論						
順位	機関種別名	機関名	新規採択 累計数	うち女性	累計 配分額	応募件数 累計数
1	国立大学	大阪大学	7.0	4.0	8,000	18.0
2	国立大学	京都大学	5.0	4.0	6,100	6.0
3	国立大学	東北大学	4.0	1.0	4,800	6.0
3	国立大学	東京大学	4.0	1.0	16,600	8.0
3	国立大学	名古屋大学	4.0	1.0	4,300	5.0
3	国立大学	広島大学	4.0	1.0	8,300	5.0
3	国立大学	九州大学	4.0	0.0	3,500	10.0
8	私立大学	慶應義塾大学	3.0	1.0	5,200	4.0
8	私立大学	立命館大学	3.0	0.0	3,600	7.0
10	国立大学	東京外国語大学	2.0	1.0	2,300	5.0
10	国立大学	新潟大学	2.0	1.0	2,500	5.0
10	国立大学	金沢大学	2.0	1.0	1,500	5.0
10	国立大学	神戸大学	2.0	0.0	2,100	3.0
10	国立大学	奈良女子大学	2.0	1.0	2,300	2.0
10	国立大学	山口大学	2.0	0.0	1,500	6.0
10	国立大学	愛媛大学	2.0	0.0	1,800	3.0
10	公立大学	首都大学東京	2.0	0.0	2,900	3.0
10	公立大学	名古屋市立大学	2.0	1.0	5,400	3.0
10	私立大学	大東文化大学	2.0	1.0	2,100	4.0
10	私立大学	早稲田大学	2.0	0.0	6,900	7.0
10	私立大学	関西外国語大学	2.0	0.0	4,500	3.0
10	私立大学	近畿大学	2.0	0.0	1,100	2.0

3101 日本文学						
順位	機関種別名	機関名	新規採択 累計数	うち女性	累計 配分額	応募件数 累計数
1	私立大学	早稲田大学	28.0	5.0	36,400	55.5
2	大学共同利用機関法人	国文学研究資料館	24.0	8.0	43,000	36.0
3	私立大学	立命館大学	13.0	5.0	13,350	23.5
4	国立大学	東京大学	10.5	2.5	10,450	16.0
5	国立大学	名古屋大学	10.0	3.0	39,800	21.0
5	国立大学	大阪大学	10.0	1.0	13,000	25.5
5	私立大学	日本大学	10.0	6.0	10,200	21.0
8	私立大学	明治大学	9.0	1.0	10,800	20.5
9	国立大学	信州大学	8.5	1.0	12,750	9.5
10	国立大学	千葉大学	8.0	3.0	8,600	24.0
10	国立大学	金沢大学	8.0	2.0	5,100	22.0
10	国立大学	奈良女子大学	8.0	5.0	7,300	15.0
10	国立大学	広島大学	8.0	3.0	11,900	12.0

3104 中国文学						
順位	機関種別名	機関名	新規採択 累計数	うち女性	累計 配分額	応募件数 累計数
1	国立大学	九州大学	6.0	1.0	7,500	17.5
2	国立大学	北海道大学	5.5	1.5	8,250	6.5
2	私立大学	早稲田大学	5.5	1.0	4,950	12.5
4	国立大学	東京大学	3.0	0.0	4,300	4.0
4	国立大学	信州大学	3.0	2.0	2,400	5.0
4	国立大学	京都大学	3.0	0.0	12,300	5.0
4	国立大学	奈良女子大学	3.0	3.0	2,900	6.0
4	国立大学	広島大学	3.0	0.0	1,200	7.0
4	私立大学	関西学院大学	3.0	1.0	3,800	3.0
10	私立大学	関西大学	2.5	0.5	3,400	5.5

3203 英語学						
順位	機関種別名	機関名	新規採択 累計数	うち女性	累計 配分額	応募件数 累計数
1	国立大学	東北大学	9.0	0.0	7,000	14.0
1	国立大学	大阪大学	9.0	4.0	10,700	10.0
3	国立大学	三重大学	7.0	2.0	4,900	15.0
4	国立大学	名古屋大学	6.0	0.0	7,100	8.0
4	私立大学	専修大学	6.0	0.0	6,300	8.0
4	私立大学	関西外国語大学	6.0	1.0	5,000	16.0
7	国立大学	北海道教育大学	5.0	0.0	3,500	11.0
7	国立大学	新潟大学	5.0	0.0	4,400	11.0
7	国立大学	金沢大学	5.0	2.0	3,000	5.0
10	国立大学	北海道大学	4.0	0.0	4,000	6.0
10	国立大学	筑波大学	4.0	0.0	4,400	6.0
10	国立大学	大阪教育大学	4.0	3.0	5,500	7.0
10	国立大学	奈良女子大学	4.0	2.0	3,400	4.0
10	国立大学	九州大学	4.0	0.0	4,300	10.0
10	私立大学	福岡大学	4.0	1.0	2,000	5.0

3401 人文地理学						
順位	機関種別名	機関名	新規採択 累計数	うち女性	累計 配分額	応募件数 累計数
1	国立大学	筑波大学	13.0	1.0	38,100	33.0
2	国立大学	京都大学	11.5	1.0	21,900	22.5
3	国立大学	九州大学	11.0	0.0	18,500	22.0
4	国立大学	奈良女子大学	10.0	5.0	17,000	21.0
5	私立大学	立命館大学	9.5	0.0	14,600	22.5
6	公立大学	大阪市立大学	9.0	0.0	15,900	19.5
7	国立大学	東京大学	8.0	2.0	10,500	18.5
7	国立大学	名古屋大学	8.0	0.0	25,700	11.0
7	国立大学	広島大学	8.0	0.0	30,000	18.0
10	国立大学	金沢大学	6.0	0.0	11,800	9.5
10	公立大学	首都大学東京	6.0	0.0	16,500	11.5

(別添資料Ⅱ-I-21:文学部研究交流集会開催状況)

実施年度	実施日	講師	所属	区分	テーマ
平成22年度	平成22年6月23日	渡辺和行教授	人文社会学科	研究	近代フランスの歴史学と歴史家
	平成22年12月1日	麻生武教授	人間科学科	研究	「イタイ」ということばは何を意味しているのか?—他者の心を理解する自己とは何か
	平成23年3月7日	中島道男教授	人文社会学科	研究	「公共性」論の位置—デュルケム・パウマン・アレント
平成23年度	平成23年5月25日	千本英史教授	言語文化学科	研究	日本の古典偽書について
	平成23年9月28日	西村雄一郎准教授	人文社会学科	研究	GPSと日常生活の地理学
	平成23年11月30日	西村さとみ助教	人文社会学科	研究	国風文化再考—和歌のことばとことば
	平成24年3月20日	西村拓生教授	人間科学科	教育	教育システム研究開発センターの高等教育研究プロジェクトについて
平成24年度	平成24年5月23日	野村鮎子教授	言語文化学科	教育	女性エンパワメントと文学部共通科目「学ぶことと女性のライフスタイル」
	平成24年9月5日	中川千帆准教授	言語文化学科	研究	「トワイライト」サーガにみる少女たちのセクシュアリティ
	平成24年11月28日	成瀬九美教授	人間科学科	研究	相互交流場面にみられる身体的同調過程への興味
	平成25年2月6日	高岡尚子准教授	言語文化学科	研究・教育	『恋をする。とはどういうことか—ジェンダーから考えることばと文学』ができるまで
平成25年度	平成25年3月19日	小川伸彦教授	人文社会学科	研究	〈遺産化現象の社会学〉への試み
	平成25年6月19日	鈴木広光教授	言語文化学科	研究	多言語蒐集への情熱と活字製作—「主の祈り」の博言集はなぜ、どのように編まれたのか?
	平成25年9月25日	河上麻由子准教授	人文社会学科	研究	古代アジアの仏教と王権と対外交渉—日本と中国を中心に—
平成26年度	平成25年11月27日	石坂友司准教授	人間科学科	研究	オリンピックの遺産の社会学—長野オリンピックとその後の10年—
	平成26年7月23日	浅田晴久講師	人文社会学科	研究	インド北東部、プラマフトラ川渓谷の自然環境と地域社会
	平成26年9月24日	鈴木康史准教授	人間科学科	研究	福島中佐のシベリア横断の研究 ~近代日本の冒険・探検の社会史の試み~
平成27年度	平成27年2月4日	須賀あゆみ准教授	言語文化学科	研究	言葉探しと認識探索—相互行為における指示の一面—
	平成27年7月22日	功刀俊雄教授	人間科学科	研究	GHQ (GIE) の検定教科書検閲・保健(中学・高校)の場合
	平成27年12月16日	田中希生助教	人文社会学科	研究	歴史と法の外部について
	平成28年2月3日	吉川仁子講師	言語文化学科	研究	夏目漱石の後期作品について

研 究

理 学 部

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅱ－Ⅰ－3：理学部教員が主導的役割を果たした国際・国内会議や学会一覧	P 1
別添資料Ⅱ－Ⅰ－4：理学部教員の特許出願・取得件数に関する一覧	P 2
別添資料Ⅱ－Ⅰ－6：理学部における科学研究費の研究種目別獲得状況	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－7：理学部における委託研究・受託研究・共同研究・寄付金の獲得状況	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－8：理学部における科学研究費の研究種目別採択課題一覧	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－9：理学部における委託研究・受託研究・共同研究・寄付金の採択課題 一覧	P 6

別添資料Ⅱ-I-3: 理学部教員が主導的役割を果たした国際・国内会議や学会一覧

【平成22年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
林田 佐智子	教授	国際	ASSFTS	国内	5月
山下 靖	教授	国際	Geometry, Topology and Dynamics of Character Varieties	国外	6月30日
寺尾 治彦	教授	国際	Summer Institute 2010	国内	8月
村松 加奈子	准教授	国際	ISPRS Technical Commission VIII Symposium	国内	8月
高橋 智彦	准教授	国際	String Field Theory and Related Aspects	国内	10月
松澤 淳一	教授	国際	9th Oka Symposium	国内	12月
久慈 誠	准教授	国内	極域の雲の衛星観測に関する研究集会	国内	1月12日
松澤 淳一	教授	国際	Ueda Memorial Conference on Automorphic Forms	国内	1月

【平成23年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
竹内 孝江	准教授	国際	11th International Symposium on Atomic Level Characterization for New Materials	国外	5月22日
市原 由美子	准教授	国内	第4回数論女性の集まり	国内	5月28日
佐藤 宏明	准教授	国際	Biodiversity of Kakamega Tropical Forest: Conservation and Sustainable Use	国外	6月4日
久慈 誠	准教授	国内	雲識別ワークショップ	国内	8月25日
寺尾 治彦	教授	国際	Summer Institute 2011	国内	8月
松岡 由貴	准教授	国際	ICANS 24	国内	8月
吉川 尚男	准教授	国際	17th Japanese-German Cooperative Symposium on Protozoan Diseases and Workshop of Gastrointestinal Protozoan Diseases	国内	9月
森藤 紳哉	教授	国際	Harmonic Analysis and its Applications at Nara 2011	国内	11月
浦 康之	准教授	国際	Catalysis & Fine Chemicals 2011	国内	12月4日
中島 隆行	准教授	国際	International Symposium on Catalysis and Fine Chemicals (C&FC2011)	国内	12月4日
松澤 淳一	教授	国際	10th Oka Sympojium	国内	12月
市原 由美子	准教授	国内	第5回ゼータ若手研究集会	国内	2月10日
戸田 幹人	准教授	国際	International Workshop on Anomalous Statistics, Generalized Entropies, and Infor	国内	3月

【平成24年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
山下 靖	教授	国際	Low-dimensional geometry and topology	国内	9月11日
竹内 孝江	准教授	国際	19th International Mass Spectrometry Conference	国内	9月15日
林井 久樹	教授	国際	Tau Lepton Physics Workshop Tau2012	国外	9月17日
岩井 薫	教授	国際	12th Japan-Belgium Symposium on Polymer Science	国外	9月
松岡 由貴	准教授	国際	17th International Conference on Molecular Beam Epitaxy	国内	9月
和田 恵次	教授	国内	日本動物行動学会第31回大会	国内	11月23日
渡邊 利雄	教授	国内	第35回日本分子生物学会年会 ワークショップ	国内	12月
松澤 淳一	教授	国際	11th Oka Sympojium	国内	12月
柳沢 卓	教授	国際	International Conference on the Mathematical Fluid Dynamics	国内	3月5日
柳沢 卓	教授	国際	Seminar on Nonlinear PDE in Nara	国内	3月11日
太田 直美	准教授	国際	The mass profiles of galaxy clusters from the core to the outskirts: the need for a multi-wavelength approach	国外	3月18日

【平成25年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
戸田 幹人	准教授	国際	Geometry of Chemical Reaction Dynamics in Gas and Condensed Phases	国外	6月
比連崎 悟	教授	国内	KEK(東海)研究会:原子核媒質中のハドロン研究=魅力と課題=	国内	8月5日
山下 靖	教授	国際	Nara Conference On various structures associated with representations of fundamental groups of low-dimensional manifolds	国内	10月29日
比連崎 悟	教授	国際	YITP international workshop on Hadron in Nucleus	国内	10月31日
永廣 秀子	准教授	国際	International conference on Hadron Spectroscopy "hadron2013"	国内	11月4日
宮林 謙吉	准教授	国際	Hadron2013	国内	11月
和田 恵次	教授	国内	共生科学研究センターシンポジウム/紀伊半島研究会シンポジウム	国内	12月14日
渡邊 利雄	教授	国内	第36回日本分子生物学会年会 ワークショップ	国内	12月
松澤 淳一	教授	国際	12th Oka Sympojium	国内	12月
太田 直美	准教授	国際	Suzaku-MAXI 2014: Expanding the Frontiers of the X-ray Universe	国内	2月19日
村井 紘子	助教	国際	Workshop-Variou Aspects of Classical Links-	国内	3月21日

【平成26年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
遊佐 陽一	教授	国際	International Symposium on Barnacle Biology	国内	6月9日
柳沢 卓	教授	国際	The 9th East Asia Partial Differential Equations Conference	国内	7月28日
林田 佐智子	教授	国際	AOGS 2014 (セッションAS-47主催)	国内	7月28日
比連崎 悟	教授	国内	KEK(東海)研究会:原子核媒質中のハドロン研究 II	国内	10月24日
山下 靖	教授	国際	Topology and Geometry of Low-dimensional Manifolds	国内	10月27日
戸田 幹人	准教授	国際	Japan-Slovenia Seminar on Nonlinear Science (Kansai 2014)	国内	10月28日
遊佐 陽一	教授	国際	International Symposium on Recent Advances in Invasion Biology	国内	11月8日
松澤 淳一	教授	国内	表現論シンポジウム	国内	11月
松岡 由貴	准教授	国際	APES-IES-SEST2014	国内	11月
松澤 淳一	教授	国際	13th Oka Sympojium	国内	12月

【平成27年度】

氏名	職名	学会の別	会議名	開催場所	開催月日
永廣 秀子	准教授	国際	The 10th International Workshop on the Physics of Excited Nucleons (NSTAR2015)	国内	5月25日
吉川 尚男	准教授	国際	1st International Blastocystis Symposium	国外	5月28日
林田 佐智子	教授	国際	The 2nd workshop of Atmospheric Composition and the Asian Monsoon (ACAM)	国外	6月08日
野口 克行	助教	国際	Radio Science Symposium on Earth and Planetary Atmospheres	国内	6月01日
太田 直美	准教授	国際	The 6th ASTRO-H Summer School	国内	8月27日
遊佐 陽一	教授	国際	International workshop on rhizocephalans	国内	8月
下村 真弥	助教	国際	Quark Matter 2015	国内	9月27日
山下 靖	教授	国際	Topology and Geometry of Low-dimensional manifolds	国内	10月27日
比連崎 悟	教授	国内	KEK(東海)研究会:原子核媒質中のハドロン研究 III	国内	10月17日
吉川 尚男	准教授	国内	第71回日本寄生虫学会西日本支部大会	国内	10月24日
遊佐 陽一	教授	国際	International symposium on barnacles (Cirripedia)	国内	10月
岩井 薫	教授	国際	13th Japan-Belgium Symposium on Polymer Science	国内	11月
松澤 淳一	教授	国際	14th Oka symposium	国内	12月05日
藤井 浩	教授	国際	Pacificchem2015	国外	12月19日
藤井 浩	教授	国際	Pacificchem2015	国外	12月18日
柳沢 卓	教授	国際	Free Boundary Problems in Fluid and Plasma Dynamics	国内	2月03日
高須 夫悟	教授	国際	NWU International Symposium on Environmental Sciences	国内	2月03日
松澤 淳一	教授	国際	The 4th Workshop "Complex Geometry and Lie Groups"	国内	3月22日
岡崎 武生	准教授	国内	代数学若手研究集会	国内	3月28日
松岡 由貴	准教授	国際	17th International Conference on Physics of Light-Matter Coupling in Nanostructure	国内	3月28日

別添資料Ⅱ-I-4: 理学部教員の特許出願・取得件数に関する一覧

発明者氏名	発明届提出日	発明又は考案の名称	出願番号	公開番号	特許等登録番号
中澤 隆	H17.7.28	タンパク質又はペプチドのC末端修飾法, C末端固定化法, 及び解析法	特願2005-307831 H17.10.21 (当初出願)	WO2007-046559	特許第4627086号 H22.11.19
			特願2007-541081 H20.4.17 (日本国内移行)		
竹内 孝江	H17.12.14	質量分析を用いたペプチド同定方法及び同定装置	特願2006-004553	特開2007-187501	特許第4855780号 H23.11.4
			H18.1.12	H19.7.26	
竹内 孝江	H18.8.8	質量分析を用いたペプチド同定方法	特願2006-314922	特開2008-128849	特許第4881701号 H23.12.9
			H18.11.22	H20.6.5	
岩井 薫	H19.8.17	水棲生物が付着しない防汚被膜、防汚被膜を得るための手段およびその使用(防汚塗料用樹脂)	PCT/JP2008/052878	WO2009-104257	特許第5569677号 H26.7.24
			H20.2.20		
			特願2009-554163		
岩口 伸一 鈴木 孝仁	H20.12.16	ナラノヤエザクラの花から分離した酵母及びその取得方法並びにこの酵母を用いた清酒の製造方法その他の飲食物の製造方法	特願2009-004951	特開2010-161947	特許第4601015号 H22.10.8
			H21.1.13	2010/7/29	
竹内 孝江	H24.9.10	多変量解析モデル化判定関数の判定値のROC解析による特定カビ種検出方法	特願2012-238876	特開2014-87282	
			H24.10.30	H26.5.15	
竹内 孝江	H24.9.10	IMSドリフトタイム予測装置、IMSドリフトタイム予測方法およびプログラム	特願2012-254179	特開2014-102149	
			H24.11.20	H26.6.5	
三方 裕司	H24.10.4	金属イオン特異的蛍光センサー(金属イオン蛍光プローブ)	特願2013-004402	特開2014-136675	
			H25.1.15	H26.7.28	
岩井 薫	H24.12.21	水または海水との摩擦抵抗の小さい防汚塗膜(防汚塗料用樹脂)	特願2013-050365	WO 2014-142035	
			H25.3.13		
岩口 伸一	H25.3.22	ナラノヤエザクラの花から分離した酵母を種とする新規赤色色素生成酵母およびそれを用いる醸造酒の製造方法	特願2013-101657	特開2014-212782	
			H25.4.23	H26.11.17	
吉村 倫一	H25.11.15	ジェミニ界面活性剤	特願2014-47268	特開2015-168680	
			H26.3.11	H27.9.28	
飯田 雅康	H26.7.4	酸性ガス化学吸収液及び酸性ガス分離回収方法	特願2014-133360	特開2016-010760	
			H26.6.27	H28.1.21	

別添資料Ⅱ-I-6：理学部における科学研究費の研究種目別獲得状況

項目	性別	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		計	
		件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額
新学術領域研究 (領域・公募)	男	1	2,300,000	3	8,500,000	4	12,000,000	2	6,900,000	0	0	0	0	10	29,700,000
	女	1	1,200,000	1	1,100,000	1	1,400,000	1	1,300,000	0	0	0	0	4	5,000,000
挑戦的萌芽研究	男	3	3,200,000	4	5,100,000	6	5,100,000	6	5,300,000	5	5,100,000	3	3,400,000	27	27,200,000
	女	0	0	0	0	1	1,100,000	1	500,000	1	500,000	1	2,200,000	4	4,300,000
特別研究員奨励費	男	0	0	0	0	1	1,200,000	1	1,200,000	1	2,400,000	1	1,200,000	4	4,800,000
	女	1	700,000	0	0	0	0	1	1,200,000	2	1,800,000	0	0	4	3,700,000
基礎研究(B)(一般)	男	2	6,200,000	1	5,800,000	2	9,600,000	2	5,700,000	4	18,700,000	4	12,900,000	15	58,900,000
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基礎研究(C)(一般)	男	19	18,000,000	18	21,305,181	23	27,400,000	25	26,200,000	24	25,400,000	20	20,400,000	129	138,705,181
	女	4	4,900,000	4	3,200,000	3	4,400,000	5	7,500,000	7	7,900,000	7	7,700,000	30	35,600,000
若手研究(B)	男	3	1,900,000	4	5,700,000	5	6,500,000	5	4,700,000	2	3,800,000	2	1,900,000	21	24,500,000
	女	3	2,400,000	5	5,200,000	4	3,900,000	4	5,200,000	3	3,300,000	3	2,600,000	22	22,800,000
研究活動スタート支援	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1,100,000	1	1,000,000	2	2,100,000
計	男	28	31,600,000	30	46,405,181	41	61,800,000	41	50,000,000	36	54,200,000	30	39,800,000	206	283,805,181
	女	9	9,200,000	10	9,500,000	9	10,800,000	13	16,800,000	14	14,500,000	11	12,500,000	66	73,300,000

別添資料Ⅱ-I-7：理学部における委託研究・受託研究・共同研究・寄付金・寄付金の獲得状況

項目	性別	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		計	
		件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額	件数	獲得資金額
委託研究	男	6	52,319,996	3	11,595,978	1	776,730	2	3,005,155	1	997,396	1	999,999	14	69,695,254
	女	1	17,500,000	4	51,296,382	3	50,278,836	3	48,800,503	3	50,231,372	3	48,058,171	17	266,165,264
受託研究	男	1	800,000	1	300,000	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1,100,000
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
共同研究	男	2	3,150,000	1	286,000	1	420,000	3	1,874,500	3	2,329,000	7	6,449,000	17	14,508,500
	女	2	1,090,000	0	0	3	5,818,182	3	8,279,692	2	7,193,000	2	6,788,161	12	29,169,035
寄付金	男	4	4,600,000	10	3,500,000	8	5,187,021	8	9,810,000	7	6,078,529	6	6,500,000	43	35,675,550
	女	1	1,945,000	1	1,510,000	0	0	0	0	2	1,200,000	2	1,070,000	6	5,725,000
計	男	13	60,869,996	15	15,681,978	10	6,383,751	13	14,689,655	11	9,404,925	14	13,948,999	76	120,979,304
	女	4	20,535,000	5	52,806,382	6	56,097,018	6	57,080,195	7	58,624,372	7	55,916,332	35	301,059,299

研 究

生 活 環 境 学 部

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅱ-I-16：科学研究費研究テーマと獲得資金	P 1
別添資料Ⅱ-I-17：外部資金の獲得状況	P 3
別添資料Ⅱ-I-18：教員の受賞歴	P 6

別添資料Ⅱ-I-16：科学研究費研究テーマと獲得資金

研究代表者氏名	学科・講座・コース	職	性別	種目	H22	H23	H24	H25	H26	H27(直接)	課題名
松田 寛	生活健康・生活健康	教授	男性	基礎研究(A)(一般)			20,700,000	7,200,000	3,600,000	2,600,000	DNA修復分子群のエピジェネティクス解析と食健康
才藤 直樹	生活健康・衣環境	准教授	男性	基礎研究(A)(一般)	6,900,000	5,200,000					タンブル・アンドロイドのための人工触覚コミュニケーションシステムの開発
後藤 景子	生活健康・衣環境	教授	女性	基礎研究(A)(一般)		11,200,000	6,800,000	3,100,000			節水を基軸とした環境対応型洗浄システムの提案
鈴木 則子	生活文化	准教授	女性	基礎研究(A)(一般)	5,600,000	5,300,000					歴史における周縁と共生―疫病・触覚思想・女人結界・除災儀礼
三成 美保	生活文化	教授	女性	基礎研究(A)(一般)	他機関						ジェンダー視点に立つ「新しい世界史」の構想と「市民教養」としての構築・発信
前田 純夫	食物栄養	准教授	男性	基礎研究(B)(一般)							大腸菌の遺伝子水平伝播の新機構解明と普遍性検証
高地 リベカ	食物栄養	教授	女性	基礎研究(B)(一般)	他機関						新たな食生活評価システムの大規模疫学研究への導入と活用に関する研究
菊崎 泰枝	食物栄養	教授	女性	基礎研究(B)(一般)		5,300,000	1,100,000	800,000			食品の抗酸化力統一指標を用いた野菜の抗酸化力の評価と食事管理への活用に関する研究
井上 裕康	食物栄養	教授	男性	基礎研究(B)(一般)		6,500,000	4,400,000	2,900,000	3,400,000		生活習慣病予防が期待される食品機能成分の新しい評価系と応用
森本 恵子	生活健康・生活健康	教授	女性	基礎研究(B)(一般)	1,900,000						女性の精神ストレス緩和のための機能性食品の研究
久保 博子	生活健康・生活健康	准教授	女性	基礎研究(B)(一般)							体型による寝姿勢と心地が睡眠に及ぼす影響に関する研究
芝崎 学	生活健康・生活健康	准教授	男性	基礎研究(B)(一般)			4,900,000	1,800,000			熱中症予防を目的とした機能的ウェア開発のための生理機能評価
三木 英生	心身健康・臨床心理	教授	男性	基礎研究(B)(一般)			3,200,000	3,200,000			肥満と高血圧をリンクさせる中枢性機構の解明
岡本 美奈子	心身健康・臨床心理	教授	女性	基礎研究(B)(一般)						2,300,000	大規模災害後の犯罪対策に関する実証的研究―犯罪発生との予防と犯罪不安の低減のために
伊藤 美奈子	情報衣環境・衣環境	教授	女性	基礎研究(B)(一般)	12,100,000	1,800,000	1,800,000			1,400,000	高等学校における不登校と「社会で生きていく力」支援プログラムの開発と追跡調査
黒子 弘道	情報衣環境・衣環境	教授	男性	基礎研究(B)(一般)					6,200,000	4,000,000	次世代センシング繊維の創成とウェアラブルセンサへの応用
後藤 景子	生活健康・衣環境	教授	女性	基礎研究(B)(一般)	800,000						大気圧非平衡プラズマを利用したポリエステル繊維製品の殺水化
後藤 景子	情報衣環境・衣環境	教授	女性	基礎研究(B)(一般)			2,700,000	5,100,000	3,600,000	3,500,000	持続可能な衣生活のための繊維製品の防汚設計
井上 容子	住環境	教授	女性	基礎研究(B)(一般)						2,200,000	日中韓の住生活スタイルに基づいた快適性と省エネルギーに配慮した照明計画の検討
榎野 洋志	食物栄養	教授	男性	基礎研究(B)(一般)			1,800,000				塩味増強効果の定量的評価法の開発
中山 徹	住環境	教授	男性	基礎研究(B)(一般)			3,300,000	3,300,000			中国・内モンゴル自治区におけるバイシンの間取りの変容に関する研究
城 和貴	情報衣環境・生活情報	教授	男性	基礎研究(B)(一般)	他機関						近代書籍自動テキストエンゲージメントの導入に関する比較研究と教材の取集及び体系化
三成 美保	生活文化	教授	女性	基礎研究(B)(一般)			5,100,000	4,000,000	4,200,000		歴史教育におけるジェンダー視点の導入に関する比較研究と教材の取集及び体系化
山本 直彦	住環境	准教授	男性	基礎研究(B)(海外学術調査)							ネパールの世界遺産都市における生活空間と都市型住居の保全に向けた基礎的研究
山本 直彦	住環境	准教授	男性	基礎研究(B)(海外学術調査)	1,900,000	1,400,000	1,100,000				スマトラ島沖地震被災地における都市部近郊の大規模再定住地の居住環境に関する研究
松岡 悦子	生活文化	教授	女性	基礎研究(B)(海外学術調査)		4,800,000	3,700,000	2,900,000	1,800,000		アジアにおけるリプロダクシンの歴史の変遷―医療化の要因と女性への影響
松岡 悦子	生活文化	教授	女性	基礎研究(B)(海外学術調査)						4,400,000	南アジア農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究
中田 理恵子	食物栄養	講師	女性	基礎研究(C)(一般)	500,000						生活習慣病予防を目指したホモステイン代謝調節機構の解明
中田 理恵子	食物栄養	講師	女性	基礎研究(C)(一般)		2,500,000	900,000	700,000			葉酸摂取と脂質代謝の関連性に関する基礎研究
中田 理恵子	食物栄養	准教授	女性	基礎研究(C)(一般)						900,000	親世代の葉酸摂取状況が次世代の代謝反応性に及ぼす影響とその分子機構
菊崎 泰枝	食物栄養	教授	女性	基礎研究(C)(一般)						2,300,000	食用植物に含まれるヒスタミン産生抑制成分の探索とアレルギー食中毒防止への応用
小倉 裕範	食物栄養	教授	男性	基礎研究(C)(一般)	他機関	1,700,000	1,500,000	800,000			NLRP3およびNLRQ4のリガンドの探索、同定
小倉 裕範	食物栄養	教授	男性	基礎研究(C)(一般)	他機関					1,900,000	香辛料成分によるIL-1β分泌抑制機構の解析
小城 勝相	食物栄養	教授	男性	基礎研究(C)(一般)	800,000	1,300,000	1,100,000				メタボリックシンドローム予防食品成分の評価法の確立とその応用
塚本 幾代	食物栄養	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	2,100,000	1,000,000	400,000				メタボリックシンドロームの予防と治療のための食事指導
高村 仁知	食物栄養	准教授	男性	基礎研究(C)(一般)	600,000						魚の嗜好性と機能性を高める調理法の開発
高村 仁知	食物栄養	准教授	男性	基礎研究(C)(一般)		2,900,000	600,000	600,000			インドネシア産植物性食料の機能性と嗜好性を活かした食品の開発
森本 恵子	生活健康・生活健康	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	500,000						エストロゲンの酸化ストレス軽減による精神性ストレス時の血圧調節メカニズムの解明
森本 恵子	心身健康・生活健康	教授	女性	基礎研究(C)(一般)						1,100,000	エストロゲンの新機能-脂防酸受容体を介した脂質嗜好性調節による摂食制御-の検討
鷹股 亮	生活健康・生活健康	教授	男性	基礎研究(C)(一般)			2,600,000	700,000	700,000		エストロゲンによる摂食抑制と摂食行動日内リズム調節の関連の機構解明
井上 洋一	心身健康・スポーツ	教授	男性	基礎研究(C)(一般)						600,000	アメリカのスポーツ政策と法的紛争に関する研究
藤原 素子	心身健康・スポーツ	教授	女性	基礎研究(C)(一般)						500,000	左右体格の協応による素早い筋出力調節方略
星野 聡子	心身健康・スポーツ	准教授	女性	基礎研究(C)(一般)						2,000,000	露装ストレスへの「挑戦・脅威」に関する精神生理学的研究
米田 守宏	情報衣環境・衣環境	教授	男性	基礎研究(C)(一般)				2,800,000	500,000		露装用およびインテリア用繊維状充填材料の性能評価
吉田 哲也	情報衣環境・衣環境	教授	男性	基礎研究(C)(一般)						900,000	グラフ構造に基づく情報論的半教師あり学習法の研究
井上 容子	住環境	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	600,000	800,000					時間的・空間的不均一視認性に配慮した明視性評価システムの開発

宮城 俊作	住環境	教授	男性	基礎研究(C)(一般)	700,000	500,000	600,000	1,500,000	700,000	自然環境構造の顕在化をめざすランドスケープ計画・設計モデルの構築
今井 範子	住環境	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	1,100,000	900,000	600,000			生活の場としての児童養護施設・自立援助ホームの空間設計の課題とそのあり方
瀬渡 章子	住環境	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	1,100,000	1,600,000	500,000		1,800,000	登下校時や放課後の子どもを犯罪から守る持続可能な地域防犯活動のあり方に関する研究
瀬渡 章子	住環境	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	1,100,000	1,600,000	500,000			戸建住宅地の配置構成からみたタウンセキュリティのあり方に関する研究
藤平 眞紀子	住環境	准教授	女性	基礎研究(C)(一般)	900,000	700,000	600,000		900,000	伝統的木造住宅の維持管理における自助、共助、公助のあり方
藤平 眞紀子	住環境	講師	女性	基礎研究(C)(一般)	2,900,000	500,000	500,000			伝統的木造住宅における維持管理手法の現代的継承
前川 昌子	生活健康・住環境	教授	女性	基礎研究(C)(一般)	1,300,000	1,100,000	700,000	1,500,000	700,000	人と環境にやさしい衣生活の再生―身近にある素材を活用した色彩環境の構築―
鈴木 則子	生活文化	准教授	女性	基礎研究(C)(一般)	1,300,000	1,100,000	700,000			日本近代コロメロゾー(化粧学)の展開と女性の衛生～美容家藤波芙蓉の事跡を中心に
山崎 明子	生活文化	助教	女性	基礎研究(C)(一般)						近代の視覚空間―教育とジェンダーをめぐる政治学
阿部 教	住環境	准教授	男性	基礎研究(C)(一般)						新しい社会保障教育―高等学校校定教科書のみにみられる社会保障の描かれ方
原田 雅史	住環境	准教授	男性	基礎研究(C)(一般)						マイクログリーンを利用した複合酸化ナノ粒子の結晶成長メカニズムの解明
松田 寛	食物栄養	教授	男性	挑戦的萌芽研究					800,000	食成分によるAKTシグナル伝達系分子の機能調節解析
松田 寛	生活健康・生活健康	教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,500,000	700,000	700,000			食物成分刺激による摂食関連mRNA・miRNAの発現調節解析
前田 純夫	食物栄養	准教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,800,000	600,000	600,000			腸内細菌叢のプロバイオティクス化を目的としたアーージーによる生体内遺伝子導入の試み
前田 純夫	食物栄養	准教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,500,000	1,400,000			2,100,000	細菌細胞の記憶現象の解析・Persistence高発現の記憶現象発見を糸口に
井上 裕康	食物栄養	教授	男性	挑戦的萌芽研究					1,800,000	味覚修飾タンパク質ミラクリンによる味覚受容体に対する影響の検討
井上 裕康	食物栄養	教授	男性	挑戦的萌芽研究						ミラクリン非感受性のヒト遺伝子解析による味覚修飾分子機構の検討
植野 洋志	食物栄養	教授	男性	挑戦的萌芽研究	900,000	2,200,000	900,000			シナ・イソジンの天敵が産生する本能に訴える忌避物質の単離精製法の確立
久保 博子	生活健康・生活健康	准教授	女性	挑戦的萌芽研究	2,100,000	2,100,000	800,000		300,000	喫煙の匂いが睡眠の質に影響を及ぼすか？
久保 博子	心身健康・生活健康	教授	女性	挑戦的萌芽研究					2,200,000	日常生活と日中の活動量に関する実態調査研究
鷹股 亮	心身健康・生活健康	教授	男性	挑戦的萌芽研究	600,000					光環境と摂食行動のリズミカターの制御による閉経後女性の肥満予防法の開発
増井 正哉	住環境	教授	男性	挑戦的萌芽研究						町並み景観における歴史的層性の評価と活用に関する研究
増井 正哉	住環境	教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,000,000	900,000	700,000			歴史的風致における地域活動の景観意匠化に関する研究
中山 徹	住環境	教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,300,000	500,000	500,000			まちづくりの失敗事例を調査分析する方法の確立
後藤 景子	情報住環境・住環境	教授	女性	挑戦的萌芽研究					1,500,000	Wジェット加工による持続可能な繊維染色技術の構築
後藤 景子	生活健康・住環境	教授	女性	挑戦的萌芽研究	1,300,000	800,000	600,000			アパレル水系洗浄プロセスへの大気圧プラズマ処理の導入
佐藤 克成	情報住環境・住環境	講師	男性	挑戦的萌芽研究					1,000,000	布地の過り感知意における温冷算と圧算の番与率の解明
橋本 朋子	情報住環境・住環境	助教	女性	挑戦的萌芽研究					2,000,000	炎症シグナル応答型創傷治癒バイオマテリアルの開発
伊崎 美奈子	生活健康・生活健康	准教授	女性	挑戦的萌芽研究	1,200,000	1,200,000	500,000		900,000	疑似的温冷感による快適性および予防医学的衣料の開発
芝野 春樹	生活健康・臨床心理	教授	女性	挑戦的萌芽研究	400,000					「対話によるのちどころの授業」の開発―いじめ防止と自殺予防をめざして
今岡 春樹	生活健康・住環境	教授	男性	挑戦的萌芽研究						ランダム柄を用いた3次元人体計測装置の開発
今岡 春樹	生活健康・住環境	教授	男性	挑戦的萌芽研究	1,600,000	1,100,000	400,000			衣服設計システムを活用した高齢者用衣服の設計
加藤 菜葉子	心身健康・臨床心理	助教	女性	挑戦的萌芽研究					1,800,000	長期閉鎖環境下での主観的評価と整理指標にみるストレス予防に関する実証研究
瀧野 教夫	住環境	講師	男性	若手研究(A)					8,100,000	伝統技術に基づく木造社寺建築物の耐震性能評価法と耐震補強法の確立
中田 大貴	心身健康・スポーツ	准教授	男性	若手研究(A)					1,500,000	暑熱環境におけるヒト脳認知機能低下を防ぐ対処法の開発
勝川 路子	食物栄養	助教	女性	若手研究(B)	800,000					COX-2およびPPARを指標としたハープの機能性評価
永井 亜矢子	食物栄養	助教	女性	若手研究(B)	1,500,000	600,000	600,000	1,300,000		小児白血病患者の化学療法中に生じる味覚変化が栄養状態に及ぼす影響
吉本 光佐	心身健康・生活健康	准教授	女性	若手研究(B)					400,000	睡眠時無呼吸によって引き起こされる高血圧は交感神経活動の過剰亢進が原因か？
梅垣 佑介	心身健康・臨床心理	講師	男性	若手研究(B)					1,100,000	うつ・不安の予防・改善のためのインターネット心理援助プログラムの開発と効果検討
山根 隆宏	心身健康・臨床心理	講師	男性	若手研究(B)					600,000	発達障害児の親の援助要請促進に関する基礎的研究
安川 涼子	情報住環境・住環境	助教	女性	若手研究(B)					800,000	繊維材料の風合い評価と質感認知に関する神経メカニズムの統合的研究
工藤 瑠美	住環境	講師	女性	若手研究(B)					1,000,000	浴槽表面のすべり評価方法に関する研究
長野 和雄	住環境	准教授	男性	若手研究(B)	500,000	500,000	600,000			熱・音・光複合環境下における快適標準の開発
安藤 香織	生活文化	准教授	女性	若手研究(B)	900,000	800,000	800,000	1,100,000	500,000	環境配慮型ライフスタイルの双方向的影響：国際比較とペアデータ調査による検討
安藤 香織	生活文化	准教授	女性	若手研究(B)	1,000,000					環境配慮型ライフスタイルの世代間・文化間での伝播：日米独の比較
井口 高志	生活文化	准教授	男性	若手研究(B)		500,000				現代保健医療福祉における「予防」実践に関する臨床社会学的研究
井口 高志	生活文化	准教授	男性	若手研究(B)					500,000	認知症ケアの臨床・歴史社会学とケア概念の再構成
橋本 朋子	生活健康・住環境	助教	女性	若手研究(B)					1,200,000	固体NMR測定によるシルクフィブロイン表面構造の評価

別添資料ⅡーⅠー17:外部資金の獲得状況

種別	年度	学科・講座・コース	研究代表者	職名	性別	企業・団体名等	直接経費	間接経費	合計
22	—		家政学会		法人等	奈良女子大学家政学会	1,200,000		1,200,000
	食物栄養	植野 洋志	教授	男	ビタミンB研究委員会	95,000		95,000	
	食物栄養	前田 純夫	准教授	男	財団法人日本環境財団	500,000		500,000	
	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	日本水産株式会社中央研究所	500,000		500,000	
	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	株式会社ソダSHC	100,000		100,000	
	生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	小林製薬株式会社	200,000		200,000	
	生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	株式会社ノーリツ	250,000		250,000	
	住環境	井上 容子	教授	女	社団法人照明学会	700,000		700,000	
	住環境	藤平 眞紀子	講師	女	本人	540,000		540,000	
	生活文化	鈴木 則子	准教授	女	財団法人コスモロジー研究振興財団	500,000		500,000	
23	食物栄養	井上 裕康	教授	男	財団法人 不二たん白質研究振興財団	1,000,000		1,000,000	
	食物栄養	井上 裕康	教授	男	ご本人(飯島記念・東大の共同研究者あり)	2,998,950		2,998,950	
	食物栄養	小倉 裕範	教授	男	ご本人	3,000,000		3,000,000	
	食物栄養	小倉 裕範	教授	男	琉球大学より移し替え	3,000,000		3,000,000	
	食物栄養	小倉 裕範	教授	男	御本人	3,000,000		3,000,000	
	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	日本水産株式会社中央研究所	500,000		500,000	
	食物栄養	植野 洋志	教授	男	ビタミンB研究委員会	95,000		95,000	
	食物栄養	植野 洋志	教授	男	一丸ファルコス株式会社	200,000		200,000	
	食物栄養	植野 洋志	教授	男	サンスター株式会社	1,000,000		1,000,000	
	食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	公益財団法人 山崎香辛料振興財団	1,000,000		1,000,000	
	食物栄養	前田 純夫	教授	男	財団法人日本環境財団	500,000		500,000	
	食物栄養	久保田 優	教授	男	大塚製薬株式会社	1,000,000		1,000,000	
	生活健康・生活健康	松田 覚	教授	男	財団法人 不二たん白質研究振興財団	500,000		500,000	
	生活健康・生活健康	森本 恵子	教授	女	花王株式会社	500,000		500,000	
	生活健康・生活健康	森本 恵子	教授	女	鳥取大学	200,000		200,000	
	生活健康・衣環境	今岡 春樹	教授	男	奈良女子大学家政学会	720,000		720,000	
	住環境	藤平 眞紀子	講師	女	株式会社淀川製鋼所	950,000		950,000	
	住環境	藤平 眞紀子	講師	女	公益財団法人トステム建材産業振興財団	800,000		800,000	
	生活文化	加茂 祐子	准教授	女	ご本人	50,000		50,000	
24	食物栄養	井上 裕康	教授	男	ご本人(飯島記念食品科学振興財団)	2,898,950		2,898,950	
	食物栄養	井上 裕康	教授	男	公益財団法人 不二たんぱく質研究振興財団	1,000,000		1,000,000	
	食物栄養	井上 裕康	教授	男	公益財団法人 日本食品化学研究振興財団	1,000,000		1,000,000	
	食物栄養	植野 洋志	教授	男	ビタミンB研究委員会	142,000		142,000	
	食物栄養	前田 純夫	教授	男	財団法人日本環境財団	500,000		500,000	
	食物栄養	久保田 優	教授	男	ご本人(公益財団法人痛風財団)	300,000		300,000	
	食物栄養	久保田 優	教授	男	ご本人(痛風核酸代謝学会)	1,200,000		1,200,000	
	生活健康・生活健康	松田 覚	教授	男	清栄薬品株式会社	500,000		500,000	
	生活健康・生活健康	松田 覚	教授	男	株式会社中川政七商店	500,000		500,000	
	生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	株式会社ワコール	120,000		120,000	
	生活健康・衣環境	黒子 弘道	教授	男	株式会社 日東分析センター	800,000		800,000	
	生活健康・衣環境	今岡 春樹	教授	男	公益財団法人 石本記念デサントスポーツ科学振興財団	1,000,000		1,000,000	
	生活健康・衣環境	黒子 弘道	教授	男	住友ゴム工業株式会社	1,000,000		1,000,000	
	生活健康・衣環境	後藤 景子	教授	女	株式会社サムスン横浜研究所	1,000,000		1,000,000	
	生活健康・衣環境	今岡 春樹	教授	男	奈良女子大学家政学会	500,000		500,000	
	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	大阪大学より移換				
	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	鹿島学術振興財団	1,300,000		1,300,000	
	住環境	工藤 瑠美	助教	女	公益財団法人LIXIL住生活財団	350,000		350,000	
	住環境	中山 徹	教授	男	公益財団法人LIXIL住生活財団	1,280,000		1,280,000	
	住環境	中山 徹	教授	男	財団法人国土技術研究センター	1,880,000		1,880,000	
	住環境	中山 徹	教授	男	セントポリア生駒団地管理組合法人	150,000		150,000	
	住環境	増井 正哉	教授	男	ご本人(住宅総合研究財団)	645,900		645,900	
	住環境	増井 正哉	教授	男	ご本人(住友財団)	2,620,219		2,620,219	
	25	食物栄養	井上 裕康	教授	男	公益財団法人 不二たん白質研究振興財団	1,000,000		1,000,000
		食物栄養	井上 裕康	教授	男	財団法人旗影会	1,000,000		1,000,000
		食物栄養	井上 裕康	教授	男	公益財団法人 日本食品化学研究振興財団	800,000		800,000
		食物栄養	井上 裕康	教授	男	公益財団法人 上原記念生命科学財団	5,000,000		5,000,000
食物栄養		植野 洋志	教授	男	ビタミンB研究委員会	170,000		170,000	
食物栄養		久保田 優	教授	男	一般社団法人 奈良親子レスパイトハウス	100,000		100,000	
食物栄養		西尾 素子	特任講師	女	ご本人(公益社団法人米穀安定供給確保支援機構助成金)	700,000		700,000	
生活健康・生活健康		久保 博子	准教授	女	LG電子株式会社	1,000,000		1,000,000	
生活健康・生活健康		久保 博子	准教授	女	株式会社ワコール	250,000		250,000	
生活健康・衣環境		岡本 英生	准教授	女	ご本人(財団法人社会安全研究財団、前任大学から移替)	625,920		625,920	
生活健康・衣環境		橋本 朋子	助教	女	公益財団法人 京都技術科学センター	1,000,000		1,000,000	
生活健康・衣環境		後藤 景子	教授	女	大研医器株式会社	300,000		300,000	
生活健康・衣環境		松本 尚	教授	男	株式会社 Murakumo	1,000,000		1,000,000	
生活健康・衣環境		黒子 弘道	教授	男	住友ゴム工業株式会社	500,000		500,000	
住環境		宮城 俊作	教授	男	ご本人(公益財団法人 大林財団)	1,000,000		1,000,000	
住環境		室崎 千重	講師	女	株式会社市浦ハウジング&プランニング大阪支店	205,000		205,000	
住環境		宮城 俊作	教授	男	公益信託・奥村組建設環境技術助成基金	1,000,000		1,000,000	
住環境		藤平 眞紀子	講師	女	公益財団法人LIXIL住生活財団	580,000		580,000	
住環境		瀧野 敦夫	講師	男	三菱財団研究助成	1,500,000		1,500,000	
生活文化		安藤 香織	准教授	女	ご本人(科学技術融合振興財団)	300,000		300,000	
生活文化	松岡 悦子	教授	女	公益財団法人ユニベル財団	500,000		500,000		
生活文化	青木 美紗	助教	女	一般社団法人 JC総研	500,000		500,000		
26		家政学会		法人等	奈良女子大学家政学会	400,000		400,000	
					奈良女子大学生生活協同組合	214,400		214,400	
	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	堺共同漬物株式会社	300,000		300,000	
	食物栄養	中田 理恵子	講師	女	ご本人(飯島藤十郎記念食品科学振興財団)	1,700,000		1,700,000	
	食物栄養	中田 理恵子	講師	女	公益財団法人 三島海雲記念財団	1,000,000		1,000,000	
	心身健康・生活健康	植野 洋志	教授	男	ビタミンB研究委員会	140,000		140,000	
	心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	ダイキン工業(株)	1,000,000		1,000,000	
	心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	LG Electronics Japan Lab株式会社	200,000		200,000	
	心身健康・臨床心理	山根 隆宏	助教	男	公益信託福原心理教育研究振興基金	460,000		460,000	
	情報衣環境・衣環境	吉田 哲也	教授	男	北海道大学より移換	2,526,887		2,526,887	
	情報衣環境・衣環境	米田 守宏	准教授	男	JUNKEN MEDICAL株式会社	500,000		500,000	
	情報衣環境・衣環境	後藤 景子	教授	女	株式会社サムスン日本研究所	1,000,000		1,000,000	
	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	ご本人(三菱財団研究助成)	1,500,000		1,500,000	
住環境	瀧野 敦夫	講師	男	公益財団法人 旭硝子財団	2,500,000		2,500,000		

種別	年度	学科・講座・コース	研究代表者	職名	性別	企業・団体名等	直接経費	間接経費	合計	
寄附金	26	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	(株)竹中工務店 大阪本店	500,000		500,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	公益財団法人 LIXIL住生活財団	1,140,000		1,140,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000	
		住環境	中山 徹	教授	男	奈良県遊技業協同組合	300,000		300,000	
		住環境	宮城 俊作	教授	男	株式会社三菱地所設計	900,000		900,000	
		住環境	工藤(中川) 瑠璃	助教	女	公益財団法人 LIXIL住生活財団	300,000		300,000	
	27			菊崎 泰枝	教授	女	一般財団法人 旗影会	1,000,000		1,000,000
				瀧野 敦夫	講師	男	公益財団法人 旭硝子財団	2,000,000		2,000,000
					法人等		奈良女子大学家政学会	700,000		700,000
					法人等		奈良女子大学生生活協同組合	342,533		342,533
					法人等		奈良女子大学家政学会	700,000		700,000
		食物科学	井上裕康	教授	男	公益財団法人 タカノ農芸化学研究助成財団 研究助成金	1,000,000		1,000,000	
		食物科学	菊崎泰枝	教授	女	一般財団法人 旗影会	1,000,000		1,000,000	
		食物科学	高村仁知	教授	男	市民生活協同組合ならコープ	150,000		150,000	
		食物科学	高村仁知	教授	男	豊国ヌードル株式会社	300,000		300,000	
		心身健康・生活健康	久保博子	教授	女	ご本人	250,000		250,000	
		心身健康・生活健康	芝崎学	准教授	男	公益財団法人石本記念 デサントスポーツ科学振興財団	500,000		500,000	
		心身健康・生活健康	吉本光佐	准教授	女	公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団	3,000,000		3,000,000	
		情報衣環境・衣環境	後藤景子	教授	女	株式会社サムスン日本研究所	1,000,000		1,000,000	
		情報衣環境・衣環境	米田守宏	准教授	男	ダイワボウノイ株式会社	150,000		150,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	公益財団法人 旭硝子財団	2,000,000		2,000,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000	
		住環境	中山徹	教授	男	奈良県遊技業協同組合	100,000		100,000	
		住環境	中山徹	教授	男	ご本人(生駒商工会議所)	200,000		200,000	
		住環境	室崎千重	講師	女	公益財団法人LIXIL住生活財団	560,000		560,000	
		住環境	室崎千重	講師	女	株式会社市浦ハウジング&プランニング 大阪支店	100,000		100,000	
		生活文化	青木美紗	助教	女	一般財団法人 地域生活研究所	270,000		270,000	
		生活文化	安藤香織	准教授	女	公益財団法人 科学技術融合振興財団	670,000		670,000	
		生活文化	安藤香織	准教授	女	公益財団法人 公害地域再生センター	150,000		150,000	
		生活文化	鈴木則子	教授	女	公益財団法人 武田科学振興財団	800,000		800,000	
					法人等		奈良女子大学家政学会	700,000		700,000
					法人等		奈良女子大学生生活協同組合	342,533		342,533
					法人等		奈良女子大学家政学会	700,000		700,000
		食物科学	井上裕康	教授	男	公益財団法人 タカノ農芸化学研究助成財団 研究助成金	1,000,000		1,000,000	
		食物科学	菊崎泰枝	教授	女	一般財団法人 旗影会	1,000,000		1,000,000	
		食物科学	高村仁知	教授	男	市民生活協同組合ならコープ	150,000		150,000	
		食物科学	高村仁知	教授	男	豊国ヌードル株式会社	300,000		300,000	
		心身健康・生活健康	久保博子	教授	女	ご本人	250,000		250,000	
		心身健康・生活健康	芝崎学	准教授	男	公益財団法人石本記念 デサントスポーツ科学振興財団	500,000		500,000	
		心身健康・生活健康	吉本光佐	准教授	女	公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団	3,000,000		3,000,000	
		情報衣環境・衣環境	後藤景子	教授	女	株式会社サムスン日本研究所	1,000,000		1,000,000	
		情報衣環境・衣環境	米田守宏	准教授	男	ダイワボウノイ株式会社	150,000		150,000	
		住環境	瀧野 敦夫	講師	男	公益財団法人 旭硝子財団	2,000,000		2,000,000	
住環境		瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000		
住環境		瀧野 敦夫	講師	男	株式会社 ジョインウッド	100,000		100,000		
住環境		中山徹	教授	男	奈良県遊技業協同組合	100,000		100,000		
住環境		中山徹	教授	男	ご本人(生駒商工会議所)	200,000		200,000		
住環境		室崎千重	講師	女	公益財団法人LIXIL住生活財団	560,000		560,000		
住環境		室崎千重	講師	女	株式会社市浦ハウジング&プランニング 大阪支店	100,000		100,000		
生活文化		青木美紗	助教	女	一般財団法人 地域生活研究所	270,000		270,000		
生活文化	安藤香織	准教授	女	公益財団法人 科学技術融合振興財団	670,000		670,000			
生活文化	安藤香織	准教授	女	公益財団法人 公害地域再生センター	150,000		150,000			
生活文化	鈴木則子	教授	女	公益財団法人 武田科学振興財団	800,000		800,000			
共同研究	22	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	中小企業支援センター・奈良県・国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学・ナント種苗(株)	105,000	10,500	115,500	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	中小企業支援センター・奈良県・(株)パンドラファームグループ	100,000	10,000	110,000	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	中小企業支援センター・奈良県・田村薬品工業(株)	100,000	10,000	110,000	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	中小企業支援センター・奈良県・ドネー・ドウ・ガトー	100,000	10,000	110,000	
		食物栄養	植野 洋志	教授	男	大和菌学研究	100,000	10,000	110,000	
		食物栄養	塚本 幾代	教授	女	財団法人 奈良県健康づくり財団・味の素株式会社	250,000		250,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社ホームアプライアンス社	1,000,000	100,000	1,100,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社ホームアプライアンス社	800,000	80,000	880,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	東芝キャリア株式会社	454,500	45,500	500,000	
	生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	東芝ホームアプライアンス株式会社	454,500	45,500	500,000		
	生活健康・衣環境	才脇 直樹	准教授	男	日本電気株式会社	954,545	95,455	1,050,000		
	生活健康・衣環境	才脇 直樹	准教授	男	株式会社カネカ			0		
	住環境	井上 容子	教授	女	シャープ株式会社	1,818,000	182,000	2,000,000		
	住環境	井上 容子	教授	女	パナソニック電工株式会社	1,000,000	100,000	1,100,000		
	23	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	株式会社 天平庵	200,000	20,000	220,000	
		食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	三井製糖株式会社	545,455	54,545	600,000	
		食物栄養	塚本 幾代	教授	女	財団法人 奈良県健康づくり財団・味の素株式会社	520,000	77,000	597,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	関西電力株式会社	954,545	95,455	1,050,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社ホームアプライアンス社	1,000,000	100,000	1,100,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	東芝キャリア株式会社、東芝ホームアプライアンス社	909,000	91,000	1,000,000	
		生活健康・衣環境	才脇 直樹	准教授	男	日本電気株式会社	954,545	95,455	1,050,000	
		住環境	井上 容子	教授	女	シャープ株式会社	1,818,000	182,000	2,000,000	
		住環境	井上 容子	教授	女	パナソニック電工株式会社	500,000	50,000	550,000	
	24	食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	株式会社あじかん	545,455	54,545	600,000	
		食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	三井製糖株式会社	700,000	70,000	770,000	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	株式会社 天平庵	200,000	20,000	220,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	東芝キャリア(株)、東芝ホームアプライアンス(株)	909,000	91,000	1,000,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社アプライアンス社技術本部エアコン・コールドチェーン開発センター	500,000	50,000	550,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社アプライアンス社技術本部エアコン・コールドチェーン開発センター	500,000	50,000	550,000	
		生活健康・生活健康	三木 健寿	教授	男	ハウス食品株式会社	400,000	40,000	440,000	
		住環境	井上 容子	教授	女	シャープ株式会社	1,818,000	182,000	2,000,000	

奈良女子大学生活環境学部別添資料

種別	年度	学科・講座・コース	研究代表者	職名	性別	企業・団体名等	直接経費	間接経費	合計	
共同研究	25	食物栄養	井上 裕康	教授	男	メルシャン株式会社	2,727,200	272,800	3,000,000	
		食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	三井製糖株式会社	700,000	70,000	770,000	
	25	食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	株式会社あじかん	545,455	54,545	600,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	株式会社東芝キャリア株式会社	909,000	91,000	1,000,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社 アプライアンス社	810,000	81,000	891,000	
		生活健康・生活健康	久保 博子	准教授	女	パナソニック株式会社 クラウドソリューションセンター	1,000,000	100,000	1,100,000	
		生活健康・生活健康	三木 健寿	教授	男	ハウス食品グループ本社株式会社	2,000,000	200,000	2,200,000	
		生活健康・衣環境	黒子 弘道	教授	男	株式会社クラレ くらしき研究センター	1,050,000	105,000	1,155,000	
		生活健康・衣環境	後藤 景子	教授	女	株式会社サムスン日本研究所	900,000	100,000	1,000,000	
	26	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	株式会社 やまと蜂蜜	300,000	30,000	330,000	
		食物栄養	井上 裕康	教授	男	メルシャン株式会社	2,727,200	272,800	3,000,000	
		食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	三井製糖株式会社	720,000	80,000	800,000	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	アイシン精機株式会社	1,836,000	183,600	2,019,600	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	パナソニック株式会社 クラウドソリューションセンター	500,000	50,000	550,000	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	東芝キャリア株式会社	455,000	45,000	500,000	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	アイシン精機株式会社	100,000	10,000	110,000	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	パナソニック株式会社 オートモーティブ&インダストリアルシステムズ社	3,000,000	300,000	3,300,000	
		心身健康・生活健康	森本 恵子	教授	女	キリン株式会社 R&D本部 健康技術研究所	2,000,000	200,000	2,200,000	
		心身健康・生活健康	三木 健寿	教授	男	ハウス食品グループ本社株式会社	2,000,000	200,000	2,200,000	
	27	情報衣環境・衣環境	黒子 弘道	教授	男	株式会社 クラレ	1,080,000	108,000	1,188,000	
		情報衣環境・生活情報	松本 尚	教授	男	キャンノイメージングシステムズ株式会社	1,080,000	108,000	1,188,000	
		食物科学	井上 裕康	教授	男	太陽化学株式会社	909,091	90,909	1,000,000	
		食物科学	菊崎 泰枝	教授	女	三井製糖株式会社	720,000	80,000	800,000	
		食物科学	菊崎 泰枝	教授	女	株式会社 あじかん	180,000	20,000	200,000	
		食物科学	高村 仁知	教授	男	NTTタウンページ(株)	350,000	35,000	385,000	
		食物科学	中田 理恵子	准教授	女	株式会社ファンケル 総合研究所	981,818	98,182	1,080,000	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	アイシン精機株式会社	1,836,000	183,600	2,019,600	
		心身健康・生活健康	久保 博子	教授	女	東芝キャリア株式会社	909,000	91,000	1,000,000	
		心身健康・生活健康	三木 健寿	教授	男	ハウス食品グループ本社株式会社	2,000,000	200,000	2,200,000	
	受託研究	24	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	特定非営利法人 緑の列島ネットワーク	300,000	0	300,000
			住環境	瀧野 敦夫	講師	男	特定非営利法人 緑の列島ネットワーク	500,000	0	500,000
		25	住環境	瀧野 敦夫	講師	男	立命館大学	525,000	157,500	682,500
			食物栄養	菊崎 泰枝	教授	女	光陽レーズ株式会社			
		26	情報衣環境・衣環境	後藤 景子	教授	男	スーク サイエンス	461,500	138,500	600,000
			住環境	増井 正哉	教授	男	牟岐町	1,834,200	366,840	2,201,040
		27	住環境	山本直彦	准教授	男	桜井市	2,036,340	610,902	2,647,242
住環境			山本直彦	准教授	男	桜井市	2,036,340	610,902	2,647,242	
委託研究		22	食物栄養	井上 裕康	教授	男	独立行政法人 科学技術振興機構	1,000,000	300,000	1,300,000
			住環境	瀬渡 章子	教授	女	独立行政法人 科学技術振興機構	1,000,000	300,000	1,300,000
	23	生活健康・生活健康	松田 覚	教授	男	独立行政法人 科学技術振興機構	800,000	240,000	1,040,000	
		住環境	瀬渡 章子	教授	女	独立行政法人 科学技術振興機構	1,000,000	300,000	1,300,000	
	24	生活健康・生活健康	松田 覚	教授	男	独立行政法人 科学技術振興機構	507,693	152,307	660,000	
		住環境	瀬渡 章子	教授	女	独立行政法人 科学技術振興機構	360,000	108,000	468,000	
	26	食物栄養	井上 裕康	教授	男	京都大学	9,092,090	907,910	10,000,000	
		情報衣環境・衣環境	佐藤 克成	講師	男	慶応義塾大学	1,000,000	300,000	1,300,000	
	27	情報衣環境・衣環境	佐藤 克成	講師	男	慶応義塾大学	5,200,000	1,560,000	6,760,000	
		食物科学	井上 裕康	教授	男	京都大学	7,841,000	234,000	8,075,000	
	協定書等(研究経費なし)	23	食物栄養	植野 洋志	教授	男	独立行政法人 産業技術総合研究所	0	0	0
			生活健康・生活健康	鷹股 亮	教授	女	大塚製薬株式会社	0	0	0
		24	生活健康・衣環境	後藤 景子	教授	女	独立行政法人 産業技術総合研究所	0	0	0
			住環境	工藤 瑠美	助教	女	(株)LIXIL INAX住設・建材開発・マーケティング本部 水まわり総合技術研究所	0	0	0
25		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	ならコープ	0	0	0	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	有限会社 王隠堂農園	0	0	0	
26		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	ホテル日航奈良	0	0	0	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	植村牧場株式会社	0	0	0	
合計額		25	生活健康・生活健康	根岸 裕子	助教	女	奈良県興業技術センター	0	0	0
			生活健康・衣環境	後藤 景子	教授	女	株式会社サムスン 横浜研究所	0	0	0
	26	住環境	藤平 真紀子	講師	女	朝日ウッドテック株式会社	0	0	0	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	奈良交通株式会社	0	0	0	
	27	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	奈良市月ヶ瀬農畜産物処理加工施設	0	0	0	
		食物栄養	高村 仁知	准教授	男	株式会社オカザキ芳庵	0	0	0	
	28	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	植村牧場株式会社	0	0	0	
		生活健康・衣環境	佐藤 克成	講師	男	日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎	0	0	0	
	29	生活健康・衣環境	後藤 景子	教授	女	独立行政法人 産業技術総合研究所	0	0	0	
		住環境	井上 容子	教授	女	シャープ株式会社	0	0	0	
30	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	奈良交通株式会社	0	0	0		
	食物栄養	高村 仁知	准教授	男	堺共同漬物株式会社	0	0	0		
31	情報衣環境・衣環境	後藤 景子	教授	女	株式会社サムスン日本研究所	0	0	0		
	情報衣環境・衣環境	佐藤 克成	講師	男	日本電信電話株式会社	0	0	0		

別添資料Ⅱ-I-18：教員の受賞歴

受賞年	受賞名	受賞者名	職階	所属	概要
2010	日本栄養・食糧学会第49回近畿支部大会若手奨励賞	勝川 路子	助教	食物栄養	受賞時40歳未満の日本栄養・食糧学会会員を対象に、評議員の審査によって日本栄養・食糧学会第49回近畿支部大会における数多くの口頭発表の中から優れた講演に対して授与された。発表題目は、「COX-2およびPPARを指標としたシトラルの機能的評価」。
2010	平成21年度繊維学会賞	黒子弘道	教授	衣環境	繊維科学について、独創的で優秀な研究を行い、更に研究の発展が期待される研究者に贈られる賞で、受賞テーマは「固体NMRおよび量子化学計算を併用した高分子の高精度構造解析法の開発」。
2010	平成22年度日本繊維機械学会フェロー	米田守宏	准教授	健康・衣環境	「繊維ならびに繊維機械の学術、技術の発展向上に顕著な貢献を行った方に日本繊維機械学会フェローの称号を与え、会員の地位向上ならびに国際活動をより円滑にし、併せて本学会のより一層の活性化を図ることを目的とする(日本繊維機械学会フェローに関する規定第1条)」により、平成22年度日本繊維機械学会フェローとして認定された。平成22年度の受賞者は、本人を含め10名。
2010	平成22年度科学研究費補助金審査委員の表彰	才脇直樹	准教授	健康・衣環境	科学研究費の第1段審査において模範となる審査意見を付した審査委員として表彰された。
2010	平成22年度日本家政学会奨励賞	牧野 唯	助教	住環境	家政学の進歩に寄与する優れた研究を行い、将来の発展が期待しうる満40歳未満で正会員歴3年以上の者に対して授与される。受賞の対象となった研究は「歴史的居住地における家族の居住形態からみた住様式と住空間計画に関する研究」である。
2011	国際食品保健因子学会[11月20日～23日(台北)]におけるポスター賞	井上裕康	教授	食物栄養	4年に1度、食品の機能性を研究している世界中の研究者が集まる「国際会議ICOFF2011」において、すぐれたポスターについて与えられる(年齢等の制限なし)。今回は、本学の中田理恵子講師との共同研究で、最近発表した英語論文3報分を総括する形で発表した。なお、そのうちの一つの論文については、アメリカ生化学分子生物学会(ASMBM)よりハイライトに選ばれ、世界中に配信された。
2011	第2回 あしたのなら表彰	高橋裕子	教授	保健管理センター	特定の分野や年齢、経験年数にとらわれず、奈良のPRや魅力向上に寄与する活動や、県民に元氣や感動を与えてくれるような活動を行っている個人または団体を表彰するもの
2012	日本建築学会賞(論文)	井上容子	教授	住環境	1949年設置。建築に関する学術・技術・芸術の進歩発達をはかるとともに、わが国の建築文化を高める目的で、建築に関する特に優秀な業績を表彰する。近年中に完成し発表された研究論文であって、学術の進歩に寄与する優れた論文を対象とする。業績名「視覚特性の個人差に対応した視環境計画法に関する研究」
2013	日本建築学会賞(業績)	増井正哉	教授	住環境	1963年設置。建築に関する学術・技術・芸術の進歩発達をはかるとともに、わが国の建築文化を高める目的で、建築に関する特に優秀な業績を表彰する。近年中に完成した業績であって、学術・技術・芸術などの進歩に寄与する優れた業績を対象とする。業績名「ガンダラム教遺跡・ラニガト寺院址の調査と保存」
2015	2015年度ネスレ栄養科学論文賞	滝澤祥恵	助教	食物栄養	論文「The 4'-hydroxyl group of resveratrol is functionally important for direct activation of PPAR α 」
2015	優秀演題	高地リベカ	教授	食物栄養	Randomized controlled crossover trial of salt reduction: (2) effect of monitoring salt concentration.
2015	科学研究費助成事業審査委員(書面審査)表彰	久保博子	教授	健康	日本学術振興会の科学研究費助成事業は、適正・公平な配分審査に努め、第1段審査(書面審査)と第2段審査(合議審査)の2段階で行われている。審査終了後に行われる審査の検証結果に基づき、第2段審査に有意義な審査意見を付した第1段審査委員を選考し表彰している。
2015	日本青年心理学会第7回学会賞	岡本英生	教授	臨床心理	
2015	日本心理学会平成27年度優秀論文賞	山根隆宏	講師	臨床心理	Benefit findingが発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果
2015	衣笠繊維研究所繊維学術賞	安川涼子	助教	衣環境	繊維学及びその基礎科学領域の研究及びその実用化研究を行う若手研究者に対して表彰する。研究成果は京都府内で関わったものが望ましい。受賞タイトル「伝統工芸染織の感性工学的評価と応用に関する研究」
2015	地域農林経済学会個別報告優秀賞受賞	青木美紗	助教	生活文化	
2015	奈良ソロプチミスト女性研究者賞	山崎明子	准教授	生活文化	女性の手仕事と地位の変化に関する研究
2015	年間論文賞	後藤景子	教授	衣環境	布の消費性能に及ぼす柔軟剤処理の影響
2015	日韓バイオマテリアル学会若手研究者交流AWARD	橋本朋子	助教	衣環境	日本バイオマテリアル学会と韓国バイオマテリアル学会が協調的発展を鑑みすすめている交流プログラムにおいて日本バイオマテリアル学会会員(2014年3月31日現在で満35歳未満)から書類審査で選出する賞。受賞タイトル: Quantitative analysis of cell migration and ECM-related gene expression on silk fibroin-based biomaterials

研 究

人間文化研究科

(別 添 資 料)

目 次

別添資料 I - 1 : 日本古代の都城と木簡の研究の研究会、シンポジウムの開催日時、 内容	P 1
別添資料 I - 2 : 環境歴史科学創生分野の主な研究成果	P 2
別添資料 I - 3 : 「差異と交感の人間学」プロジェクトの研究活動実績	P 3
別添資料 I - 4 : 「コミュニティで作る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域 研究開発プロジェクト事後評価 評価報告書の抜粋	P 3
別添資料 I - 5 : ライフサイエンスセミナー開催日時、内容	P 4
別添資料 I - 6 : 数学・物理学・情報科学の研究交流シンポジウム開催日時、内容	P 5

別添資料 I - 1 : 日本古代の都城と木簡の研究の研究会、シンポジウムの開催日時、内容(奈良女子大学開催分)

①研究会 毎回約20名参加。奈良女子大学において開催

年度	開催日	テーマ
H22年度	6月21日	遷都から見る日本史 1
	8月5日	都市を生きる人々
	9月29日	遷都から見る日本史 2
	10月14日	古代を見直す 1
	1月25日	古代を見直す 2
	3月25日	平城京に住む人びと
H23年度	5月28日	みやこを見直す(国際研究会(韓国人研究者を交える))
	6月20日	<みやこ>観の変遷
	8月29日	遷都から見る日本史
	11月26日	古代のみやこを考える
H24年度	10月5日	大和の山々と飛鳥・藤原・平城京
	10月25日	古代のみやこを考える
	10月28日	福原の時代-宗教と和歌-
	11月24日	古代都市の環境・景観復原のための地理情報データベースの構築
H25年度	5月14日	古代のみやこを考える
	6月12日	古代のみやこを考える
	6月12日	古代のみやこを考える
	7月30日	古代のみやこを考える
	10月7日	古代のみやこを考える
	12月6日	古代のみやこを考える
	1月22日	古代のみやこを考える
H26年度	7月16日	古代のみやこを考える

② シンポジウム

「歴代遷宮と古墳の思想」 2010年11月27日 於 奈良女子大学 約35名

③ 都城制研究集会シンポジウム(主催:奈良女子大学古代学学術研究センター)

開催日	テーマ	参加者数	共催
2011年2月12日	第5回 「都城の廃絶とその後」	約100名	都城制研究会(大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型- 研究代表:脇田修)
2012年2月5日	第6回 「古代都城をめぐる信仰形態」	約120名	都城制研究会(大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型- 研究代表:脇田修) 科研費「古代都城・都市をめぐる環境論」(研究代表:舘野和己)研究グループ
2013年2月16日	第7回 「古代都城と寺社」	140名	都城制研究会(大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型- 研究代表:脇田修) 科研費「古代都城・都市をめぐる環境論」(研究代表:舘野和己)研究グループ
2013年2月16日	第8回「東アジア古代都城の立地環境」 ※中国・韓国の研究者を招聘し、日本・中国・韓国・ベトナム都城を議論の対象に、国際シンポジウムとして開催	約150名	都城制研究会(大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型- 研究代表:脇田修) 科研費「古代都城・都市をめぐる環境論」(研究代表:舘野和己)研究グループ
2015年2月11日	第9回 「古代都城のその後と古都へのまなざし」	約200名	大阪歴史博物館・奈良県立万葉文化館 奈良女子大学研究推進プロジェクト 「古代平城京域の空間変化」研究グループ(代表:舘野和己)
2015年12月19日	第10回「日本古代の都城を造る」	約180名	公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

別添資料 I - 2 : 環境歴史科学創生分野の主な研究成果

古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業

研究成果の公開・発表状況は以下の通り。アンダーラインは、当事業の研究組織（研究代表者：中沢隆）に属する研究者。

I 学会発表、論文等

1. 宮路淳子, 中沢隆, 松尾良樹, 高田将志, 鈴木孝仁, 舘野和己, 山崎雄三^{*1}, 河原一樹「膠のコラーゲンの MALDI 質量分析による動物種の同定」, *日本文化財科学会第27回大会*, 関西大学, 2010年6月(要旨集, pp. 66-67)
2. 中沢隆, 鴻池亜弥, 九山浩樹^{*2}, 西村紀^{*2}, 松尾良樹「貝殻タンパク質の化学と考古学・古代学の接点」, *古代学* **3**, pp. 16-24, 奈良女子大学古代学学術研究センター, 2011年3月
3. Takashi Nakazawa, Atsuko Miyaji, Yoshiki Matsuo, Yuzo Yamazaki^{*1}, "Identification of animal species by the MALDI-MS of collagen in animal glues used in archaeological materials" **58th ASMS Conference on Mass Spectrometry and Allied Topics**, Salt Lake City, Utah, 24-27 May, 2010.
4. Kazuki Kawahara, Yuzo Yamazaki^{*1}, Miho Muguruma, Naomi Ueda^{*3}, Akira Yamauchi^{*3}, Atsuko Miyaji, Yoshiki Matsuo, Takashi Nakazawa "Identification of animal species of collagen contained in Chinese ink stick using MALDI mass spectrometry" **第83回日本生化学会大会**, 神戸国際会議場, 2010年12月
5. Atsuko Ogami, Hiroki Kuyama^{*2}, Osamu Nishimura^{*2}, Chihiro Nakajima^{*2}, Takashi Nakazawa "Distinction of animal glues based on the proteomics of collagen" **第83回日本生化学会大会**, 神戸国際会議場, 2010年12月

[*1 島津製作所 ; *2 大阪大学蛋白質研究所 ; *3 元興寺文化財研究所]

II シンポジウム・講演等

1. 中沢隆 「MALDI-MS法による考古資料に用いられた動物膠のコラーゲンの種の同定」, **シンポジウム「膠(にかわ)」**, 奈良女子大学, 平成22年6月5日.
2. 中沢隆 「墨の膠(ニカワ)から昔の奈良を考える」, **2010年『なら講座』-奈良から歴史・人間・環境を考える(15)**, 奈良県大学連合主催, 奈良女子大学記念館, 平成22年6月13日.
3. 宮路淳子 「奈良女子大学所蔵牽牛子塚古墳出土夾紵棺について」, **シンポジウム「夾紵(きょうちよ)」**, 奈良女子大学, 平成23年1月22日.
4. 河原一樹 「牽牛子塚古墳出土夾紵棺断片中の絹」, **シンポジウム「夾紵」**, 奈良女子大学, 平成23年1月22日.
5. 中沢隆 「膠のコラーゲンから読み取る自然科学・人文社会情報」 **シンポジウム「墨と膠」**, 奈良女子大学, 平成23年5月21日.

III 研究に関するマスコミ報道等

「古墳のひつぎから絹を検出」, ニュース: ならナビ, NHK 奈良, 平成23年2月10日

「古墳のひつぎに絹使用を確認」, ニュース, NHK, 平成23年2月11日

IV 研究内容／組織／データベースの公開

ホームページ: <http://www.nara-wu.ac.jp/proteome/aprp/index.html>

別添資料 I - 3 : 「差異と交感の人間学」プロジェクトの研究活動実績

年度	日付	形態	テーマ	報告／登壇者(敬称略)	参加人数	会場
23年度	平成23年9月20日	研究会	最初期の少年野球小説に見る『男らしさ』—「運動の精神」と「野球美談」—(1)	功刀俊雄(本学)	5	本学F406
	平成23年11月21日	研究会	最初期の少年野球小説に見る『男らしさ』—「運動の精神」と「野球美談」—(2)	功刀俊雄(本学)	4	本学F406
	平成23年12月17日	公開シンポジウム	現代社会における若者の居場所	中村伸一(中村心理療法研究所室長) 池田曜子(本学博士研究員) 益川優子(中京学院大学中京短期大学部准教授) 鮫島京一(奈良女子大学附属中等教育学校教諭) 岡澤祥訓(奈良教育大学教授)	80	本学N202
	平成23年12月18日	研究会	心理学からみた家族関係の今	中村伸一(中村心理療法研究所室長) 村田紀子(本学大学院前期課程) 諏澤宏恵(本学大学院後期課程) 足立法子(本学大学院後期課程)	15	本学N202
	平成24年1月21日	研究会	ゲーテ自然科学のアクチュアリティ	西村拓生(本学)	10	本学F406
	平成24年2月11日	研究会	押川春浪の閉じられた冒険—「少年冒険小説作家」の誕生をめぐる—	鈴木康史(本学)	5	本学F406
24年度	平成24年8月25日	検討会	「〈少年〉性の再生産」検討会	功刀俊雄(本学)	3	本学F406
	平成25年2月16日	検討会	「〈少年〉性の再生産」検討会	鈴木康史(本学)	3	本学F406
	平成25年2月22日	研究会	サポートとつながりの心理学	二宮麗(本学学部生) 瀬戸香澄(本学学部生) 森下文(本学大学院前期課程)	8	本学N215
	平成25年3月7日	公開研究会	ケアの倫理と純粋贈与	矢野野司(京都大学大学院教育学研究科教授) 麻生武(本学)	30	本学Z302
26年度	平成27年2月23日	公開研究会	「おくりもの」としての物語—子どもと大人が出会う場所—	矢野野司(京都大学大学院教育学研究科教授)	50	佐保会館
27年度	平成28年2月20日	公開研究会	なにが一緒に、どこが違う？—障児への支援について考える	木下孝司(神戸大学大学院教授) 麻生武(本学名誉教授) 狗巻修司(本学)	23	本学M214

別添資料 I - 4 : 「コミュニティで作る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域 研究開発プロジェクト事後評価 評価報告書の抜粋

2-3. 「高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発」(カテゴリーII)

研究代表者：寺岡 伸悟(奈良女子大学 文学部人文社会学科 教授)

2-3-1. 総合評価

研究開発目標の達成状況、社会的貢献の状況及び将来展開の可能性、研究開発を通じての新たな知見の取得等の研究開発成果の状況を総合的に見て、十分な成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、過疎や高齢化によってその存続について様々な課題に直面する我が国の中山間地の農村コミュニティの1つである奈良県下市町をフィールドにして、高齢者でも容易に扱える新しい電動運搬車と「らくらく栽培」システムを導入することで畑のバリアフリー化を実現し、高齢営農者が楽しく生き生きと農業を営める環境の構築を目指した。その実現のため、コミュニティの状況を調査し、コミュニティ構成員による将来展望を支援する集落の点検手法を開発した。

住民の継続的な生業を基本とし、住民と自治体が一体となったアプローチが取られたことを高く評価する。農山村の基本的な構成要素をコミュニティ(ムラ)、生業(農業)、からだ(健康)、道具(機械)の4つの次元に分類したことは独自の視点であり、それに関わる各研究グループが、専門性と他領域への関心を活かしつつ、それぞれが課題設定し、住民・組織をエンパワーメントしながら一体となって解決を目指したことが有効に機能したといえる。その結果、電動運搬車の開発や、コミュニティの経済的自立を促す団体の設立3、下市町の組織の見直し(地域づくり推進課の新設)や政府助成事業への申請・採択等、地域社会のアクションにつなげることに貢献した。

3本プロジェクトでは、柿葉生産者と柿葉を利用する柿の葉すし業者とを仲介していた事業者が平成24年度に健康上の理由で廃業したことにより、その事業者も交えて柘原地区の柿葉生産者と協議し、カキ葉、果実等の生産品の生産・販売を支援するため、業者との仲介、技術の紹介等を行った。最終的に、柘原地区で柿葉栽培・販売を担う法人(農事組合法人旭ヶ丘農業生産販売協同組合)が設立された。

集落点検法では、農業を続けられる条件を模索する上で、「コミュニティの10年後」という時間軸を設定し、地域の住民が共通の認識を持ち、連携していくことが大事だということを示した。これは高齢者の就労や生きがい作りにとどまらず、農村地域全体の将来を見ずえた事業展開を可能にするものであろう。研究開発期間終了後の継続性を考慮し、自治体にも参画を求めて地域社会を支える仕組みを検討したことや、「柿の葉」生産という新たな事業に結びつけた成果は大きい。3年間という短い期間の中で、これだけの成果をあげたことは特筆すべきことである。今後、成果をアクションリサーチとして論文等にまとめていくことを期待したい。

別添資料 I - 5 : ライフサイエンスセミナー開催日時、内容

開催日	講師	テーマおよび概要	参加人数
平成 22 年 12 月 4 日	国立循環器病研究センター研 究所 生化学部 若林 繁夫 部長	「Na ⁺ /H ⁺ 交換輸送体：分子から病態へ」 心臓における Na ⁺ /H ⁺ 交換輸送体の機能と病態との関連 についての研究	15 名
平成 23 年 11 月 25 日	岡山県立大学保健福祉学部 山下 広美 教授	「酢酸の生理機能と脂質代謝調節」 酢酸の摂取によって脂質代謝がどのように変動するのか についての研究	25 名
平成 23 年 12 月 5 日	Duke 大学 松波 玄明 先生	「遺伝子と匂い感覚の個人差」 ヒトが匂いを感知する仕組みとそれに関連する遺伝子多 型についての研究	20 名
平成 23 年 12 月 12 日	モネル化学感覚研究所 松本 一朗 先生	「味覚研究の最近の知見」 味覚を受容する機構についての最新の研究	15 名
平成 23 年 12 月 22 日	大阪大谷大学薬学部 野口 民夫 教授	「栄養素と遺伝子発現」栄養状態によって変動する遺伝子 発現とその調節機構の研究	20 名
平成 24 年 11 月 19 日	国立循環器病研究センター研 究所 生化学部 日野 純 室長	「骨代謝調節因子 BMP-36 - その発見の経緯と新たな抗 肥満因子としての可能性について -」 単離・精製したペプチドの BMP-36 について、その発見 のプロセスと生理機能の研究	20 名
平成 24 年 12 月 6 日	大阪大学蛋白質研究所 田中 秀明 助教	「謎の巨大粒子ボルトの全体構造決定」発見および全体の 構造決定をした蛋白質ボルトについての研究	15 名
平成 24 年 12 月 20 日	藤田保健衛生大学総合医科学 研究所 宮川 剛 教授	「「こころ」は遺伝子でどこまで決まるのか」 遺伝子改変マウスの表現型解析による遺伝子・脳・行動の 関係についての研究	20 名
平成 25 年 6 月 28 日	鹿児島大学大学院医学研究科 宮田 篤郎 教授	「PACAP 特異的受容体 PAC1 の正と負の発現調節機序」 単離・精製した神経ペプチド PACAP の生理機能と、その 特異的受容体 PAC1 を介した発現調節機構の研究	20 名
平成 25 年 12 月 6 日	お茶の水女子大学生生活科学部 藤原 葉子 教授	「かしこい油の選び方 - 脂質栄養の基礎から分子レベ ルまで -」 油を構成する脂肪酸の代謝と様々な生理機能の研究	25 名
平成 26 年 6 月 25 日	国立循環器病研究センター研 究所 生化学部 宮里 幹也 部長	「新規生理活性ペプチドの探索と機能解析」 新規に単離された生理活性ペプチドの機能と作用機序に ついての研究	20 名
平成 26 年 10 月 24 日	富山大学大学院医学薬学研究 部 (医学) 井ノ口 馨 教授	「わたしたちはどのように記憶するのか？」 記憶が脳内に蓄えられる仕組みや記憶を人為的に脳内に 埋め込む最新の研究	20 名
平成 26 年 11 月 28 日	国立循環器病研究センター 研究所 分子病態部 宮田 敏行 部長	「血栓症はどうして起こるのか」 脳梗塞・心筋梗塞の原因となる血栓症に関する研究の一端 を、基礎・臨床の両面から講演	15 名
平成 27 年 9 月 11 日	京都大学大学院農学研究科 柘田 哲哉 助教	「甘みタンパク質の構造と機能」甘みタンパク質および甘 み受容体の構造と機能に関する研究	10 名
平成 27 年 11 月 13 日	国立循環器病研究センター 病院 脳血管内科 横田 千晶 医長 研究所 分子病態部 小亀 浩市 部長 北海道大学 アイソトープ総合センター 久下 裕司 教授	「脳・心血管イベント予防のための最新知見」 臨床・基礎の両面からの 3 名が講演。 ・脳卒中って何でしょう？(横田) ・日本人だけが持っている血栓性遺伝子多型(小亀) ・分子イメージングって何でしょう？ ～先端研究を理解する～(久下)	15 名

別添資料 I - 6 : 数学・物理学・情報科学の研究交流シンポジウム開催日時、内容

年度	発表者 (所属 奈良女子大学所属者は省略)	タイトル
H22年12月11日 (土)	坂上貴之 (北海道大学大学院理学研究科数学部門)	多重連結領域の点渦力学
	市原由美子	解析を用いた整数論
	松本浩典 (名古屋大学現象解析研究センター)	宇宙に潜む暗黒加速器
	太田直美	宇宙でダイナミックに進化する銀河団を捉える
	手老篤史 (JSTさきがけ)	アメーバが迷路を解く話
	高須夫悟	生物学における個体群動態の数理
H23年度12月3日 (土)	嶽村智子	数理モデルとしてのブラウン運動
	藤原司 (兵庫教育大学大学院学校教育研究科)	飛躍を持つ確率過程と数理ファイナンス
	森山雅雄 (長崎大学大学院工学研究科)	衛星からの地表面温度推定アルゴリズム開発
	齋藤尚子 (千葉大学環境リモートセンシング研究センター)	温室効果ガス観測技術衛星 (GOSAT) による温室効果気体濃度の高度分布導出アルゴリズム
	吉岡英生	固体中のディラック電子系—グラフェンを中心に—
	神田晶申 (筑波大学数理物質系)	グラフェンの電気伝導の実験とデバイス応用の可能性
H24年度12月8日 (土)	狐崎創	成長するひもの形の時間発展
	郡宏 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)	生物リズムの数理的な研究
	岡崎武生	保型形式とゼータ関数について
	笥三郎 (立教大学理学部数学科)	特殊関数と可積分系
	高田雅美	可積分系の機能数理による特異値分解アルゴリズム
	吉田裕亮 (お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科)	非可換確率空間での合成積の変形
H25年度12月7日 (土)	張 娟姫	曲面上の曲線が作る複体とその応用
	川口 良 (九州産業大学)	代数多様体の不変量と多面体
	村上 匡且 (大阪大学)	高密度圧縮のための超球次元の衝撃波生成と自己相似解の発見
	田口 俊弘 (摂南大学)	強磁場印加型高速点火レーザー核融合
	高橋 智	魚類左右性のダイナミクスと遺伝システムの進化
	久慈 誠	地球観測データからの大気環境情報の推定
H26年度12月6日 (土)	加瀬遼一	道多元環とクイバーの表現
	榎本直也 (電気通信大学)	対称性の数理と表現論
	清野健 (大阪大学)	非ガウス過程の数理とその応用: 心拍ゆらぎの非ガウス性と健康
	戸田幹人	生体分子の分子動力学データに対する時系列解析: ウェーブレットと集団運動
	鴨浩靖	ユークリッド幾何と数式処理: マルファッチの問題 (三斜三円術) とグレブナー基底
	立木秀樹 (京都大学)	イマジナリーキューブ・パズル
H27年度12月19日 (土)	篠田正人	強いコンピュータ将棋を作るための数学
	縫田光司 (産業技術総合研究所/JSTさきがけ)	入力が隠された関数の計算
	坂本宏 (東大素粒子センター)	エクサバイトスケールに近づく物理実験データ処理 「—LHC加速器ATLAS実験の取り組み—」
	宮林謙吉	素粒子実験のデータ解析における統計・複素関数・数値計算 「—Belle/Belle II実験の実例—」
	山下靖	グラフの平面被覆について
	加古富志雄	GCD計算における機械学習による最適アルゴリズムの選択